UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFOと宇宙哲学の専門誌

コンタクティー

WINTER
1984

87

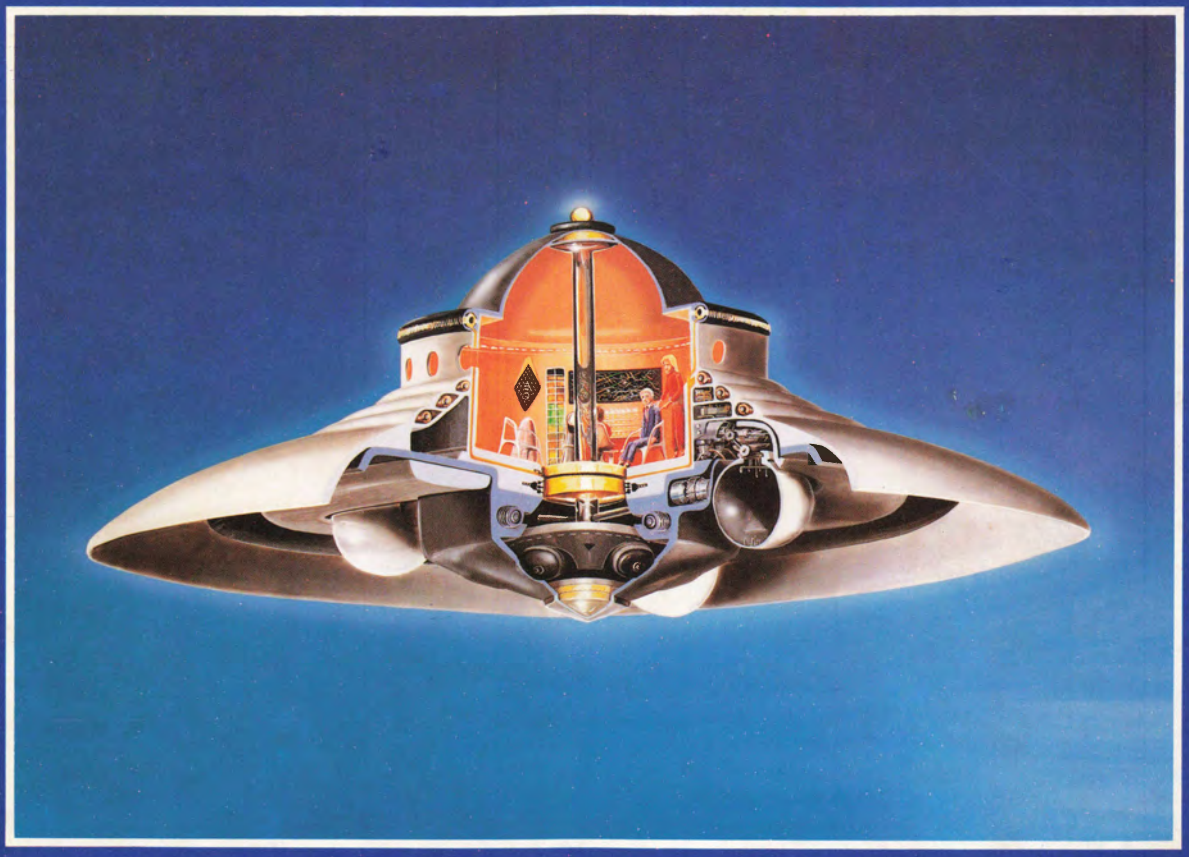
月と地球は空洞のコアをもつ天体か

絶対に真実であったアダムスキーの体験

丸窓の並んだ母船が出現！

二十一世紀の地球

異星人イエスの足跡を訪ねて



UFO contactee 第87号目次

〈巻頭言〉 UFOと大衆 ―― 1
月と地球は空洞のコアをもつ天体か ― ウィリアム. L. ブライアン ―― 2
宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする ジェニー・アベ 7
絶対に真実であったアダムスキーの体験 ―― 遠藤昭則 8
丸窓の並んだ母船が出現！ ―― 後藤澄子 16
二十一世紀の地球 ―― 松原眞弓 18
異星人イエスの足跡を訪ねて ―― 久保田八郎 22
イスラエル＝スイスの旅の思い出（1） ―― 参加者一同 32
〈報告〉大阪支部大会／新潟支部大会／札幌・旭川合同支部大会 ―― 34
〈〃〉昭和59年度日本GAP総会 ―― 35
〈読者の声〉コズミック・ポスト ―― 36
〈予告〉神奈川支部大会／60年度海外研修旅行 ―― 38
〈広告〉アダムスキー全集／ルールドの奇跡 ―― 39
日本GAP全国月例研究会案内 ―― 40

GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙イラストは金星の円盤の内部想像図。日本ＧＡＰ札幌支部会員・勝又英嗣氏画。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

〈巻頭言〉

UFOと大衆

昭和36年の九月にGAP活動を開始して以来、今年の九月で満二十三年になる。その間多くの出来事があり、身辺がめまぐるしく変化し、多数の人が去来した。UFO問題にたいする一般人の知識も高まって隔世の感がある。今夏のロサンジェルス・オリンピックの閉会式では空中に巨大な円盤を出現させ、ET（宇宙人）がスタジアムに立って、「面白そうなことをやっているので見に来た」と挨拶した。アメリカならではの奇抜なアイデアである。

しかしUFOの正体については依然として謎扱いし、発進地、機体、知的生物の存在などに関しては明確な線が浮かんでこない、というのが一般の現状である。アダムスキー問題も肯定よりは否定論のほうが多い。この原因はわれわれの太陽系の地球以外の惑星に人間のような高等生物が住む可能性はないと大衆が信じ込まされている点にある。果たしてそのとおりなのだろうか。

かつて金星探査機が金星の表面に不思議な白熱光を大規模に発見したと新聞に報じられたことがあるが、この報道はショッキングなニュースにはならずに消えてしまった。米政府の一部高官やトップクラスの少数の科学者は、われわれの太陽系の地球以外の惑星群に高度な進化をとげた人類が存在していることを知って知り抜いているけれども、現状ではどうすることもできないので、ひた隠しにしているのだと、編者はアメリカでUFO研究家から聞いたことがある。この研究家は政府の役人の訪問を受けて、そのことを聞かされたという。

大衆やマスコミにも一端の責任があるのだろうが、大国政府が重大きわまりない驚異的な事実を隠し、正反対な発表をして大衆をあざむいていると考えられるフシがUFOや惑星問題には充分ある。特に米空軍がUFOに関していい加減な説明をしてきたことは、むかしからUFO研究界でよく知られていた。

なぜ真相を隠すのか？　いうまでもなく価値観の大変化による教育界や経済界の大混乱と世界的なパニックの発生を恐れているからである。

まさか、それほどまでは、と思う人は一九三七年の火星人襲来事件を思い起こすとよい。この年、有名な俳優兼監督のオーソン・ウェルズが組織するマーキュリー劇団がラジオで放送したSF劇『宇宙戦争』で、タコのような形をした〝火星人〟が大挙してアメリカへ着陸し、各地に襲いかかっていると迫真的な演技をやったとき、大混乱が生じて多数の発狂者まで出たという事実がある。こうしたパニックに乗じて戦争も発生しかねない。

だいいち、米政府が太陽系の地球以外の諸惑星に偉大な文明が存在していると公表しても、ソ連はこれに猛反発して、アメリカの権威の失墜を図ろうと画策するだろう。そのソ連政府も他の惑星の驚くべき真相を探知していると思われるが、極秘主義のこの国は発表どころかアメリカの勇み足を手ぐすねひいて待ち構えているのかもしれない。

こうして謀略が渦巻き、互いの手の内を知ろうとすさまじい諜報活動とかけひきが展開している新冷戦時代に、世界的規模で対ソ優位の確立をめざすレーガン大統領の米政府が「地球以外の惑星に人間がいる」というような間の抜けた発表をするわけがない。それどころかSALT1（第一次戦略兵器制限交渉）暫定協定以来SALT2、START（戦略兵器削限交渉）、INF（中距離核戦力）制限交渉その他の軍縮問題もなかば空文化し、ソ連の核兵器運搬手段が優位になってエスカレートする一方では、到底UFO問題どころではあるまい。

以上は、「米政府が他の惑星の真相を知っているのなら、なぜ発表しないのか」という疑問をもつ人への説明である。

しかしUFOは依然として出現し続けている。本誌先号の素晴らしい目撃報告の掲載以後も、国内の各地でひんぴんと円盤や母船が見られた実例が編者に報告されている。特に九月には国内のある地方で驚異的な大事件が発生した。これはアダムスキーの体験が真実であることを証明する重大な出来事であって、詳細は次号に掲載する予定であるから期待されたい。

これの意味するところは、要するに地球以外の惑星に人類が存在し、いわゆる空飛ぶ円盤といわれるスカウト・シップ、特にアダムスキーが伝えた金星型円盤なるものはまぎれもなく地球に飛来しているということにある。

この型のスカウト・シップはこれまでにも世界各地で出現しており、日本でも目撃されていることは多くの報告で明らかである。だれが何と言おうと、どのように否定しようと、他の惑星から来る宇宙船は地球の上空を飛んでいるのであって、これは厳然たる事実である。しかも近頃は、GAP会員の熱心な人たちがテレパシーで空中に送信すると、それに応えるかのように飛行物体や光体が出現する例が多くなってきた。何かの重大事発生の前兆ではないかと思われるような現象が頻発しているのだ。なかには明瞭な円盤の写真を撮影している人もあるが、事情あって公開を差し控えている。

こうしたことを容易に信じない人が多いかもしれないが、しかし未来の地球文明に大変革をもたらすかもしれないUFO問題は、いずれ確実に大衆の意識の中に浸透してゆくだろう。そしてアダムスキーの体験が絶対に真実であったことも認められるようになるだろう。世界のUFO出現の状況からみてそのように断言できるのである。

だがGAP活動に専念するわれわれはアダムスキーの伝えた偉大な宇宙的哲学の研究実践を主体にする必要がある。なぜならアダムスキー問題には宇宙的な科学のみならず形而上的な要素が根本をなしているからだ。そのティーチングを重視するからこそGAPにはスペース・ピープルからの援助があるのだろう。

間違いだらけのオーソドックス科学者の発言

■翻訳連載権独占■

月と地球は空洞のコアをもつ天体か

MOONGATE

月の地震の異常な反響

ウィリアム・L・ブライアン　久保田八郎訳

（連載第5回）

第8章　月の地質と、地球＝月システム

月の地質を調べてみると、月には強い表面引力と地球に似た多量の空気が存在する証拠をさらに示している。アポロ宇宙船が集めた地質に関する別な情報によると、月の内部構造に関する手がかりが得られるのである。

大抵の人が月について考える場合、クレーターを心中に描くが、これは月の一様相にすぎない。その他に注意を引くものとしては月面の〝海〟、山、谷、割れ目、地表や谷をつらぬいて曲がりくねっている水路みたいな川などがある。だがときとしてクレーターがこれらの細部を覆い隠している。

かつて月には地球に似た表面があったのではないかと思わせるほどだが、結局はすさまじい力で打撃を受けて、徹底的に破壊されたのである。

過去に月に干渉した文明があった？

従来のオーソドックスの科学者のほとんどは、月には地球の六分の一の弱い引力しかないので、大気が存在したはずはないと信じている。そして月面の特長のすべては隕石の落下、火山活動、太陽風の攻撃の結果だと理論づけをしている。

しかし大気がなければ川や風化作用などはないだろう。彼らは月は現在も過去も死の世界であったと主張する。だがオーソドックスの科学者の大部分は、優秀な武器で惑星の表面を破壊するか、または惑星全体をこなごなにするような文明（複数）が存在した可能性を考えようともしないのだ。こうした態度のために、月、地球、他の惑星などに見られるあらゆる現象にたいして、彼らは自然の原因を見いだすより他に方法はないのである。これが現在までの月の地質に関する諸発見にたいする科学的解釈の傾向であった。

また、いま述べたような可能性を過去の文明がもっていたとすれば、いまも間違いなく存在する文明もあると考えてよい。高度に発達した宇宙開発技術を応用すれば、一つや二つの惑星を消滅させてもあらゆる惑星の生命を破壊することにはならないだろう。闘争から生き残った多くの人は他の惑星や宇宙植民地を占領するだろう。もしオーソドックスの科学者が遠い過去における月の地質に知的な介入があったと考えるならば、彼らはその文明の残り物やUFOのごときものについてすぐに考えるようになるだろう。

狭い知識しか持たぬ科学者

月の地質学専門家のあいだでは、月の内部は熱いと信じる人と、冷たいと信じる人との議論が主流をなしていた。ほかにも、月はかつて熱かったが、その後冷えたと信じている人がいる。

クレーターのほとんどは隕石で造られたと信じる人もあるし、もとは火山活動によるものだと考える人もある。月の海は、内部からしみ出た火山活動の溶岩が、月が隕石の直撃を受けた後に、そこに流れ込んで盆地を造ったと考えている一グループもある。この人たちは、そのしみ出た溶岩のために、クレーターは隕石の直撃から考えられるほどには深くないと信じている。

しかし月の強い引力、大気、文明の介入の可能性などを考慮に入れないで、オーソドックスの科学者は、きわめて制限された知識情報によって研究しているのである。

カーヴランの発見

オーソドックスの科学者や地質学者に全く知られていない重要な発見がある。それは放射性の副産物や放射線を出すことなしに、ある元素が他の元素に変化するという発見である。

研究者のルイス・カーヴランは、地球大地内の無機物の堆積形成の原因となる基本的な諸関係を発見した。彼は、ある種の有機体が、ほとんどの原子物理学者の知らないような方法で、ある元素（複数）を他の元素（複数）に絶えず変えていると確信している。

彼の発見には反論できないのだが、その研究は科学界から無視されてきた。従来の学説に合わないからだ。

地質学者は、ある種の無機物はいろいろな割合で他の無機物に関連していることを知っている。カーヴランは地中の堆積物はこうしたさまざまの割合の無機物を含んでいることを示した。というのは、それを構成する原子群は、有害な放射性粒子や副産物を出すことなしに、一定期間にわたって実際に一元素から別な元素に変化するからである。カーヴランの発見の意義は、物理学、地質学、その他多くの科学の分野を根本的に変えるものであった。

無機物の堆積物と土は従来の科学的な理論で言うよりも早く変質する。したがって月の岩石の年代測定に用

いられる放射性同位元素による方法は、月の本当の歴史を示す結果を出さないかもしれない。同様に地球の岩石に与えられる年代もあてにはならないだろう。

月面の風化作用

地球の大気は地表の浸食作用や風化作用の原因となる基本的な要素である。しかし地表の水がなくなったら、大気は浸食を起こすのにほとんど役立たなくなるだろう。

月の地質の特長は、月が過去に豊富な水を持っていたことを示している。なぜなら月の丘や山などはほとんど丸くて風化しているし、多くの川のように見える水路、小川、割れ目が地表に現れているからだ。写真7（原書掲載）は、ハドレー・デルタ・アペニン山地域の丸くなって風化した丘を、明るい大気とともに示している。アポロ15号の宇宙飛行士スコットが前面に立っている。

写真12はハドレー・リルのふちにある月面車のそばに立つスコットを写している（所によっては三百六十メートルの深さがある）。これはかつて水で形成された地球の乾いた狭谷または川の流れる谷と間違えられるだろう。

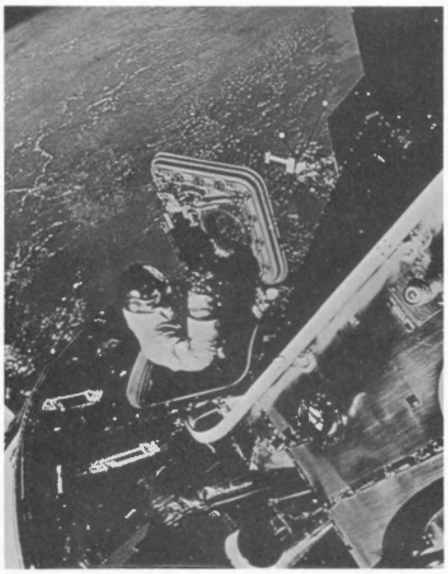
写真13は月面で撮られたものではなく、筆者が東部ワシントン州で撮影したものである。これは月の写真類と同じ種類の風化を示している。（訳注＝丸いなだらかな丘陵地帯を写している）。

写真14はアペニン山脈の北方を写しているが、ここには下方中央から曲がりくねっているハドレー・リルの一部が見える。ヒナ鳥の頭の形をしたハドレー・リルの右側には、高さ四千八百メートルのハドレー山の峰が片側を影にしてそびえている。

クレーターのアウトリクス（径四十キロ）とアリスティルス（径五十七キロ）が雨の海の東端付近の左上方に見える。

こうしたアポロ15号の写真類は、月に地球のような引力と大気があるという納得のゆく証拠を提供しているのであって、これにより地質の形成と侵食の説明がつくのである。

大きな割れた丸い石のそばに立っている宇宙飛行士のシュミットを写したアポロ17号の写真は、写真15に見られる。リトロウ谷を囲むなだらかな丘と、けわしいイースト・マシフの斜面が、八キロ彼方の前方に見える。リトロウ谷は静かの海の端にある。ここにも静かの海の反対側にあるハドレー・デルタ・アペニン山脈地帯にあるのと同じような風化の証拠が現れている。



▲船外に出るスコット飛行士。

月には強い引力がある

一九六七年にルナ・オービター4号が撮影した月のアルプス渓谷が写真16に見られる。写真の右上方から始まって、アルプス渓谷が千四百四十キロも走り、左下の雨の海の北東端まで届いている。

この渓谷のまん中には、干上がった雨の海に注ぎ込む乾いた川床のように見えるスジがある。科学者はこのような曲がりくねったスジを小川だと言明してきたが、学者のなかにはこうした小川は水で曲がったのだと信じているのもいる。月の引力は弱くて、そのために真空状態だといわれているにもかかわらずだ。

以上の写真類は、オーソドックスの科学者が月の特長を説明するときにかかえている難問を指摘している。

「大気がないというのに、どうして水、雲、川などが存在したのか？」という問題だ。

これには証拠からみて唯一の納得のゆく結論がある。それはこうだ。

月には表面に大気と豊富な水とが存在していた。したがって月は大気を保つための強い引力を持っていた。しかしそれがかつて強い引力であったとするならばなおも引力を持つはずである。そしていまもなお強い引力を持っているので、いまも濃密な大気を持っているのだ。

月には水が存在した

かつて月に水が存在したという別な証拠があるだろうか？

一九七三年九月号のナショナル・ジェオグラフィック誌に、アポロ15号の宇宙飛行士デーヴィッド・スコットが書いた『月面上を歩くのはどんな具合か』と題する記事が出たことがある。その中で彼は次のように述べている。

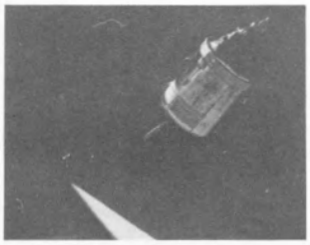
「風呂おけのような黒い線が、山々の底を取り巻いている」

こんな線はこれまでに水の跡だといわれてきた。岸辺にそって見られる線のように見えるからだ。しかし科学者は首をひねった。なぜなら水は最初から月面に存在しないと思われていたからである。宇宙飛行士たちが観察したところによると、ハドレー山は四十五度の角度で北東の方向に傾いた明瞭な直線のスジを見たという。もしこれと同じような線が地球上で発見されたならば、堆積物と思われたことだろう。だがオーソドックスの科学者によれば、月はそのような線の存在を理由づけるような過程を経ていないという。

アポロ16号の飛行で、宇宙飛行士たちはストーン山がテラス状になっていて、スコットとアーウィンがアペニン山脈で見たのと同じ種類の線（複数）を作り出しているのを発見した。

その水に何が起こったのか？　これについては地球と月との類似性が、月の大気に関する章で指摘してある。

月には地球に面した側に海のように見える広大な地域がある。この月の海が他の部分に比較して最低地であるというのは重要である。地球に面した側は反対側よりも二ないし六キロメートル低いのだ。しかも月の裏側は基本的に山だらけで、海の部分はほとんどない。



▲アポロ月着陸船から撮影した母船。

月は空洞の天体か

月にはたぶん強い引力や濃密な大気があるので、水は容易に大気圏外へ逃げることはできないだろう。い

ま月には充分な量の水がないので、大気中に発散はできないだろう。流れ込むために残っている一つの場所は月の地殻の中である。しかしこれが発生し得る唯一の見込は、月の地殻が自然の空洞状になっていればということになる。

水が地下の空洞や裂け目などに入るには、最初から空洞が創られていなければならない。このことは月が大きな隕石または進歩した武器で直撃されたとすれば発生したかもしれない。ひとたび初期の割れ目または小川などが海の底に現れたら、海は文字通り地殻の空洞の中に流れ込んで、巨大な水流を残し、川床を干上がらせ、月面全体の小川を侵食するだろう。そうなると干上がった海底はアメリカのデス・ヴァレーのような様相を呈するかもしれない。

もし月が空洞のような構造を持っているとすれば、それを証明するのにどんな証拠が存在するだろうか？

興味深いことに、月ロケットの探査によりマスコンが発見されたし（訳注＝マスコンとは月面下に部分的に集積した重い物質。月の重力分布の不均衡による）、アポロ宇宙船は地震の実験をやっている。マスコンはマス・コンセントレーションの略である。以下は頭を悩ますような発見を釈明するために科学者が憶測したことである。

「月ロケットは月のある地域の上空を通過するときに、上下左右に引っぱられた」

彼らの推論によると、地下の浅い所に大きな隕石が埋められていて、これが地域的な引力の増減を引き起こすという。こうした隕石のなかには径六千四百三十キロ、厚さ四キロに達するのがあると考えられているが、これにより引力の変化が説明できるというのである。

なぜパンケーキのような隕石が宇宙空間をただよっているのだろう？埋もれた隕石の高密度が、あちこちの引力を増大させたと考えられているのだ。その地域的な引力の変化は地球上で見られる引力の変化よりも大であると思われている。

マスコン説は誤りか

科学者によって提示されるマスコンの解釈は多くの矛盾を示している。

まず第一に、引力の増大は月面のいわゆる〝海〟の上で見られるのだ。ここは特にクレーターのない、なめらかな低地帯である。問題となるような大きさの隕石が海に落下したら、荒涼たるクレーターができるはずだ。これについては、溶けた物質が表面に溢れ出て穴を満たしたのだと片づけられていた。

二番目の問題は、もし月の地殻がひどく溶けたとすれば、隕石は地表にとどまるかわりに地殻内の奥深く沈み込むはずだという説がある。科学者のなかには、マスコンの不均一は熱い天体ではあり得ないと主張するのもある。

右の問題に加えて、月には火山活動で生じた多くの玄武岩があるというが、隕石によるマスコンと、火山活動を暗示する熱い月とは一致しないのだ。

右の各問題はマスコン説をひどくおびやかす。このことは月の引力の種々の変化にたいする別な理由があることを意味している。ここで二つの要素が考えられるのだ。

まず、地球の大海洋上の引力は陸地のそれよりも大きいことが発見されていることと、二番目に、月には多くの穴ぼこがあるというのが引力の変化の解釈に引き合いに出されるのだが、オーソドックスの科学者はこの解釈を無視している。少なくとも公式な報告ではそうだ。

もしも月の海が地殻の中にしみ込んで、部分的に巨大な穴ぼこを満たしたものとすれば、引力の変化の原因がわかってくるし、このことは水の流れた跡や失われた地表の水の原因をも解明できるだろう。

隕石の衝撃か、火山か

クレーターが隕石によるものか火山活動かの議論は別な問題である。これは知的生物の介入と月のでこぼこだらけの性質とを考えなかったら解決は困難だ。

レインジャー七号が最初に科学者の頭を悩ませたのは、大気のない惑星に予想されるギザギザの地形のかわりに、起伏の多い砂漠地帯のように見える表面が示されたことだった。

サーベヤー一号は月面の嵐の太洋に着陸したが、送って来た写真類は、水のない地球の土地に似た月の地面を示していた。

サーベヤー五号はあるクレーターの頂上部近くの静かの海に着陸した。化学分析した結果、月の土は地球の海底の岩や山の尾根などを形成する一種の玄武岩であることがわかった。また月の表面が隕石だらけとしては、帯磁地質の量が不足していることも判明したのである。

サーベヤー六号は五号と似たような結果を報告し、化学的な成分が月の海に共通していることを科学者に信じさせることになった。

サーベヤー七号は月の高地帯に着陸し、分析の結果、海の部分の玄武岩よりも密度の低い物質が発見された。しかもサーベヤー各号全部は、月の最も豊富な元素は地球と同様に酸素とシリコンであることを発見したのである。したがって月は隕石の源泉ではなくて進化した惑星であると断定された。だが、そうだとしても、火山活動を暗示する海の部分の玄武岩の正体については、隕石の衝撃説をとる学者たちにたいして「自分たちは間違っていた」と確信させるには至らなかった。

その結果、衝撃説と火山説は、サーベヤーの実験が終了しても科学者間で未解決のまま残ったのである。

月の謎のガラス質

宇宙飛行士ニール・アームストロングは小さなクレーター（複数）の底にガラス質の小地面を確実に発見している。これについて天文学者のトーマス・ゴールドは、月は太陽の急速な燃え上がりで焼かれてきたのだという説を出した。

ここで一つの謎が生じた。この小地面は明らかに微小隕石や太陽の微粒子の連続直撃を受けた形跡はないからだ。加うるにガラス状のつやは月の土の突出した部分の頂上や側面についているのだ。ゴールドの推測によると、太陽の急速な燃え上がりは三万年足らずの昔に発生したもので、わずか十秒ないし百秒間続いただけだという。

ここに二者択一のもう一つの解釈がある。三万年足らずの昔に、洗練された武器が用いられて、月面を直撃したのではないかというのだ。無キズのまま残っているガラス状の小地面は、微小隕石が地表に達していないことを示している。したがってその隕石類は濃密な大気中を通過するときに停止するにちがいない。

以上は月の浸食作用の隕石落下説をくつがえし、月の地球に似た大気と引力の存在を証拠づけるものである。

アポロ11号の着陸地点は赤道付近の静かの海という低地帯であった。ここは月のごくわずかな気候の存在する地域で、ちょうどアメリカ南西部に似た所である。そこでは軍が軍用機を多年放置していたが、機体がさびることはまずなかった。月面のこのような地域なら器具を長く置いても無キズで残るだろう。比較的静かな空気は地面を傷つけないし、大抵の隕石が大気をつらぬくことは不可能だろう。

クレーターは火山活動が原因ではない

『不思議な月世界』の中で著者のファーソフは次のように推理している。月のクレーターの火山説は実証するのがむつかしい。月には火、煙、灰、溶岩などの証拠が多くないからだというのだ。月の表面は多くの点

で地球に似ているように思われるので、火山活動の時期はほとんど終わっているにちがいないと結論づけるのは合理的である。丸い地表、風雨にさらされた外景、広々とした海などは、火山活動が月面の重要な要素ではなかったことを示している。

もし火山活動が続いていれば、なだらかな海を傷つけて、もっとギザギザの外観を生ぜしめただろう。確認し得る地球に似た特長の多くは、表面に点在するクレーターによって削られてきたので、クレーターそれ自体は火山活動による隆起の期間に造られたものではない。クレーターは表面の状態が安定したあとで造られたはずである。

『われらの宇宙船・月の秘密』と題するドン・ウィルソンの著書の中で、著者は『アポロ17号の予備科学報告』と題するNASA（米航空宇宙局）の刊行物に言及している。それによるとアポロ17号から引き出された結論は次のとおりだ。

充分な証拠が積み重ねられてわかったのは、過去三十億年間における火山活動は実際上存在しなかったか、または極端に少なかったというのだ。これはさらに、月でしばしば見られる光点は火山の噴火によるものではないという証拠を提供することになる。

以上を分析してわかるのは、月の広範囲なクレーター群の多くは火山活動や隕石で生じたのではないだろう、ということだ。こうしたクレーターのほとんどは、明らかに表面が地球に似た外観をもつ成熟した状態に達した後に生じたのである。月には広範囲な気候や水で満ちた海洋などがあったにちがいない。信頼し得る月の歴史や起源に関する概観は後の章で述べることにする。

▲アポロ飛行士が撮影した地球。

月の異常な反響

月の地殻や内部の構造の性質をつきとめるために地震の実験が行われたことがある。月探査機やアポロ飛行士たちによって、感度の高い地震計が月面に設置された。月着陸船やその他の物体が月に撃突したとき、衝撃波が記録され、専門家はデータを解析できた。

その実験の結果は科学者の予期しないものだった。アポロ11号の地震計は月が比較的静かであることを示したのである。ある科学者たちにとって、このことは月が、大きいというよりはむしろ小さな溶けた鉄のコア（核）を持っていることを意味したし、他の科学者たちは月には全くコアがないと信じた。

アポロ12号は連続して作動するように設計された、もっとはるかに高感度の地震計を運んで行った。捨てられた着陸船が月の着陸地点から約六十四キロの位置で月面に撃突したあと、三個の長時間地震計が三十分以上も続く連続した反響を記録したのである。

このことは月の構造がきわめて堅いことを意味した。なぜなら月は鐘が打たれたかのように響いたからである。科学者のなかには、月は内部にいかなる流動体も持たない固型物であると主張したのもいた。これは溶けたコア説にたいする別な一撃となった。月は空洞だという結論を出した科学者もあるが、これは引力説と一致しないように思われた。

ニュートンの法則の欠陥

月の強い表面引力は、ニュートンの万有引力の法則に重大な欠陥があるかもしれないことを示している。この欠陥は引力の真の性質を理解する最初のカギとなるものだ。

ニュートンが一六六六年にこの法則を初めて公式化して以来、引力の性質にたいしてただ一つの説も出たことはないし、学界が認めた説もない。ニュートンでさえも引力の性質を理解したとは言わなかったのだ。彼はただ落下する物体に及ぼす引力の影響を数学的にあらわそうとしただけである。ニュートンが仮定したのは、この謎の引力が何であろうとも、それはあらゆる物質に均一に作用し、それが地表下数千マイルも惑星という物質を貫通しても拡散したり弱まったりしないということなのである。

彼の説は、引力というものは物質の分子が空間のどの位置にあろうとも、あらゆる分子に関連を及ぼすものであるということをほのめかしている。

彼の万有引力の重大な欠陥と思われるものは、引力の影響は逆二乗法則によって弱まってゆくというだけで、相互に影響しあったり、拡散したり、影響を増大させたりすることなしに物質を貫通してゆくという彼本来の仮説にある（訳注＝「逆二乗法則によって弱まる」というのは、距離の二乗に反比例して弱まってゆくという意味。こうした影響がないのならば、引力を持つ一天体の他の天体にたいする吸引力は、この二つの天体間に別な物体が存在してもそれに影響されないということになる。したがって引力はその物体にたいしていかなる力をも及ぼすことはあり得ないだろう。

だが引力は物質に力を及ぼすので、先に述べた各種の影響は存在するはずである。したがってニュートンの万有引力の法則はエネルギー保存の法則をおかすことになる。

力（複数）というものはエネルギーを要するので、引力を持つ二つの天体間に他の物体が入ってくれば、その物体から生じる別な引力の影響がない限り、エネルギーの相互影響を生じさせることになり、外側の二つの天体間の引力を減少させること

になるだろう。

引力は貫通力の強い放射線？

引力の拡散は次のような場合に見られると思われる。山の上で鉛の重りを落とすと、それはニュートンの引力説でいうほどには地面に引き寄せられないのだ。つまりニュートンの法則に従っていないのである。これを地質学者は、山の内部にある物質の平均密度は海底下の物質のそれよりも低いからだと仮定することによって解決しようとした。

もっと真実らしい説明としては、山の内部の物質によって起こる引力の影響は、上層部の物質によって部分的に散らされるか希薄になるというのがある。これは各種の相違を説明すると思われる一つの要素である。

以上の情報や月の強い引力などからみて、引力というものは、きわめて貫通力の強い放射線によって起こると考えられるのである。それはかなりの深さまで物質を貫通するけれども、その能力はなおも限定されている。

地球の質量は正確に予測できない

万有引力が適用されるとすれば、月の強い表面引力は、月としてはあり得ないほどの質量があることを暗示している。いま月の引力を地球の引力の六四パーセントと仮定して万有引力の法則に従えば、月は一立方センチにつき一三・〇グラムの平均密度を必要とすることになる。これは鉄よりもほぼ五〇パーセント重い鉛の密度よりも大になるのだ。

地球と月のあいだの質量の中心をきめると、地球は月の質量の八一・五六倍も必要となり、これは一立方センチにつき二一・五グラムの密度となる。これは鉛の密度の約二倍である。したがって鉄のコア説でさえも質量の謎を解くことはできない。

ニュートンの万有引力の法則の欠陥が地球の鉄コア説をひき起こしたことを注目すべきである。一度地球の質量が仮定されると、月の質量もその表面で引力の実際的な力によって決定された。地球の地殻の限定された厚みだけが、地球の表面引力の大部分の一因であるというのは考えられることである。これはある深さの位置にある物質から発する引力放射線の拡散のためである。

このことは地球の質量は従来の方法を用いては正確に予測できないことを意味する。もし惑星が中空の中心部を持つとしても、表面引力は鉄のコアまたは鉛のコアさえあった場合とあまり変わらないだろう。これこそ月がその大きさの割に強い引力を持つ理由を説明すると思われるのである。これにより結論としては、ニュートンの万有引力の法則はまず第一に地球の質量を過大に算出していたということになる。

月は中空の天体か

地球の鉄コア説は、地殻の平均密度が地球全体の予測された質量を説明するのに妥当なものではなかった。地球の地殻は、一立方センチにつき三・三グラムという月の平均地殻密度にくらべて二・七グラムという平均密度を持っている。ニュートンの引力の法則を満足するには、地球の平均密度は五・五グラムでなければならぬ。このために月の平均密度は三・三四グラムとなった。

月の表面密度と、予測された平均密度の総計とのわずかの差のおかげで、発見されたわずかな磁気の原因として、小さな鉄のコアが仮定された。これが今日行われているオーソドックスな月に関する学説である。前章では鉄のコアの存在説によらない別な説を用いて地磁気を説明した。

科学者は地球のコアに反射した衝撃波を測定することによって、地球の鉄コアの存在を確証したと信じている。しかし地球がもしも空洞の堅い殻であるとすれば、彼らは地球内部の大きな洞穴または内面からの反射をキャッチしたかもしれないのだ。

これと同じような実験が月にも行われた。そして衝撃波の測定の結果、科学者は月のマントルを発見したと確信した。しかしアポロの月面における地震の実験で得られた証拠も、月は中空で比較的堅いという結論を暗示している。

地球も鳴り響く

地球が月と同じように鐘を鳴らすような反響音を示すという事実は一般に知られていない。地球は月よりも八一・五六倍もの質量があるので、こんな結果を起こすには、はるかに大きな爆発または衝撃波を必要とする。

ジョーゼフ・グダヴェジはその著『占星学＝宇宙時代の科学』の中でこうした出来事について言及している。彼は一九六〇年五月二十二日のチリ大地震の際中に鐘のように鳴り響く現象が記録されたと述べている。これは一八八一年に公式の世界中の記録が確立されて以来、記録された地震では最大のものと思われていた。グダヴェジはフィンランドのヘルシンキで開催された一九六一年度世界地震会議で述べられたその地震の結果の解説をかかげている。

それによると衝撃はすさまじいものだったので、地球全体が鐘のように鳴り響いたという。この響きはゆっくりしたインパルスの一定した連続でもって、かなり長時間続き、これは各地の地震観測所で記録された。

またグダヴェジは一九六四年三月二十七日のアラスカ州アンカレッジの地震の結果として、またも地球が鳴り響いたと書いている。月が鐘のように鳴り響いたのを発見したときに科学者連がひどく恐れたというのは、やや信じがたい面もある。結局、地球も同じ性質を示しているのだ。

地球も空洞の天体か

月の空洞説はドン・ウィルソンが先に述べた著書で広範囲に調べている。その中でウィルソンは、ジョーゼフ・グダヴェジと、元NASAの地質学者で宇宙飛行士を訓練したファルーク・エル・バズ博士が行った『サーガ』誌のインタビューに言及している。

『サーガ』誌の記事に出たエル・バズによると、NASAの発見事のすべてが公表されたわけではないという。たとえば彼は月の内部には多くの未発見の空洞があり、それが地下の氷とともに存在するかどうかを調べるために種々の実験が行われたという。

ニュートンの引力の概念にたいして、月空洞説は何をしようというのだろう。それは有名なニュートンの法則によって予測されたものよりも低い月の質量を示すものである。それは先に説明した引力の制限された貫通力の証拠を提供するものだ。

最後に、月の空洞は地球が空洞であることを示唆するのである。これについてもっと証拠を提供する前に、もう一度重要なポイントを強調する必要がある。

すなわち科学者は地球＝月システムの質量の中心を決定しているが、これにより彼らは地球の質量対月の質量の比を正確に算出している。すると問題は両天体（地球または月）のどちらか一つの質量を正確に決定することにある。しかし二つとも空洞であるならば、天体の体積を決定するために殻の厚さが知られねばならない。加うるに、空洞の平均密度と大きさも知られねばならぬ。気になる鉄コアがなければ、平均密度は地殻の密度にもとづいたものに近くなるが、しかし殻の厚さは多くの驚異的な地球の写真を用いても算出するのは困難である。次章で読者の研究用にこれらの写真の一枚をかかげることにしよう。

（第8章完。以下次号）

宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする

ジェニー・アベ

▲ダニエル・ロス氏

「私たちの想像を絶した巨大な美しい虹色の物体が飛んだ。まったく恐ろしくなるほどだった！」

と語るダニエル・ロスは一九七四年八月二十日まで宇宙についてさほど考えてはいなかった。

その二十日の夜、つけっぱなしにしたラジオから突然流れたニュースを聞いて、彼の関心は急速に天空の永続的な魅力にひかれたのである。

彼ばかりかニューヨーク州グレンズ・フォールズの近郊に住む数百の人々は、ラジオのニュースで驚いて外へ飛び出て、大気圏から来た（とみな信じた）宇宙船団を見たのだ。

この目撃報告は連邦航空局、軍幹部、地元警察、近くの飛行場のレーダー・オペレーターなどによって確証されたので、この事件は実証された最上のUFO目撃事件の一つとみなされている。

「私を含めて多くの人に疑惑は起こらなかった。あまりにも印象的で、あまりにも美しかったので、正体は何なのだろうと思ったよ」とロスは言う。

そこでロスはUFO研究の情報交換機関である民間宇宙科学センターを創立したのである。彼は（一九八四年）二月に開催されるサン・ラモン・ヴァレー地域センターの冬季研修会でUFO問題に関する知識を公開することになっている。

『UFOが大気圏外から来る証拠』と題するクラスで、ロスは大気圏外から来る訪問者の近年と歴史上の証拠を研究した結果を発表する。これには個人やNASA（米航空宇宙局）のスライドや写真なども見せることになっている。

ロスと奥さんのパメラは一年前に東海岸からカリフォルニア州コンコードへ移住してきた。彼は研修会のそのクラスを常識豊かでUFO問題の現実的な扱い方をする集まりだと評している。

彼と宇宙研究の仲間たちは、他の惑星（複数）の生命を指摘する多くの証拠を政府は大衆の目から隠してしまったと考えている。

「私はNASAに対立しないが、あらゆる情報を公開しないNASAには少々問題がある」とロスは言う。

「他の惑星から知的生物が定期的に地球へ来て、地球人とコンタクトしたがっている」と宇宙飛行士のゴードン・クーパーが一九七六年に一記者に語った。「私は宇宙飛行中にさまざまのUFOに遭遇した。NASAとアメリカ政府はこのことを知っていて、すごく多くの証拠を持っているんだ」とクーパーは言う。

ロスは数年間大学の理事として働いたが、いまは宇宙問題の研究活動に全力を尽くしている。あちこちの会合で指導や講演を行うほか〝記念碑的な仕事〟に専念している。UFO問題に関する最後の書物ともいうべき本の執筆を続けているのだ。

彼が言うには異星人の宇宙活動は現在きわめて活発化しているという。アメリカで約五十の目撃例が毎月新聞に報道されていると語る。それで彼の仕事は大衆が目覚めるのを促進することにあるのだ。

「毎年、証拠は確実にふえているのに、大衆の関心と知識は減っているんだ。異星人は出現回数をふやしている。地球人がみずからを堕落させているからだ。全面的な核の対決において、破壊後の破片や放射能が大気圏外に飛び出て異星人たちの未来にも影響を及ぼすかもしれない。

異星人は高度に進歩した科学技術と機械装置を持っているので、彼らは地球上のいろんな状態を観察できるし、地球人が自分たちの態度を理解する以上に彼らは地球人を理解しているんだ。多くの異星人が地球人のなかに混じって全く気づかれないで活動しながら、地球人を最上の方向へ進ませようと努力しているかもしれない」とロスは語った。

× ×

× ×

右の記事は米西部の新聞『ザ・ヴァレー・タイムズ』の一九八四年一月二十六日付に掲載されたものである。ロス氏は三十歳代の若さで米東部のある大学の理事として重責をになっていたが、アダムスキーの著書を読んで感動し、この著書類の内容が真実であったことを独自の調査でつきとめて以来、西部に移住してUFO研究センターを設立し、各地の学校や成人学級などで講演を行っている。ウィリアム・ブライアン氏に次ぐもう一人のアダムスキー派の闘士である。

編者（久保田）は一九八四年初めにブライアン氏の紹介でロス氏と連絡を開始し、以来温かい友情が続いている。すでに氏の発行するニューズレター以外にチャールズ・バーリッツの『ロズウェル事件』とジェームズ・マキャンベルの『ユーフォロジー』の英文原書を贈って頂いた。当方は八三年度日本GAP総会の大夕食会写真と今年度総会の大夕食会写真、本誌その他の資料をお送りしてある。これについて氏は本年三月十六日付の書簡で次のように知らせてきた。「ジョージ・アダムスキーの科学と宇宙哲学に関心のある、日本のこんなに大きな幸せな人々の集まりを見て感動しています。私はしばしば講演の中で、世界のいかなる国よりも日本人とメキシコ人がUFOの真実の情報（アダムスキー問題）にたいして、はるかに受容的でオープンであると話しています（後略）」。

次号に氏の資料を掲載の予定。

（編者）

絶対に真実であったアダムスキーの体験

―金星文字を解読してわかってきた―

遠藤昭則

きょうは私がふだん宇宙哲学を活用していることについてお話ししたいと思います。

活用していることはだいたい四つのことに分けられます。まず一つは「テレパシー等の練習において」、二つ目は「日常生活において」、三つ目は「金星文字の解読において」、そして四つ目は「GAP活動において」です。

それではまず一番目の「テレパシー等の練習において」ということでお話ししていきたいと思います。

初めてのテレパシー練習

テレパシーや念力というものについては子供の頃から興味を持っていました。

中学校の頃でしょうか、念力で物が動くということをある冊子で読みました。そして私もそれをやってみたくなり、八畳の部屋にあるテーブルを前にして一人で座りました。あたりはシンと静まり返っています。私はテーブルの上に小さな消しゴムを一つ置きました。そして消しゴムに向かってこちらに動いてくるようにと送信したのです。しかし消しゴムはピクリとも動きませんでした。でも私は

「いや、そんなはずはない。絶対に動くはずだ」

と、動け、動けと力を込めて送信し続けました。でも動きませんでした。そうしているうちに目の前がチカチカしてきたのであきらめてしまいました。

「私にはこのような力がないのか。残念だ」

と思いました。しかし私の奥深くでは、そういう力はあるはずだという声がしていました。

これが私の、今で言う超能力と言われているものの初めての練習だったのです。それ以来「テレパシー」や「念力」という言葉を本のなかに見つけると、興味を持って読んでいきました。それは私の父や母もそのような力に興味を持っていたからかもしれませんが、私の場合は別にどの宗教とも関係ありませんので、あくまでも科学的に、ということからでした。

現在でも念力の練習は時々やっています。どういう方法かと申しますと、湯ぶねに石けん入れを浮かべて、それを思いの方向に動かすようにするという方法です。うまく動いてはくれないのですけれども……。

自分で自分を勇気づける！

さて、私がノートにしっかりと記録を取りながら練習を始めるようになったのは、アダムスキー氏の『生命の科学』（アダムスキー全集第6巻）と『テレパシー』（『テレパシー開発法』（同全集第5巻）の旧版）を読んだときからでした。そしてその二冊を読んで、それまでうまくできなかったのは心だけでやろうとしていて、心と意識とを一体化させることを忘れていたからだということがわかり、心を打たれる思いがしました。この二冊を読んでからは心がパーッと開かれたようで、楽しい気持ちで練習が行えるようになりました。

私の内面的な変化ばかりお話ししてもしようがないですので、それでは私の練習方法をこれからお伝えしようと思います。

まずテレパシーの練習方法ですが、これは皆様もそうだと思いますが、例えばESPカードで行っている時に、うまく受信できる日があるかと思えば、反対に全然できなかったという日もあります。でも私たちは地球の人間ですので、このようなことがあっても当然であって、何もテレパシーの能力が自分にはないのだということではないと思います。それよりも、できなかった日などは、

「きょうは自分ではわからないけれども調子がよくなかったのさ。でもだんだんと受信できるようになる。この前などはよく当てたじゃないか」

と自分を勇気づけることが必要だと思います。

透視のポイントは〝待つこと〟

一九七八年に行われた「エジプト宇宙考古学遺跡の旅」に参加したときには、私の大学時代からの友人である渡辺伸一氏（山梨県在住のGAP会員）と私は、日本とフランスとで色によるテレパシーの実験を行いました。彼とは以前からよく実験をし合っていたので、気心は知れていたのですが、よく当たりました。やはりテレパシーには距離は全く関係ないということを実感しました。

私の受信はいつもはほとんどよく当たらないのですが、よくわかるときの見え方は、例えばESPカードの「十」でしたら、空間に、または目をつぶった空間に、「十」の字が黒く見えたり、見えていなくても「十」の感じがあったりします。最近はESPカードではなくて、1から10ま

での数字を一枚一枚の紙の表に書いたものを一組としてそれを五組作り、まとめてよく切って、裏返しにして任意の一枚を引き出し、それを当てる練習をほとんど毎日しています。やはり毎日するくらいでないと力はついてこないようです。でも緊張してきたり、疲れて眠くなってきたりしたら、その日はそこでやめることにしています。

その時の透視方法は、以前はその紙に手をかざしたりするなど色々とやって、すぐにわかろうとしたのですが、この頃は静かに座って目をつぶり、前額部に数字が見えてくるのを待つようにしてやっています。これは自分でものんびりとした方法でいいなと思っています。また頭もすっきりとしてきます。

アダムスキー氏は『生命の科学』の第十課「意識による旅行」のなかで

「遠方の光景を透視する場合は――特にそれがカラーであるとき――それはあなたの前額部の中にある心のスクリーン上に意識によってピントが合わされます」

と言われています。まあ、これは遠隔透視の場合はとありますが、テレパシーのときにも、私もこの「心のスクリーン」を見るようにしています。でもこの映像は心がピントを合わせるのではなくて意識が合わせるのですから、心でいくら見よう見ようと焦ってもいけないわけです。ですから見えてくるのを待つという忍耐力も養われてくるようです。

火事場を透視した

私はこの方法を透視のときにもよく使います。透視にも色々ありますが、まず遠くの場所を透視する遠隔透視についてお話ししてみたいと思います。

顕著な、今記憶に残っているものからお話ししますと、大学のときのことですが、ある日家に帰ってきて本を見たりしていましたら、消防車のサイレンの音が聞こえてきました。それで火事はどこだろうと母親に聞いたのですが、よくわからないようでした。そこで透視してみることにしました。目をつぶって少し待っていると、斜めになっている黒い柱がうっすらと見えてきました。そこでそれを紙に書きました。また見ているともうだいぶ焼けてしまったようで、平屋の骨組が少し見えてきましたのでそれも紙に書いておきました。それから今度は、上空からそこを見ているようにして待っていると少し見えてきたので、それも書いておきました。

次の日、うわさで聞いていた場所まで自転車で確かめに行ってみました。そして私の書いた図と比べてみると、いくぶん違うところはあるにしても、斜めになった柱の位置といい、平屋の家といい、ほぼ合っていました。

これは一つの例にすぎませんが、私はこれを日常生活でよく使っています。最近のおもしろいものですと、五月二十九日の夜、電車に乗って『アダムスキー論説集』(アダムスキー全集第7巻)を読んでいましたら、突然お墓の卒塔婆(そとば)のようなのが見えてきました。そしてそこに黒い、アルファベットのJの字の、下のはねているところが少し大きく半円を描くような形の文字が見えてきました。私は左隣に座っている四十過ぎの女の人のフィーリングかなと思っていました。

私の体は心地よく暖かくなってきて、うっすらと汗がにじんできているようでした。また、力が体の細胞の隅々にまで満ちあふれてくるような感じでした。

体が透けて見える

電車から降りてもその感じは続いていました。そして目に映る植物や歩いている人々は、その内部が見えてくるようでした。

しばらく歩いてから、三十メートルぐらい前を歩いている五十近い男の人を後ろから見てみました――その日は太陽神経そうと内臓とのつながりのことなどを考えていましたが、調べてもその辺の位置関係はよくわかりませんでした。すると内部から、透視をしてみなさいという印象があったので、今の状態ならできると思って見てみたわけです。

見てみますと、胃が前方に見えていて、その後ろ、つまり私のいる方に腎臓が少し重なっているように見えていました。さらに見ていると膀胱の中が見えてきました。そこには黄色っぽい壁があり、黒っぽい小さなかすがポツン、ポツンとゴミのように、小さな襞(ひだ)のところについていました。

その日は本当に調子が良い日で、前から歩いてきた人のお腹のあたりには緑色の器官が見えましたし、植物を見れば、その内部を水が通る様子とか細胞が集団化している様子が見えてきました。見方は、見ようとするものにフィーリングをぶつけるようにしました。目からの力のようでしたが、そうするとよく見えました。でもその方法もだんだん慣れてくると、ただ普通に見ようとして見ればよいようになってきました。はじめは目が慣れていなかったのかもしれません。

このようにして見えていますと、私の心は、

「万物はうまく動いているのだ。何物も怖がる必要はないのだ」

という感じに満たされていました。

家に帰ると私は、以前チャクラのことを研究したときに読んだ本を見てみました。ひょっとしたら何かわかるかもしれないと思ったからです。

伊藤達夫氏の手を見たら……

ところでアダムスキー氏は『生命の科学』のなかで、両手を見つめる練習を紹介してくれています。私はこれは肉体の透視の練習には最高のものだと思っています。さらにアダムスキー氏は同書で

「これは手ばかりでなく、人体の機能について知りたければ人体のいかなる部分にも応用できるのです」

と言われています。手を透視するだけではなく、人体にも応用できる素晴らしいものだと思います。

今年の六月四日、私の家に松村氏と四国の伊藤達夫氏がいらっしゃいました。時刻はもう夜中の0時でしたが、私と妻

を含めた四人で、両手を見つめる練習をすることになりました。まず紙と鉛筆を用意して、手を見つめて見えてきたものを紙に書くのです。四人とも素晴らしい結果が出ました。私はちょっとひと休みと、何げなく伊藤氏の手を見つめていました。するとそこにきれいに刈られた植木と、新しい造りと古い造りとが交じった家が見えてきました。そこで伊藤氏にそのことをお話しして、さらに絵に描いて見ていただきましたところ、それは伊藤氏がいつも住んでおられる一角だそうでした。

人間の内部に真の力がある

ほかにもまだまだ色々とありますが、このようにお話ししますことにはやはり勇気が要ります。私は、アダムスキー哲学すなわち宇宙哲学を毎日、ほんの少しの時間でいいですからしっかりと応用すると良い結果が出てくると思います。そうするとかなりの力がだんだんとついてくると思います。私たちが宇宙哲学に巡り合ったのは、それを生かすためではないでしょうか。あるところにブラザーらしき人がいる、よしみんなで見に行こう、ブラザーの方というのはどんな方なのだろう、その方にお会いしたら助けを請おう、などとやっていてよいものでしょうか。私はそうは思いません。そのようなことをやっていてスペース・ブラザーの方々は喜ぶでしょうか。

ブラザーの方々は私たちに、アダムスキー氏を通して、そして久保田先生を通して「生命の科学」を伝えて下さいました。ブラザーの方々は、まず私たち地球の人間が進歩・向上することを望んでおられると思います。

でもいつまでたっても自分に力がつかない、そういうときは、まず自分を見直して見る必要があると思います。自分には力がないからと思われている方は、自分に合った練習方法を考えて、さらに練習をされるとよいと思います。かく言う私もそうなのですが……。

しかし私たちの内部には力があります。だれの内部にも力はあります。くじけそうになっても、悲しくなっても、私たちが何者にも見離されてしまったと思うときでさえも、私たちの内部には輝くような明るさと暖かさを持った太陽のような宇宙の意識があります。力がうまく出ないというときには、その意識が力の出し方を教えてくれるはずです。私たちがどうすれば力が出るのだろうと考えるならばですが、私はそう信じています。そうすれば超能力と言われている力もついてくると思います。また病気を治す力もついてくるはずです。そのために私は東京本部月例会に勉強をさせてもらいに来ています。

アダムスキー氏は「興味本位の時期は過ぎた」と言われています。私たちは、まず個人個人で自分自身を高める必要があると思います。

自分を救えるのは自分だけ

妻は四月頃からアダムスキー氏の『生命の科学』を読みながら、良い文章があればそれを抜き出してノートに書き、また気づいたこと、わかったことがあればそれもノートに書いています。時々わからない箇所があると、私と話し合ってお互いに理解し合ったりして問題を解決しています。そうしてノートが一冊でき上がりました。これは妻自身の「生命の科学」です。これをやっている彼女を見て気づいたことは、彼女は確実に力をつけてきているということです。

例えば五月三十一日に、彼女は飛行機が爆発するイメージを透視しました。そして六月二日、実際にそれが起こったのです。幸い死者はなく、片方の翼が燃え上がっただけですみました。それからユリ・ゲラーが来日して「11PM（イレブン・ピー・エム）」で遠隔透視の実験をしましたが、あのときも近いところを当てています。

このようにアダムスキー氏の『生命の科学』を読んでノートに記録するだけでも『生命の科学』が自分のものとなっていくことがわかります。

また、私は透視したことなどは必ずノートに記録しておくようにしています。そうしないと私などは時々自分で

「それほどやっていないんじゃないかなあ。そんな力があるのかなあ」

などと考えてしまうからです。と言いますのはその記録を見れば

「ああ、そうか。ここでこういうことをしたんだっけ」

とか、だんだんたまってくると

「ずいぶんと見えるものなんだなあ」

などと自分なりにわかってくるからです。

アダムスキー氏は

「自分で自分を救わない限り、だれも自分を救ってくれないのです」

と言っています。いつまでも人に頼って向上しようとしていてはいけないと思います。人間に与えられた自由意志というものがあるのであれば、それはあらゆる人の中に、自由にそのような力を出せる意志があるのだということになります。

木曜日に現れたUFO

それでは次に、二番目の「日常生活において」ということですが、正直に申しましてうまく活用できているのかいないのかわからないときがあったりするものですから、これからしっかりしていかなくてはと思っています。でも六月のある木曜日に私の受け持っているクラスでとても素晴らしいことがありました。

その日は一時間かけて、ある物語を読んでそのことについて意見を出し合う授業でした。その物語というのは、周りの人々からは反対されて軽蔑されながらも黙々と地中深く堀って行って温泉を堀り当て、その村に温泉をもたらした人の話でした。

ひと通り輪読したあと、私はまず

「その人はどうして堀ったのだろうね」

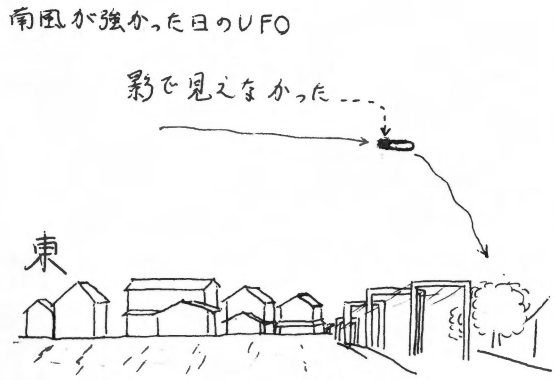
と尋ねました。すると生徒のなかから

「温泉があると思っていたから」

という答えが返ってきました。さらに色々な話が出たあと、私は

「でもその人は周りの人から反対されたり軽蔑されたりしたじゃないか」

と言ってみました。するとある子が
「信念を持っていたからさ」
と言いました。私は待ってましたと思いました。そして
「そうだね。信念を持っていたんだね。すごいね。信念を持つということはとても大切だね」
と話しました。そしてふと、このクラスには体の弱い子がたくさんいることを思い出して
「信念を持てばね、病気だって治ってしまうそうだよ。うそだと思うかもしれないけど、治る、治ると思うと必ず治るそうなんだよ」



◀筆者が目撃した母船。本人のスケッチ。

などと力を込めて信念の重要さについての話をしました。その日の授業は本当に満ち足りたものでした。

その日の夕方、帰り道を歩いていると東北東の空に、横に長い物体が見えていました。さらに五十メートルぐらい歩くと、その物体は私の歩くのに合わせるようにして今度は南東の方へと動いて行きました。そのときは風が強かったので、気球が風に流されているのかなと思って十分間ぐらい見ていました。見始めた時刻は五時十分頃、習志野市のある場所です。飛行機ぐらいの大きさなのですが、軽々と風の動きよりももっとゆっくりとした速さで自転をしているのです。物体の前方は白くて、後方はよくわかりませんでした。夕日でオレンジ色に縁が染まってきれいでした。それでこれはUFOだとわかったわけです。そしてその物体はゆっくりと南東の空へと遠ざかって行きました。私は
「これからもよろしくお願いします」
と送信しました。それ以来毎朝そこを通るたびに空に向かって
「スペース・ブラザーズの皆様、きょうもよろしくお願いします」
と送信しています。

月例会は見守られている

実はこのことは、この日の学校のこともそうでしょうが、四番目の「GAP活動において」ということにもつながることなのです。それはこの日の五日前に東京本部月例会があり、テレパシー練習のときに前に出て送信を始めようとしたときのことからなのです。突然体の内部から感謝の気持ち、それもスペース・ブラザーズにたいしての気持ちが込み上げてきました。そして上空からスペース・ブラザーズが見守っていて下さるんだという感じと謙虚な気持ちとがわき起こってきました。月例会はいつも必ずブラザーの方々が見守っていて下さるんだと思いました。そうしてそのことをこの木曜日まで考えていました。ですから木曜日にUFOが現れて下さったのは偶然のことではないと思います。これはきっとスペース・ブラザーの方々が、いつでも東京の月例会を見守っていますよということを教えてくれたのだと思います。

そういえば去年の総会の次の日にも思い当たることがありました。私はその日都内見学に参加できなかったのですが、私が実家から自転車で帰ろうとしたとき（時刻は夕方の五時三十分頃です）、西の空にかなり大きなまっ黒い楕円形の物体が浮かんでいるのを見ました。そして私が気づくのを待っていたかのように、それから西の空へゆっくりと動いて行きました。このこともブラザーズが援助してくれていることを、私という、どうということはない人間に知らせてくれたのだと思います。ですから私もここで皆様にそのことをお伝えしようと思います。またブラザーの方々は私にも頑張れと言われているのだと思いますので、これからもしっかりとやっていきたいと思います。

私は本誌の83号にオーラの記事を載せていただきました。でもいつまでもそこを居心地の良い場所にさせていただいているのではなく、さらにそれを乗り越えてやっていかなくてはいけないと思っています。金星人の長老の方はアダムスキー氏の『宇宙からの訪問者』（アダムスキー全集第1巻）のなかで
「私たちの世界ではみな幸福ですが、停滞する者はいません。丘の頂上に登ると下から見るときと違ってさらに別な丘が見えてくるのと同様に、常に進歩というものがあるのです」
と言われています。

オーラはだれにでも見える

オーラのことが出ましたので、私のオーラの見方についてお話ししたいと思います。オーラは一般に神秘的なものと言われています。そして特殊な人にしか見えないのではないかと思われています。しかしそのような人にだけ見えて他の人には見えないというのはずいぶん不公平ではないでしょうか。宇宙の英知は私たちに様々な力を与えてくれました。ですからそれが正しいことであるのなら、だれでもが見えるようになってもよいはずです。いえ、それはだれでも本当は見えていると思います。

私たちは小さい頃から人間や植物等を見るときには、その対象物の周りを見るようには教えられてきませんでした。それで私たちが大きくなってからそれらを見ても、本当は見えているのにもかかわらず、それを見ようとしない習慣がつい

てしまっているのだと思います。オーラは人や植物等の周囲に見えますが、見るときには、まずその物体の周囲を見ます。でもそこにピントを合わせないで、その向こうを何げなく見ます。そうするとその空間に、例えば人間でしたらば、うっすらと透明な明暗があるのがわかってきます。見えないときは少し視線をずらしたり、逆にピントを合わせたりするとよいと思います。はじめは焦らないで、それだけ見えたら大成功です。そしてその図を紙に描いておきます。色は、いま見ている人は何色だろうと待って、心のスクリーンを見ているようにすると見えてきます。見えてきたら、まさかと思わないで、なるほどなと思います。そしてもう一度その人のオーラを見ると、色が少し見えてくると思います。これは人と会って話をしているときにも応用できます。

さて私はオーラではなくてフィーリングで、人と会うときに時々やることがあります。それはまず会う前の私の心の中と、その人に会っているときの心の中に感じるものを見て比べるようにすることです。そうするとその人の性格とか家庭の様子とかが見えてくることもあります。でもこれは本当に時々しかやらないのですが……。

日常生活は最良の教室

ところで私たちは、相手はそうは思っていないのに、あの人はこう思っているとか思い込んでしまうことがよくあります。ですから人と会うときにも

「あっ、この人はこう思っているのだろうな」

と思っても

「本当にそうだろうか。内部の印象はどうだろうか」

と一呼吸置いてもよいのではないかと思います。

ESPカードその他でテレパシーの受信の訓練をしても、こういう実生活のなかで生かせなくては何にもなりません。ESPカードはこちらに何の作用も及ぼしません。ですからとても楽なことです。しかし実生活でのテレパシーは人間対人間、人間対植物との間で行われることになります。実生活ではすべてが楽だとは言えません。実生活においては私たちは私たちの心が作り出した感情の渦の中でもがいていることがよくあります。そういうとき、相手からの印象はその渦の中に一緒に入ってきますが、心が混乱しているためによくわかりません。そこで心はそこから早く抜け出そうと短絡的に

「この人はこういう人だ」

と考えてしまおうとするのではないかと思います。しかしその混乱は心自身で起こしているのですから、心自身が

「ちょっと待てよ」

と立ち止まってみるならば、それは素晴らしいことだと思うのですが、いかがでしょうか。とにかく日常生活は心をコントロールする絶好の場です。これを見逃す手はないと思います。

金星文字解読の試み

さて三番目は「金星文字の解読において」ということです。私は高校の頃から、ブラザーズのスカウト・シップが作れたらなあと考えることが時々ありました。そして簡単な実験を色々としてみたり、物理の本を読みあさったりもしていました。しかし何らこれはというものは出てきませんでした。大学のときにある装置を組み立ててもみたのですが、それはかなりの高周波を発する電源が必要で、それを動かすと空間に有害な高周波がかなり出るようでやめてしまいました。その機械はあのバシル・バンデンバーグ氏の反重力モーターの部品の写真のオーラの色と違うからです。

それから金星文字の解読をしてみようということになりました。はじめは何がどうなっているのかさっぱりわかりませんでした。でもすぐ目にとまるスワスティカ（まんじ）は何か回転を表すものではないかということは考えました。そして金星文字の写真を厚いビニールに写し取り、スワスティカを中心にしてその写真の上で回転させてみました。しかしよくわからないゴチャゴチャとしたものにしかなりませんでした。

バシル・バンデンバーグ氏は次のように述べています。

「私は長く象形文字と取り組み、確実な意味をもつように各文字を組み合わせようとあらゆる方法を試みた。そしてついに正確な経路を発見することに成功した。それを用いれば象形文字が解読できるのである」

そこで私も各文字を写し取ってバラバラにして、それをパズルのように組み合わせていくということをしました。しかしなかなかうまくいきません。でも去年、全く簡単なことに気づきました。それはどういうことかと申しますと、まず金星人から受け取った文字の写真を見ますと、各文字が無造作にバラバラに置かれているように見えます。しかし各文字同士の間の距離などを調べてみますと、ある法則性がそこに見いだされます。各文字をバラバラにしておいてからアダムスキー氏に渡すという意地悪なことを彼らがするとは思えません。私はそう思います。何かそこには宇宙の法則が隠れているようです。つまりそれらの文字は実は規則的に並んでいるということであり、ある方法、つまりバシル・バンデンバーグ氏が言っている「正確な経路」を見つければそれらの文字はうまく組み合わされると思うのです。そこでまた色々とやってみましたが、うまくいきません。それで街でよく見かけるはめ絵パズルのセットを考えてみました。

私たちはパズルを組み立てていくときにはどうするでしょうか。たいていの人が行う方法は二種類あります。まず一つは、全体の完成図を細かいところまでよく知らなくてよいのですが、大体知っておいて、そのイメージのなかのどれかの部分の絵に当たるパズルの駒を一つ探し出し、そしてその回りに他の駒をくっつけていくという方法。そしてもう一つは回りにはみ出ている絵とくっつく駒を探してあてはめていくという方法です。

そこでバシル・バンデンバーグ氏の話

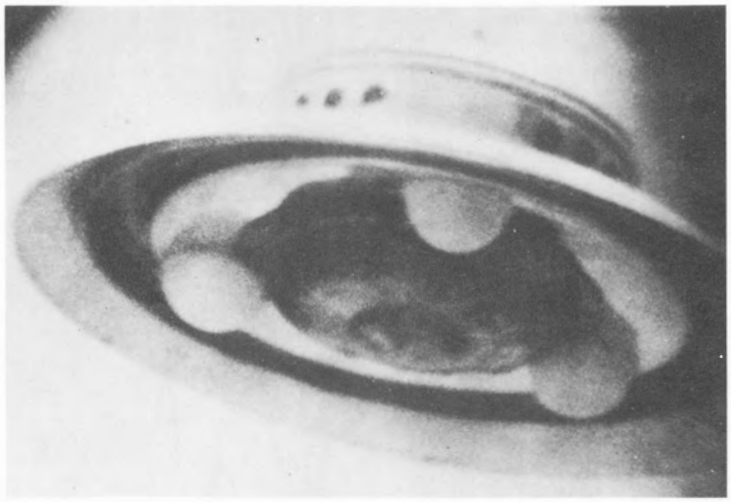
に戻ってみますと『UFO問題の真相』（アダムスキー全集第2巻）のなかでアダムスキー氏は

「ネガに現れている各文字を〝はめ絵の一コマ〟として応用することによって、彼は円盤の図形を作成することができた」

と言っています。

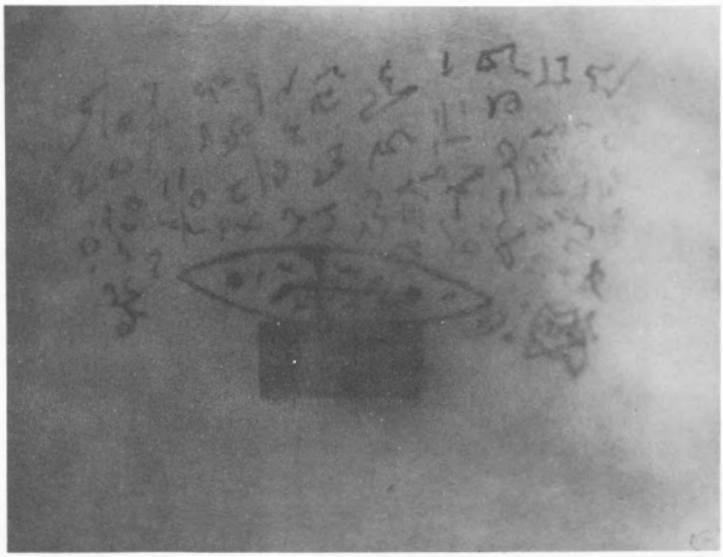
円盤の断面図ができた！

そこで私は金星文字の写真の大きさにちょうど当てはまるくらいのスカウト・シップの図を考え、また他のものをも参考にしてスカウト・シップの絵ができ上がるように各文字を組み合わせる試みをしてみました。各文字をある中心の方へと集めていくのですが、文字を動かしていくのには規則性があるらしいことがだんだんとわかってきました。それは直線と二種類の角度を使うものなのですが、そのようにして私は一つのスカウト・シップの断面図を作り上げることができました。しかしこれは完全とは言えません。私の作り上げたものなど、ブラザーズの完全な図形に比べたらほんの取るに足りない幼稚なものであると思います。でもその図面は、スカウト・シップ内部の磁気柱、そしてそれと上下のレンズとのつながりの様子、パワー・コイルやコンデンサー・コイル、また着陸用ギヤーとスカウト・シップ底部とのつながり方、そして磁気推進装置のおぼろげな概観が表れていました。これはさらに科学的に調べていけば、図が正しいかどうかもわかると思います。



▲金星の円盤、1952年12月13日午前9時10分頃、米カリフォルニア州パロマー・ガーデンズ台地で、アダムスキーが撮影したもの。

▼上の写真を撮影後、円盤からアダムスキー宛に投下されたネガホルダーに記されていた金星文字と図形。



私は次にスワスティカのある所の図について考えました。たぶんこれは磁気推進装置の基礎についてのことが示されているのかもしれませんが、現在研究中です。ただ示されている意味は、父性原理と母性原理を表した金星のシンボルマークに似ているようなところが多々あります。つまり電磁気の陰と陽のある法則を説明しているようです。このスワスティカの図はまたあとでご紹介しますが、後になって私にとっては驚くべき事柄を表していることに気づきました。

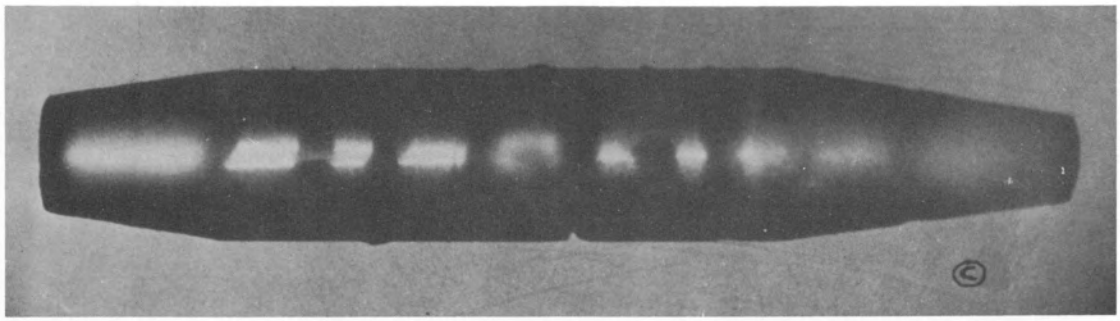
オーソンの靴跡は母船の断面図？

さて次にアダムスキー氏が一九五二年十一月二十日にカリフォルニアのデザートセンターでオーソン氏と会見したときに、オーソン氏が残していった足跡を写した図について考えてみることにしました（アダムスキー全集第1巻『宇宙からの訪問者』第九三頁に掲載）。

アダムスキー氏はバシル・バンデンバーグ氏について次のようにも言っています。

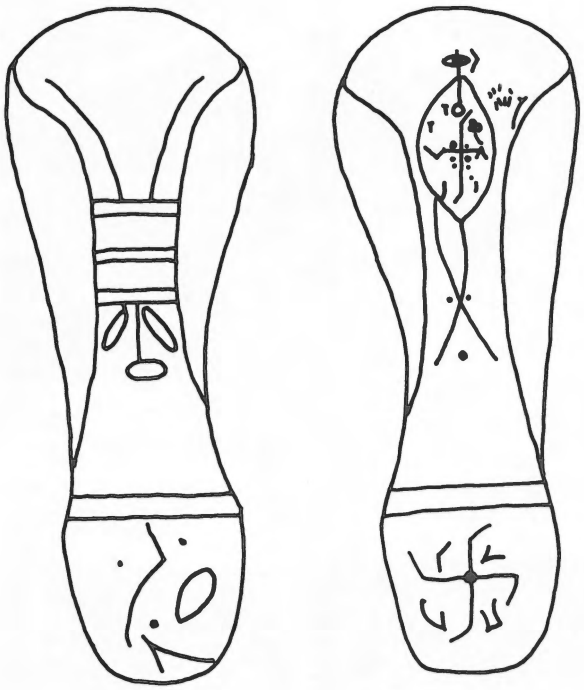
「両足跡の紋様の中にネガの文字を加えて大母船の図面を作り出したのだ」。

つまり足跡の文字は母船の設計図になっていると考えられます。それで私は金星文字のときと同じ、ある規則に従って文字を移動して組み合わせてみようとしましたが、うまくいきませんでした。足跡の各文字はもうそこに固定されてしま



▲金星の大母船、1952年5月1日午前7時58分、パロマー・ガーデンズから約48キロメートル離れた山の上空に出現した大母船をアダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影したもの。

▼金星人の靴跡。1952年11月20日、米カリフォルニア州のデザートセンターでアダムスキーと会見した金星人が、砂漠の砂地に残した靴の跡を、アリス・ウェルズがスケッチしたもの。



っていて、ネガの文字や、その他の補助線を待っているようだったのです。それでまた規則性を見つけ出さなくてはならないのかと困ってしまいました。しかし今度は一つのヒントが浮かんできました。そのヒントはスワスティカにありました。そうしてやってみたところ、バシル・バンデンバーグ氏の反重力モーターの写真と似たものができ上がりました。まるで美術の模様を見ているようにきれいなもので、各文字が何でこんなにうまく組み合わさるのかと不思議なくらいでした。

そして図は二つできました。二つはある関係にあり、それぞれ各自の回転の向きを持っているようでした。しかし二つとも中心に穴があいていて、そこが重要なようですがどうしたらよいかわかりませんでした。そこでもうひとふんばりして足跡の方の、あの金星文字のネガにあるスワスティカが入っている図のようなものにも同じ操作をしてみました。すると全くうまい具合にちょうどそのあいていた穴に入る細かい部分ができ上がりました。

私はこれらの図を見ながら考えました。これは一体何を表しているのだろうかと。そうしてこれは母船を二カ所で輪切りにした図であって、それぞれの電磁気推進装置の図面ではないかと思いました。そしてそれを小型にしてどうにかすると磁気モーターができるのではないかと思いましたが、よくはわかりません。

UFOが励ましてくれた

このようにして金星文字に取り組んでいますと、アイデアは地球の習慣的なものではありませんので自然とスペース・ブラザーの方々のことが気になり出します。そしてブラザーの方々は地球に素晴らしいフィーリングを放っていて下さるのですから、その方々のフィーリングを感受しようという気持ちが起こってきます。バシル・バンデンバーグ氏がブラザーズとコンタクトしたときのことを彼は「ブラザーズは自身のスケッチを持参したのではなく、また象形文字の解説を全然助けてはくれませんでした。くり返します。ブラザーズはただ従うべき正しい道を指摘しただけです。私は正道からはずれていて、自分の感情に頼ってブラザーズとのテレパシックな交信力を失っていたからです。それがブラザーズの来訪の唯一の目的でした。それ以来私は多くの解決をなしとげ、自分自身の努力によってばく大な知識を獲得しました。ブラザーズは〝感情による妨害〟の愚かしさを教えてくれ、以来私は感情に対しては警戒的となり、こうして互いのテレパシー交信経路を確立させたのです」と述べています。つまり感情のコントロールが必要なのだと言っているわけです。そこで私もできるだけ穏やかになろうとするわけですが、どうしてどうしてなかなかうまくできません。でもこれを解読

していくにつれてだんだんと心が開けてくるようでした。

そうしてあるとき、陸上自衛隊習志野駐屯地の真上から少しずれたあたりに二機の丸くて白いUFOを見ました。この解読をすることは良いことなのだなと思うとともに、あとでスペース・ブラザーの方々に感謝をしました。その後あの金星文字のネガのスワスティカが入っている図に補助線を入れると金星の母船のおおまかな断面図にもなりました。

とまあ、あるものを参考にして、そのまねをするようにしながら解読していったのですが、これらが合っているのかどうかはわかりません。それと、解読していて何か参考になるものはないかと本屋へ行くと、その解説の方がはるかに素晴らしく感じられて、どの本も色あせて見えてしまって、結局本はほとんど参考にしませんでした。これらの図からは様々なヒントが得られるようです。

アダムスキーの体験は絶対真実

文字を解読しながら感じたことがあります。それはアダムスキー氏の体験は真実なのだということです。だれが反対しようと、それらの人々はアダムスキー氏について何も知らないのに知っているふりをしているだけであり、取るに足りない自分の立場を守ろうとしているにすぎないと思うのです。そしてそういう人々が何人、何百人、いや何万人集まって反対しようと恐れる必要はないと思います。アダムスキー氏の体験は、真実なのですから。

そして私たちに必要なのは宇宙の法則を基にした、宇宙の英知と一体であるという何ごとにもひるまない意志の力と、またブラザーズのフィーリングを受けるために、そしてテレパシックになるために忘れてならないもの、つまり感情のコントロールということであると思います。

『Uコン』発行を祝うUFO

さて最後は第四番目の「GAP活動において」ということです。私は東京本部の役員として働かせていただいたり、本誌の発送のお手伝いをさせていただいたりしています。私は、これらの仕事を与えて下さった久保田先生にとても感謝しています。これらの仕事をするごとに、奉仕をすることの大切さ、スペース・ブラザーズのご援助が確実にあること、そしてまた宇宙哲学の重要さ等を学ばせていただいています。

一時は地方支部の方々の活動がとても素晴らしく見えて、こんな素晴らしい仕事を与えられているのにもかかわらず、私はこれでよいのだろうかと思ったときもありました。また本当のことを申しますと、シンドイなと思うときもありました。でも今は違います。私や皆様方も地方支部の方々と同じように立派に活動していると思うのです。そしてスペース・ブラザーの方々も確実に援助して下さっていると思います。

つい先日の七月二十六日に本誌86号の発送のお手伝いをさせていただいて、翌二十七日、前日に車をある所に置いてきたものですから、夕方一人で車を取りに行って、京葉道路で帰って来ました。そうして船橋の料金所を過ぎたあたりで東の空をふと見ると、白くて細長い物体が北東の方へと飛んで行くのが見えました。とにかくこちらも動いているので、その物体は建物の陰にすぐに隠れて見えなくなってしまいました。飛行機の航路が近くにあるので

「あれはたぶん飛行機だろう」

と思って車を走らせていました。空には夏の積乱雲がところどころに広がっていました。

そして七、八分たったでしょうか。その日は私の実家に寄ることになっていたので、幕張のインターチェンジで下りて幕張本郷の駅のところまで来ました。そこは線路をまたぐように道路ができているので、高くて見晴らしが良いところでした。そこで東の空を見ると、またさっきの物体が飛んでいました。飛行機でしたら七、八分たてばかなりの距離を移動するはずですが、さっき見た所からほんの少しずれたぐらいの位置にいるのです。私は道の一番高い所（駅の前）から三メートルぐらい離れたところに車を止めてそれをゆっくりと見ることにしました。

その物体はさきほどの位置で円を描くようにして軽々と飛んでいるのです。太陽の光も反射しているようでした。そして二分ほどして機体の軸方向をこちらに向けたかと思うと見えなくなってしまいました。

それが飛行機だったらまた見えるだろうと、その後も見ていましたが、もう現れませんでした。私は見るのをやめて坂を下りて行き、住宅の間の道を走っていました。そうして見ていたときからだいたい三分ぐらいたった頃でしょうか。自衛隊の対潜哨戒機のようなのが一機、さきほど物体がいた東の方へと飛んで行きました。私はこれは本誌の86号が出たので、ブラザーの方々が祝福して下さったのだろうと思いました。

『Uコン』を読めて幸せ

私は本誌『UFOコンタクティー』という素晴らしい本を読むことができてとても幸せです。決して大げさに言っているのではなくて本当に、この本は日本GAPの会員の方々の心を明るく照らす灯となっているものと思います。久保田先生、これからも、私たちのためにも『UFOコンタクティー』をお願いいたします。そして私たちはと言いますと、スペース・ブラザーズに会いに行こうというのではなくて、まずスペース・ブラザーズに会えるようになるように、宇宙哲学を生かしていこうとしなくてはいけないのではないかと思います。いかがでしょうか。

以上で私がふだん宇宙哲学を活用している四つのことについてのお話を終わります。私をこのような場に立たせていただきました久保田先生、篠さんはじめ皆様方にとても感謝いたしますとともに、皆様方が創造主の生命力と一体となってますますご活躍ご発展なさることをお祈りさせていただきます。ありがとうございました。（八月の東京月例会の講演）

丸窓の並んだ 母船が出現！

後藤澄子

UFOは五回現れた

この出来事は、昨年の冬、午後三時半頃の事でした。その日は会社の帰りで歯科さんへ行く予定でしたのでとても急いでいました。でも私はいつもの癖で、どんなに忙しくても外出する時は何回か、細長い雲はないか、飛行機雲のような跡はないかと空を見回すのです。

会社からバイクのスピードを速めて家まであと三分程という地点で、ふと、北の方向に気になる雲をみつけたのです。バイクを止めて少し様子をみたのですが変化がありませんでした。でも、どうしてもその気になる雲の周辺にUFOがとどまっているような気がしてしようがなかったものですから、そこで私は、通じるかどうか、想念を送ってみようと思い「その地点にまだいらっしゃいましたら姿を見せて下さい」と念じてみました。そうしましたら、通じたのでしょうか、その気になる雲の下から、比較的小さく見える細長くて白いUFOが現れ、東から西へと水平に飛び始めたのです。ところが、五秒ぐらい飛んで突然消えてしまいました。どこへ行ったのかとその周辺を見つめていましたら、さき程よりももっと北寄りの方向からまた現れ、一定の速度で、西の方向へ飛んで行きました。

私はそれから、少し満たされたような気持ちで家路を急ぎました。そしてようやく家に着いたと思い、家の前をカーブしようとしましたが、ふと、何げなく後ろを振り返って北の方向に目を向けてみましたら、さき程と同じ大きさのUFOが、やはり水平に、東から西へと飛んで行きました。そのUFOは、私の視界の中心に飛んでいましたので、私は偶然なのだろうかと思いつつ、家で急いで支度をすませて、またバイクに乗って駅に向かいました。

駅にバイクを置いて電車に乗り換えて、歯科さんのある駅で降りました。そして商店街のある道を左側にカーブをして前方を見た瞬間、私は思わず微笑してしまいました。またもやUFOが私の来るのを知っていたかのように、狭い空間の中心に、東から西へと水平に飛んでいたのです。

私はそれからまた早足で裏通りに行き、もうじき歯科さんだと思いつつ最後のゆるやかなカーブを曲がろうとした時、ふと、左の方角にさき程と同じ大きさのUFOが、家と大木の空間の中心を飛んでいたのに気づいたのです。私は結局、その日の午後だけで五回もUFOに出合う事ができたのです。

家に帰ってから私は「私が見たUFOは同じUFOだったのだろうか？　あまりにも正確なタイミング、一定の速度、位置だった。私を意識していたのだろうか？」と考えました。その解答は、いまだにはっきりわかりません。

二本の筋を残したUFO

その後も似たような出来事が、その年の夏の午後にもありました。その日はとても暑く、家の近所の畑では私のいとこ夫妻が仕事をしていました。私が冷たい飲み物を持って行くと、二人は、前日のテレビでUFOの事をやったと私に話してくれました。そこで十分間ぐらい会話をして、私が家に戻ろうと隣の家の横道を曲がり、何げなく前方を見ましたら、家と家の中間に白く細長いUFOが、南の方向に飛行していたのです。その時、私は一瞬胸がひきしまる思いがしました。もしかしたら見られていたのかもしれないと思ったからです。

そんな事がありました後、今年の七月十七日の午後三時三十分頃（家事に忙しく外へ出入りしていた時でした）家の西側の植木の横から、少し幅のある飛行機雲のような跡をみつけたのです。「あれっ！」と思い、その雲を凝視していましたら、少し間をおいて、白くて細長いUFOが北の方向から南の方向へと、まるで二つの噴射口を備えてあるかのように二本の筋を残して勢いよく飛んでいきました。私は、少し小さく見えるUFOなのにずい分スピードを上げている事に感心して見ていましたが、突然消えてしまいました。

私は、また現れてくれるかと、進行方向に視線をそらさずにいたのですが再び現れてくれそうにもなかったので、その場はあきらめてしまいました。でもよく見ると、飛行機雲のような跡がある部分と消えて見えなかった部分とはなぜか一定の間隔だったのです。

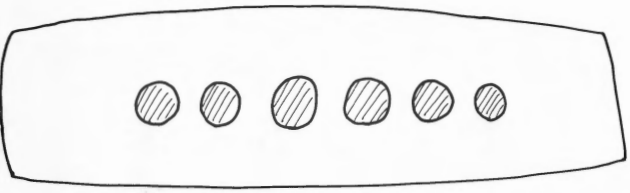
それからこれは後で思い出したのですが、前日の午後、野口さんから送っていただいた静岡支部報を読みながら「UFOは飛行機雲のような跡を残す場合があると思っているけれども、それが確認できたら昨年のUFOの事と一緒に原稿を書いてみたいけれど……」と思っていたのでした。

私は、ある程度確認できた事に満足して、また家事を続けて、時々外に出ては空を見上げていました。そして、もう夕食の支度をしなくてはと思いつつ、今度は南の空の方を見ていたのです。すると、南の前方に、またさき程と同じ長さの飛行機雲のような跡があるのに気づきました。もしかしたらと思い凝視していましたら、さき程と同じ大きさのUFOが、また二本の筋を残して現れたかと思うとまた消えてしまいました。私は、また現れてくれるかと思って進行方向に視線をそらさずにいましたら、ふと、目を疑いました。いつの間に現れたのか、白銀色で太陽の光に反射してまぶしく光る葉巻型のUFOが浮かんでいたのです。

一瞬私は、まるで重量感のある船体全体が、驚いて凝視していた私に笑いかけているような、かつて経験した事がない素晴らしいフィーリングを感じたのです。

また母船が現れた

私は、現実にこのような事を体験できるなんて思ってもみませんでしたので飛行機の見間違いではないかと翼を探したのですが、翼は見当たらず、家庭用の三十ワットの丸い蛍光灯ぐらいの大きさで、黒く見える丸い窓らしきものがいくつか横に並んでいたのがよく見えました。動きは感じられなかったので、多分静止していたのでしょう。私がいた地点から約七百メートルぐらいの所の上空に浮上していたのでしょうか？　長さが約八十～百五十メートルぐらいだったのでしょうか？　とても近くに見えたのですが、私はやや斜め後ろの方から見ていたのではっきりわかりません。でも、最初は細長く白いUFOだったのが、どうして突然消えてこんな低空に現れたのでしょう。



▲筆者が目撃した母船。丸窓が並んでいる。

「数はよくわかりませんでした。数を数えている間に消えてしまいそうでしたし、気持ちに余裕がなかったのです」

私は幸福感と不思議さを思いながら、太陽の光を反射してまぶしく光るUFOを見つめていて、ふと、数年前に実家の温室へ、実家にいた子供達を連れて行った帰りに、北の方向に、東から西へと飛んでいた一機のヘリコプターが、突然、南の方向にいた私達の方に向かって飛んできて、私達の頭上を一回りして、そしてまた念を押すかのように一回りして、もと来たコースへと飛んで行ったあの不思議な白銀色のヘリコプターの機体を思い出したのです。このときは午前でしたけれど、やはり太陽の光に反射して強くピカッ、ピカッと輝いていました。私は、その時のヘリコプターも今の母船も同じ金属で作られているのではないかと思い始めたのです。

その時突然主人が会社から帰って来ました。私は思わず苦笑してしまいました。待望の母船を目前にして、主人に伝えようかと思ったのですが「もし伝えて突然消えてしまったら……」「主人が目撃して、私が一層UFOに深入りするのではないかと思われたら……」と思うと何も言えなくなりました。

私はまだ主人に対して多少の恐怖心が先立っていて、どんな事を言われても冷静に答える事ができるほどに感覚器官のコントロールが、大きな心の準備がまだ私の内部になかったのです。私はその時、まだ主人には伝えられないでも母船を観測したいと思う苦しい葛藤を起こしたのですが「もっと人間として成長したらまた見せてもらおう」と自分に言いきかせました。

UFO目撃が人生の転機

素晴らしい予期せぬ出来事を経験して、そして翌日。午後二時半頃、私は家の近くで、西の方から南の方へとカーブを描きながら飛行機雲のような跡を残して空高く上へ上へと上昇して行く白く細長いUFOを目撃したのです。私はこの外にもこれまでにUFOを目撃した事は数回あります。

思えば昨年の暮れ、想念の力の誤用で、ある事に大失敗をしてしまいました。その失敗は、私のこれまでの人生においてとても苦い経験でした。でも、私自身のカルマを克服するには充分なレッスンでした。その失敗の余韻は長く続き、私は、事が起こった原因をさまざまな角度で分析しながら苦痛と戦いました。そしてようやく最近自分なりに、結局はすべて自己愛（利己的な愛）から起こった苦しみにすぎないという事を知り「自我としての自分を突き放した考え方や生き方をしていかなくては自我を高めるだけで、自己の内部に宿る創造主としての意識を無視した生き方で生涯を終えてしまう。創造主の元へ帰ろう。私を限りなく豊かにさせてくれて、すべての苦痛から解放させてくれる意識の元へ!!」と決心したのでした。そんなときにさき程の素晴らしい母船を目撃したのです。母船の出現は私を非常に元気づけてくれました。

当時私は勤務先の若い男性のなかでUFOを見た事がある人に『宇宙からの訪問者』（アダムスキー全集第1巻）を、もしよかったら読んでみて下さいと言ってみました。するとずい分厚い本だなあーと、パラパラとめくって、読めない漢字があるから読んでくれればいいけれどと言われました。私は皆純粋な男性だけれども積極性がない事を残念に思い、失望にも似た気持ちになりました。そして人にすすめるよりまず自分がこの哲学に述べられている教えを実行し熟知してからまた私ができる範囲で人々に知らせるようにしようと大きく気持ちを変えようとしたのです。そしてあのような出来事を体験したのです。

何回もUFOが出現して下さったのはもしかしたらあきらめてはいけないという事を意味していたのではないのかなと今頃になって思い始めました。

私はこれを契機に初心に帰って、目標を持った生き方をしていこう。宇宙の英知の元に生きている万物に対して尊重感と謙虚な心で見つめていこう。そうすればいつかあらゆるものが愛しいものとなり、意識と一体化する糸口を見つけられるかもしれない。そして今は亡きアダムスキー氏が言った、友情の力と兄弟愛は人類に幸福と平和をもたらす道具であるという言葉を心に持っていきたい。そして絶え間なく地球を観察し、地球人を援助して下さるスペース・ブラザーズに感謝しながら私は明日もまた果てしなく続く大空を見回すでしょう。宇宙の意識とは何ですか？　この具体的な解答を持っているいと高き者を求めて！

――未来展望記事――
二十一世紀の地球

あと十七年で地球は二十一世紀に突入する。地球はこれからどうなるのか。この記事は筆者の超能力透視ではなく、来世紀の地球の姿を予想した未来展望である。

松原眞弓

私は日本GAPの会員で、三十二歳の男性である。私の最も愛読する本はG・アダムスキーの『生命の科学』(アダムスキー全集第6巻)で、毎日この本を少しずつ読むことにしているため、今ではこの本はもうボロボロになってしまっていた。この本の第十課が私のお気に入りで、私は寝る前、自分の両方の手をじっと見つめ、それからどんな印象がやってくるかリラックスして待つのが日課であった。

昨夜も私はそのようにして、意識という生命の海に知識を得たがっている私の心を拡張し、私がかつて体験したことのない印象を感受しようと努めた。

……それから、私は二十一世紀の地球を見てしまったのだ。

緑豊かな未来の地球

私は肉体を脱し、意識そのものとして宇宙のただなかにあった。暗黒の宇宙のなかにホタルのような光が飛び交い、母なる宇宙エネルギーの生き生きした力を感じさせていた。遠くに輝く球体が見えた。それは間違いなく地球であり、雲に取り囲まれ、青い巨大な地球儀のように見えた。

私は急速に地球に近づきつつあった。地球は今、青白い雲の裂け目から、オーストラリアとアフリカの一部を、くっきりした見覚えある曲線で描き出し、私にそれが地球そのものであることを証明していた。

私は危うく声なき声で叫ぶところであった。どうだろう！　二十世紀にあった大陸やその海岸線の多くは、あの頃のそれとは様変わりに変わり、大陸が海になり、海が隆起し島となり変わっていたからだ。

「これは二十一世紀の地球だ」と私そのものである意識が私を導くように教える。私はこれが二十一世紀の地球であることにみじんも疑いを持たない自分を見いだす。

二十世紀末に大戦争と、地球地軸の移動があり、相当な大変動があったことを私は印象によって知る。

私自身はその時、死ぬのではないだろうか、死んでしまったのではないだろうかと、過去でもあり、未来でもあるものとして私はふと死の印象を得る。途端に私はそのことを確信した。

急に接近しつつあった私の速度が私の死の印象とともに加速され、近づきつつあった青い地球は、一瞬拡大し、光があたりに満ちあふれた。

明るい光の中で、今まで暗黒だった宇宙は青空に変化し、地球のまるい輪郭は恐るべき速度で拡張、後退し、それは私をとりまく地平線となっていた。

私は雲海のなかにいた。落下するともいえるような私の接近速度はややにぶり、なんとなく私を安堵させた。

その時、私は明らかに九州北部だと確信出来る海岸線を眼下に見いだした。

近づくと山脈の終わるあたりに、丘陵と平野があり、緑一色の植物で覆われていた。二十一世紀の地球がこんなにも豊かな植物であふれていることが、何となく私をほっとさせた。

しかし私が平野に求めた鉄筋のビル、ガラスに輝くビルはどこにも見つからなかった。ここは人の住みつかぬ郊外だからそのような建物がないのだろうか？　私は疑問に思った。その時、眼下に見慣れぬキノコのような物が点々と丘陵に点在しているのが見えた。にぶい光を放ち、硬質の金属かガラスのような、半透明にも見える円形の半球の群れ……。《空飛ぶ円盤が着陸しているのか》との思いと、その考えを否定する印象との間で動揺し、私はまた一段と地上に近づいた。すると、丘陵の斜面の突端にこれまで見たのより、ずっと近く輝くキノコが現れる。一瞬にして私はそれが二十一世紀の家であることがわかった。

セラミックの家、丸いドームの軽やかなセラミックの家がすぐそこにあった。

転生した私がいた！

突然、セラミックの丸い家から一人の男が現れた。男は薄緑のつなぎの服に黄色の鮮やかなベルトをつけて軽やかな足どりでドアから出、家の前の崖っぷちから眼下の遠い平野を見渡した。

彼が過去を想い出すかのような眼差しで顔を空に振り仰いだ時、私は驚愕の混乱に放り込まれた印象に襲われた。だがそれは単なる印象にすぎず、私は平静そのもので思った。《なーんだ、この男は生まれ変わった私自身ではないか。二十一世紀の地球に生まれ変わった私》

二十世紀の私は、時折想ったものだ。私が死んだら、今度生まれ変わるのは金星か土星かだ。私はいつも見果てぬ夢のように金星や土星の土地とそこに住む人々のことを想ったものだ。そこはどんなに若々しく、生き生きした人々にあふれていることか、と。

それがどうであろう、私が二十世紀に生きて来た関東と目と鼻の先の九州に生まれ変わるとは……。私には充分、思い当たることがあった。私は金星に生まれ変わるには、あまりにもいたらぬ人間であったことをよく知っていたではないか。生まれ変わりは、自分の生前の生活がカルマとなって足枷(あしかせ)になるのだと……。そうだとすると、九州に生まれ変わるぐらいが、私にとって相応ではないかと納得させられるのではないだろうか？

私は自分によく似た、自分自身の顔をむさぼるように眺めた。二十世紀のすべてが私の顔に凝縮しているのなら、二十一世紀の地球は、この未来の私自身に凝縮しているはずではないか。

彼は、確かに私とよく似ていた。年は私より年配かも知れないが、顔つきは今の私より若々しく、軽やかで、幸福そうで、生き生きとし、世界のすべて、物のすべて、自然のすべてと、そう、どのように表現すればよいものか、そうである、非常に親和しているとでも表現すれば一番よく当たるであろうか、彼はすべてを祝福し、すべてから祝福されているようであった。

二十一世紀の地球にはどれほどの人口が住みついているのだろうか。空から見た灰色のマッシュルームのような家の点在から考えて、相当の人々が生活しているに違いなかった。そのなかでよりによって、私は未来の私を見いだしたのである。それも真っ先に……。これは一種のテレパシーによるものであろうか？　ともあれ私はこの未来の私自身である彼を徹底的に観察することによってこの二十一世紀の地球を知ることが出来るに違いない、と考えた。

貨幣制度のない社会

私は男とともに彼のセラミックの家に近づいた。家の土台は電極を二本土地に差し込み、超高圧の電価を与えることによって、そのまま土を溶融させ、固めてあった。そこに薄いセラミック製の家を乗せてあった。家はいわばセラミックの二重構造で、魔法ビンのように壁間を密閉して、真空にしてあった。

彼は家のなかに入ると中央の居間の片隅にあるパネルの前に腰をかけた。椅子は二十世紀のそれの半分の高さしかなく、彼の膝は腰より高い水準で折り曲げられた。

パネルにはアラビア語に似た文字が液晶のように映されていた。私はテレパシックに彼の意識に添った。文字は地球全体の共通語の文字で、二十一世紀はすでに地球は統一的な極小政府が出来ており、小国家間の対立はもはやなかった。人々の眼は太陽系惑星各々の人々との外交に向けられ、太陽系以外の近接恒星の人々まで意識され始めていた。

パネルの文字は「今後一年間の行動計画の自己申告と支給を受けるべき基本的な物資の申請」との意味に読めた。

二十一世紀の人々は二十世紀の人々が税務署に過去一年間の所得を申告するように、未来の一年間の行動計画を申告し、一年間に自分が使用したいあらゆる施設、物、食糧、働きたい職業、学びたい学校、旅行したい場所のアウトラインを中央政府のコンピューターにインプットしなければならない。地球全体の人々からインプットされたこれ等の計画はすぐさま生産されるべき物や施設、必要な職業にアウトプットされ、年間の生産量を決定したり、職業の配分や、宿泊施設の拡張や物資の流通計画の基礎的ラインを決定するのである。

《二十一世紀は貨幣がなくなっているのか》と私は驚いて自問する。《まさか共産主義の社会になってしまっているのではないだろうな》

私のこの考えに答えるように男は少し皮肉っぽい笑みを表情にもらしながら、二十世紀の地球の歴史に想いを馳せる。

二十一世紀の人々は前世紀の人々のように有神論者と無神論者の対立はなくなってしまっていた。人々は科学と生産技術の素晴らしい進歩のなかで、すべて神を信じる人達に変わってしまっていたのだ。

前世紀のように意識が存在すれば神は存在しない、との意識と神との対立は解消されてしまっていた。

意識こそ、神そのものであった。これは決して象徴的な考えではなく、科学の発展に裏づけられた具体的な考えであった。あらゆる存在が意識によってその存在を毎瞬毎瞬支えられていることが発見されたのである。人が意識の支えがなくなれば死んでしまうように、細胞レベルでも、物質の分子レベルでも、反対にマクロの宇宙、惑星さえも意識を持ち、意識に支えられて存在していることが発見され、肯定されたのだ。二十一世紀の神は意識という宇宙に拡がり、宇宙を支える原因の海であった。

人々は自から各々が意識であり、永遠に生まれ変わりつつ存在し続ける神の分身たることを知り、肯定し始めたのである。二十一世紀は、生と死の対立を前世紀の人々が信じたようには認めなくなった。世紀は、有限から無限へと転回したのである。

前世紀は希少性が人々の観念と生産性において猛威をふるっていたが、二十一世紀は、人々が自ら望むものはほとんどのものが手に入った。オートメーションによる生産技術の革新、ロボット工場における生産性の向上があらゆる生産物の希少性を駆逐してしまい、同時に貨幣制度を崩壊させてしまった。貨幣制度を維持することが無意味になってしまったのだ。

生産性の向上は人々の労働時間を週十二時間程度に短縮させただけではなく、二十世紀に見られた使用と所有との間の深い溝を無くしてしまった。二十世紀が私有と希少性との対立に振り回され、いかなる経済政策もうまく行かなかったことが、この時代には笑い話にさえなってしまっていた。貨幣制度は廃止され、欲するものは何でも手に入る時代がやって来たのだ。二十世紀の共産主義社会は二十一世紀から見ると無神論的資本主義の社会以外のものには見えないのだった。

二十一世紀の人々は各々が自宅の端末機を通じて、中央政府のコンピューター

に次の一年間に使用する物、サービスを指令することで、政府の生産活動と生産量の決定とに参加し、コントロールするのだ。あとは、自からインプットした生産物とサービスを受け取り、あらかじめ申し込んだだけの自からの労働を提供するだけである。そこには何の制限もなく、強制もないのだ。

このような方法による政府活動への各々の参加と消費の方式によって、人々が浪費を始めたかというと全く反対で、人々は無駄な消費をしなくなったのだった。いくらでも入手出来るので、二十世紀に見られたような神経症的所有としての無駄使いがなくなり、廃品は丁寧に集められ、再生されるシステムが完璧に打ち立てられたのである。ゴミも排泄物もリサイクル資源として何回も、無限に使用する技術が確立され、自然破壊は極端に少なくなってしまった。

二十一世紀の妻

未来の私自身である二十一世紀の男が、端末機に一年の計画を入力している間に、私は彼の背後からパネルをのぞき込みながら、これだけの知識をテレパシックに得たのである。その時、窓を通して、家の外の樹々のこずえが小さな嵐にでも出合ったように激しく揺れた。音は遮断されていて聞こえなかったが、その動きから、枝葉がすれて音をたてていることを明らかに私は知った。

男は立ち上がるとドアを開けて外へ出た。あたりは日陰になり、頭上には一台の空を飛ぶ機械がいままさに着陸しようとしていた。

それは円盤に似ていたが、それほど平たくなく、空飛ぶマッシュルーム、空飛ぶ家とでもいうべきものであった。それと今男が出て来た家とを見比べた時、私は完全に理解した。家そのものが空を飛べる構造になっているのだった。今、着陸し、にぶい金属音を震わせた機械と、男が今までなかに居た家とは、全く同じ形、同じ大きさをしていたのだ。

着陸した機械は、ドーム形の屋根の先端をしばらく輝かせていたが、やがて光が消え去ると、側面のドアの下から階段が二段ほど出て、それからドアが開き、中から人が現れた。私がもしその場で自分の肉体を伴って立ち会っていたら、きっと腰を抜かしていたであろう。中から出て来た女性は、現に二十世紀の地球で私が結婚している妻の登貴子だったのだ。

《いや、それは登貴子ではない、登貴子の意識が生まれ変わった二十一世紀の彼女なのだ》

彼女は、二十世紀の登貴子とよく似ていた。しかし、二十世紀の私の妻のように、どこか神経質で疲れた表情はそこに見いだせないのだ。私の妻よりもずっと美しく、ずっと若々しいその女のちょっとした眼くばせは、だが、私の妻以外の誰のものでもないあの仕草だったではないか。彼女は私の妻であった。私の妻の生まれ変わり以外のものでは絶対になかった。

彼女はドアから階段を下りると、男に近づき、親指を立てた手のひらで、そっと、軽やかに男の手のひらに触れ、何かを囁いた。《なーんだ》と私は思った。《私も妻も死に、生まれ変わって、二十一世紀の地球で同じように二人で生活しているではないか。二人は結婚しているに違いない。これは何てことだ》

これまで私は、なんとなく、男性は生まれ変わると女性となり、女性は生まれ変わると男性になると思っていたが、場合によっては違うこともあるのだと今、わかった。そういえば、ジョージ・アダムスキーの妻は地球で女性だったが、金星に生まれ変わってやはり女性であったことを私は思い出していた。

それにしても二十世紀の私達夫婦が二十一世紀の九州に生まれ変わって、また夫婦でいるのは、少しまれなケースではないだろうか……？　でも、二十世紀末に、おそらく私達は災害で同時に死んでしまい、充分夫婦として人生を全うすることが出来なかったので、このようになるのかも知れない。私はカルマと生まれ変わりのなんと妙なることかと驚くばかりであった。

家が空を飛ぶ！

二十一世紀の人達は、ヤドカリのように一人一軒ずつ家を背負って生きていると考えるべきか、それとも自家用円盤に住みついていると考えるべきか、私は思案にくれて、私と妻の未来の存在である男女の二人を眺めていた。彼等は今、着陸したばかりの円盤型家屋から一本のケーブルを引き出し、着陸地点から十メートルばかり離れた場所にある風呂の浴槽をさかさにしたような箱に接続した。それはエネルギー発生装置から充電しているような様子であった。

ボックスはかすかに震え、うなっているようであった。それは中性子による小型の燃料電池のごときもので、クリーンな核発電装置であった。このボックスの中にある小さな弁当箱のごとき核燃料を一年に一回ほど取り換えることによって、二、三台の空飛ぶマッシュルームの家の全エネルギーは充分賄えるようであった。

二十一世紀においては、燃焼と核分裂を越えたクリーンエネルギーが全く容易に得られることが発見されたのだが、アダムスキーが述べたことのある太陽と惑星間の相互重力関係を維持する交番磁場エネルギー利用が確立した。この宇宙のエネルギーに共鳴させる装置が出来たため、乗り物は小から大まで安価で無限にあるこのエネルギーによって動かせるようになり、地球上のあらゆる道路は散歩道に変わってしまったのだ。

交番磁場に共鳴させるために小さなエネルギーで共鳴モーターを同調速度で回転させればよいのだが、このモーターの動力としては、中性子による新しい核エネルギーの蓄電箱が充電されていればよいのであった。今、ケーブルを彼女が接続したのはその充電を行っているのだとわかった。しかし外宇宙用の宇宙船では、それ自身で発電しながら、交番磁場と共鳴させ得るので、充電する必要はなく、何十年も飛び続けるようだ。

この共鳴モーターは全く簡単な装置で、

このような型のモーターをあれほど高度に発展した二十世紀の技術者がついに考えつかなかったことが、最も不可思議なこととして、二十一世紀の人々の話題になっていた。

彼女はマッシュルーム円盤から何か取り出して来て、男に手渡していた。彼女は今朝この九州北部から飛び出して、南米まで瞬時に飛び、そこで五時間ほど働いて来たらしい。

地球の裏側まで、たった五時間、しかも農場で普通の労働をするためだけに行き、終われば九州まで帰って来るなんて、二十世紀の地球ではもったいなくて考えられないことではないか。そんなに簡単にこのマッシュルーム円盤が空を飛び交ったのでは、あまりにも過密になりすぎて事故が起こるのではないかとも思ったが、それはすべて二十世紀の技術の水準とエネルギーコストの水準で考えるから起きる心配にすぎないのである。

彼女の農場では、バイオテクノロジーの発達によって、植物であるのに肉よりも豊富な各種アミノ酸等を含む栄養に富む根菜を作っていた。このような農業の革命と海草の栽培によって、二十一世紀では畜産、漁業がほとんど行われなくなっていた。ロボットによるオートメ農業によって、あらゆる食料が一番楽に、かつ能率的に生産されるだけでなく、この植物食料が最も美味であったから肉食をする人がほとんどなくなるという、食習慣の革命が起こっていたのだ。

なくなったのは畜産、漁業だけではなかった。家もセラミック製、家具もセラミック製となり、しかも海綿構造の軽いセラミックの発達によって林業も資材生産としては全くなくなってしまっていた。

彼と彼女が連れ立って、彼の家に入ったので、私も一緒に入った。彼女は片隅の小部屋を開け、中から小さな器具を出して来た。その時、ベッドがちらりと見えたがそのベッドは平らなものではなく、明らかに彼の背にぴったりはまるように体型通りにくぼんでいた。この方が安眠でき、健康に良いのだとすぐわかった。

彼女は居間で彼と椅子にかけて、さきほど取り出した器具からのコードを足と腕につけていた。

それは細胞再生援助装置であった。この機械に月に一度かかることによって、人々の病的な細胞は皆新しく再生し、このため人々の寿命は数百歳になるだろうと将来が期待されていた。二十世紀にみられたガンは、その原因が電気的な超絶縁にあることが判明し、道路も靴も家屋の床も衣料も導通が計られたため、二十一世紀には全くみられなくなった。

二十一世紀の人々は、死が遠のいただけではなく、死を恐れなくなり、生をむやみに貴重視することもなくなった。葬式は生まれ変わりの出発点としてお祭りとなり病院もほとんどなくなってしまった。この外、なくなったものに、警察、裁判所、軍隊、税務署等、官庁のほとんどが含まれることがわかった。

土星から来たイエスと会う

二十一世紀の二人は居間にくつろいで、透明な飲み物を飲み、歓談していた。飲み物は沸騰させたことのない重水ではないかと私は思った。

その時、二人は何かテレパシックな印象を感じたらしく、立ち上がって、丸窓の外を眺め、服を着替え始めた。男は白のつなぎ、女は黒いつなぎの服を着た。それは正装に違いないと感じられた。

しばらくして、また窓越しに樹木のこずえが風に吹かれてたち騒ぎ、二人は顔を見合わせると家から出た。外に出ると、マッシュルーム型円盤が空中に浮かんでいた。二人は手を振ってそれを迎えた。着陸した円盤からは若い男女と一人の少年が降りて来た。若い女性は少年の母親で、出迎えた二人の娘だったのだ。娘夫婦と孫が訪ねて来たのだった。二人——祖父、祖母である二人は、私より若いと私は何となく信じていたのだが、それは間違いで、二人は六十歳を越えていることがわかった。

一家五人は楽しそうに近況を確かめ合っていた。少年は八歳位であろうか、しかし二十世紀の子供らしさは彼にはなく、体は小さいが、大人の責任感としっかりした態度を持していた。

彼らは、娘一家の円盤に乗り込んだ。イスラエルのハルマゲドンで集会があり、彼等は出席するのだ。

一家の円盤はたちまち空に舞い上がり、一路、西の空へと飛び続けた。

ハルマゲドンは朝の日差しのなかにあった。巨大な平原に遠く葉巻型の宇宙船が横たわっていた。そこに近づくにつれ、その母船の巨大さに私は圧倒された。長さは二十キロ以上あり、それは巨大な葉巻型の都市だった。土星の母船であることを一家は話し合っていた。一家の円盤はたちまち母船の黒い穴の中に吸いこまれ、ガレージに到着した。

一家は喜びに満ちあふれていた。彼らは今日、イエスキリストに会うことが出来るのだ。私は驚天した。地球を去り、火星で女性として生まれ変わったイエスは、その後金星に生まれ変わり、一千歳を越えて二十世紀後半に亡くなったとの情報を得ていたからだ。

今日一家が見ることの出来るイエスキリストは、金星から土星に男性として生まれ変わった現在八十五歳の若きイエス、再生したイエスだった。

私は彼らに従って、扇形の巨大なホールに入った。ホールは柔かな光に満ち、光も壁も生命力で打ち震え息づいており、自らと他を祝福して讃え合っているようであった。

土星からイエスと共に来た指導的長老が話し始めていた。人々は穏やかで生き生きした幸いに満たされた。私だけは、そろそろ二十世紀の自分の床へと帰るべきパンプキンタイムが来たことで焦っていた。

ホールを占める人々の感嘆の声が静かにわき起こった。

イエスキリストは輝きのなかに現れた。地球の我々には忘れられないイエスの顔が、ずっと若々しく、今、ここに喜びに打ち震える人々の目前にあった。私はここにイエスと再会したことを心に刻み、二十一世紀の地球を去った。

異星人イエスの足跡を訪ねて

―強烈に輝くUFOが出現！―

久保田八郎

日本GAP第6回海外研修紀行

去る八月十五日より十日間、日本GAPは企画第六回「第二次エルサレム宇宙考古学の旅」を実施し、計二十六名の旅行団はイスラエルのエルサレムを中心とする各地のイエス関係や旧約の遺跡を見学して感動を新たにし、続いてスイスへ移動して、グリンデルヴァルトから登山電車でユングフラウヨッホへ登り、雄大なユングフラウの主峰を望見したが、特にグリンデルヴァルトのホテルから眼前にそびえるアイガー北壁の右側空中に、夜間、ものすごく強烈に光るUFOを十二名が目撃するという事件が発生して、大成功裡に二十四日午後、全員無事帰国した。以下は素晴らしかった旅の報告である。

昨年八月に日本GAP海外研修旅行第五回目の「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施して歓喜と感動につつまれた私たちは、多数の会員の方々の要望にこたえて、今年も第二次のイスラエル行きを企画し発表したところ、二十六名の参加希望者が出たが、飛行機の都合により出発日が延びて十日から十五日に変更されたために、三名が涙をのんでキャンセルし、一名ふえたので結局二十四名となり、これに旅行会社の田中氏と私を加えて二十六名となった。こじんまりした、まとまりのよい旅行団となり、しかも半数の十二名が女性で、美人が多いために終始華やかな雰囲気に満ちていた。ただし石田義雄君（川崎市）は出発時にパスポートを忘れて出たので成田から一緒に行くことができず、二日遅れて一人で追いかけてきてエルサレムで首尾よく合流した。

イエスは金星から転生した

私たちが遠いイスラエルまでイエス関係の遺跡を見に行くのは、キリスト教徒の巡礼ではなく（私たちはクリスチャンではない）、二千年前にイエスという偉大な人物が金星から地球へ転生してきた、（生まれかわってきた）という知識を持っているからにほかならない。このことはアダムスキー全集第1巻『宇宙からの訪問者』（文久書林刊）一九二頁、二六六頁に述べてあるので参照されたい。

したがって日本GAPを宗教的だといって批判するのは妥当ではない。私たちは宗教とは一切無関係である。日本GAPが研究実践するのは、あくまでもジョージ・アダムスキーによる宇宙空間の実態、特に太陽系の他の惑星の偉大な文明と彼の説く宇宙的哲学である。その哲学の中にイエスの教えがしばしば引用されて宇宙的な解釈がほどこしてあることはア全集の特に第6巻『生命の科学』で知ることができる。

私たちは既成の宗教を否定するものではないが、真に人間を救うものは究極において科学であり、それが精神面に応用されるときに人間の精神が偉大な力を発揮すると考えて、それを実践しているのである。詳細はアダムスキー全集と本誌に連載中の拙稿『宇宙哲学解説講座』を読まれたい。ただし本号ではスペースの都合により休載した。

榊原師との再会

さて私たちの乗ったアリタリア航空一七九一便は片道二十二時間半という長途の飛行の後にローマ空港に着陸した。現地時間で十六日午前九時三十五分である。途中ホンコン、バンコク、デリーに約一時間ずつ立ち寄った。成田を前日の夕刻六時五分に離陸して以来、日本時間の翌日午後四時三十分にローマへ着くまで機内で五回食事が出たので食欲は全くない。

ローマ空港で四時間半待機して、午後二時七分にアメリカのTWA機で離陸。三時頃にまた食事が出たが、ほとんど食べられない。そして四時四十七分に目指すイスラエルのテルアビブ空港に無事着

▼前列左より高橋和美（埼玉県）、今西正子（神戸市）、大場静子（東京）、山崎清美（栃木県）、矢野紀子（千葉県）、安藤博子（千葉県）、☆中列左より田中正（神奈川県）、佐々木智子（広島県）、橋本由紀子（東京）、中根久美子（青森県）、柴田文子（山形県）、菊地啓子（宇都宮市）、平野祥子（東京）、安藤澄雄（千葉県）、★後列左より久保田八郎（東京）、萩原昭彦（長野県）、柴田光明（山形県）、中根豊（青森県）、小島岩男（東京）、今西行雄（神戸市）、大橋利昌（岐阜県）、安達孝一（山形県）、渡辺克明（栃木県）、佐藤忠義（東京）、宮城裕（沖縄県）。

▲榊原茂師

陸した。計二十九時間四十分という大旅行である。

空港には昨年お世話になったエルサレム在住日本人ガイドの榊原茂先生が出迎えにきておられた。前回の旅行記にも書いたように仙台出身の先生はただのガイドではない。日本で大学を二つ出て神学を学び、十三年前にイスラエルへ移住して、最低生活に耐えながらイエスの足跡を求めて流浪を続け、ヘブライ大学で研究し、キリスト教神学の奥義をきわめた方で、現在はイスラエルきっての名ガイドとして活躍されるかたわら、余暇が生じると他国へ伝道に出かけるという傑出した人物である。英語とヘブライ語が達者で、奥さんはオーストラリア人。可愛いお嬢さんが二人あり、九月には三人目が生まれるとの由。家庭では英語で暮らしておられるという。私は榊原師との再会を心から喜んだ。

日本では知られていないイスラエル

今夏のイスラエル訪問は二度目なので、あらゆるものを落ち着いて観察することができた。空港からバスで出発すると、やがてオレンジ、グレープフルーツ、イトスギなどの畑や、綿畑、ヨシュア記に出てくる広漠たるアヤロンの茶褐色の平野が右手に展開する。四千年の歴史を秘めたパレスティナの大地だ。

イスラエルという国は日本でほとんど理解されていない。イスラエル人というのは大体にユダヤ教を信奉するユダヤ人である。ユダヤ教の経典は旧約聖書のモーセ五書といわれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記であり、これらはユダヤ民族の史書でもある。そしてモーセその他の偉大な預言者が輩出している。

ユダヤ人の王国がカナンの地に建設されたのは前一〇〇〇年頃、サウル王のときで、その後武将のダビデが王位を奪い、その子ソロモンの治世下に統一イスラエルの繁栄が頂点に達した。ソロモンはエルサレムに壮麗な神殿を建設するが、これを第一神殿期という。

その後イスラエルは分裂と他国からの侵略の連続で混乱し、前六四年に強大なローマ軍に襲われてその支配下に入る。

前四〇年にはヘロデがローマによってユダヤ人の王に任命されるが、独立国の王ではなく、いわば雇われマダムである。ローマ一辺倒の建築好きなヘロデはエルサレムに壮大な神殿を建立する。これを第二神殿期という。

この王の息子でガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスの治世下に、ナザレ出身のイエスという人物が史上最大の悲運と栄光のドラマの主人公となる。

ヘロデ王の神殿と町は紀元七〇年にエルサレムへなだれ込んだローマの軍団により徹底的に破壊され、これ以後祖国を失ったユダヤ人の世界流浪が始まる。

近代のイスラエル建国の件は長くなるので省略しよう。とにかくイスラエル人の歴史はきわめて複雑だが、以上きわめて大ざっぱに述べた。私たちが「イスラエルへ行く」と言うと「えっ、あの戦争をやっている国へ何をしに行くのか?」と驚いて聞き返されるのが普通だが、イスラエルは日本と同じほどに治安が良好なのである。

平和は勝ちとるもの

バスの窓からながめると、道路ばたに装甲車の残骸があちこち見える。榊原師の説明によると、元首相のベングリオンが、「平和はむこうからひとりでやってくるのではない。戦って勝ちとるものだ」と言った教訓を残すために、わざと放置してあるのだという。この言葉はこたえた。戦乱と迫害で明け暮れしたユダヤ人は、日本人のようにすべてを水に流せという考え方はなく、歴史から学び取る態度が強いのだ。

やがて標高八百メートルのエルサレムの町が見えてきた。ここは市の条令により、民家はすべてエルサレム・ストーンという薄茶色の石で建てられているので、町全体が古典的な石造都市という感じがする。木造建築は許可されない。したがって日本とは全く異質の世界である。地震の多い日本で、こんな石造の家を建てればえらいことになるだろう。

夜八時四十分より二十一階の食堂で一同最初の夕食会を開催。全員自己紹介をする。

エルサレム旧市街の素晴らしい眺望

明くれば十七日、快晴である。空気が乾燥しているせいか、昨夜の洗濯物はすっかり乾いている。

八時十五分に一同専用バスでホテルを出発。外気はかなり冷たい。師によるとエルサレムには日本のような春と秋がなく、夏をすぎると急に寒くなり、いきなり冬になるという。特に十一月からは雨季に入って寒い日が続くから、エルサレム観光は夏に限るのだ。

バスはやがて旧市内の城壁にそう道路へきた。新門、ダマスコ門を通過する。ここからはアラブ人街で、雰囲気は変わってくる。ヘロデ門を右に見て走ると、大勢のアラブ人が羊の市を開いている。珍しい光景だ。

バスはケデロンの谷を渡ってオリーブ山へ登る。ロバに乗った汚い服装のアラブ人が悠長に往来し、きわめてエグゾティックな光景が展開する。

やがてオリーブ山の展望台へ来た。昨年はここから初めてエルサレム市街をながめて驚嘆し、榊原先生に頼んで二日目目もここに来たのだが、今回は一度の展望だけなので、目をカッと開いて、四千年の歴史を残すこの優雅な古代の都市の姿を脳裏にたたき込もうと佇立した。昨年とちがって今日は風が強いが、三度目

にオリーヴ山から見るエルサレムは、別な意味での感動がわき起こる。心中に聖歌や挽歌の大合唱が怒涛のごとく響いてくる、ということはない。高層ビルが林立して近代化の波に洗われねばよいがと思うだけだ（二〇頁タイトルバック写真）。

中央の岩のドームの金色の輝きが美しい。長い城壁は四百四十年前にオスマントルコのシュレイマン大王が建造したもので、イエス時代のものではないが、そのかげから、いまにもローマの軍団が喚声をあげて突進しそうだ。

左手前方には見覚えのある鶏鳴教会、岩のドームの左寄り彼方にゴルゴタの丘に建てられた聖墳墓教会、右手のオリーヴ山のふもとには万国民教会とゲッセマネ庭園のオリーヴの茂みが見える。いつまで見ても飽きのこない素晴らしい風景だ。

洞窟を利用したイエス

ここで約四十五分間眺望してから一同はバスで山道を進行して山上の主の祈りの教会へ行く。これはローマのキリスト教改宗者コンスタンティヌス大帝とその母ヘレナが、イエスを記念して四世紀初めに建立した三つの最も古い教会すなわちベツレヘムの生誕教会、エルサレムの聖墳墓教会、主の祈りの教会の一つである。

ここはイエスが有名な祈りの言葉である「天にましますわれらの父よ、願わくば――」を弟子に教えた場所である。別名エレオナ教会ともいう。

イエスが弟子に語った場所は主として洞窟なのであって、民家ではない。イエスの時代は洞窟が住居によく利用された。ナザレ出身の彼はエルサレムという都会地をあまり好まず、もっぱら郊外の洞窟で休息しては弟子たちに教えを伝えたらしい。その洞窟は教会内に残っている。

また長い回廊には祈りの言葉を世界の六十カ国語以上の異なる文字で書いたパネルがずらりと掲げられて壮観だ。ここで榊原先生はヘブライ語の祈りの言葉を朗々と読みあげる。

〝天の父〟とは何か

右の祈りの言葉で「天の父」というのをほとんどのキリスト教信者は遠い天空の彼方にいる神と考えており、それにむかって地上から罪人である人間が願いや頼み事をとなえて呼びかけるというかたちが、いわゆる〝祈り〟とされている。

これをアダムスキーの宇宙哲学的に解釈すると、天の父とは〝大宇宙空間に満ちている宇宙の意識〟である。それは人間を含む万物の内部に存在するのであって、遠い空の彼方にあるものではない。したがって祈りの言葉を宇宙哲学的に書き直すと次のようになる（カッコ内）。

「天にまします（大宇宙空間に満ちている）われらの父よ（万物を生かしている宇宙の意識よ）。御名があがめられますように（宇宙の意識が人間に気づかれてそれに敬意が払われますように）。みこころが天に行われるとおり（宇宙の意識の世界で完ぺきな青写真が描かれているように）、地にも行われますように（そのように現象の世界も完ぺきになりますように）」

つまり宇宙の意識（創造パワーまたは英知）の世界では人間をはじめ万物の完成された青写真が描かれているので、人間個々も「自分は宇宙の意識によって本来は完全に造られている人間なのだ。病気その他の欠陥などはないのだ」ということを強く思念せよ、そうすればその思念どおりに実現する、とイエスは教えたのである。つまり人間の想念の持つ偉大なパワーとその応用法を伝えたのだが、当時の弟子たちにはよく理解できなかったらしい。以来、世界のキリスト教信者は人間と神とを完全に分離させてしまい、手の届かぬ彼方の神に呼びかけるだけであるから、祈りは容易に実現しなくなってしまった。イエスの教えがおそろしくゆがめられていることを二度目のエルサレム訪問で今更のように痛感し、またアダムスキーの宇宙哲学の偉大さを腹の底から感じた旅ではあった。

ユダは裏切り者ではない

次に七十メートル離れた昇天教会へ行く。八角形の小さなチャペルは十二世紀の十字軍時代の建立になり、土台は五、六世紀のビザンティン時代のものである。

この内部にはイエスが昇天したときの足跡を示す岩が残してある。しかし長さが四十センチもある凹んだ足跡は不自然だ。このチャペルは一一八七年にエジプトから来たサラハディンの軍隊に占拠され、以後はイスラム教徒のものとなったが、彼らもイエスの昇天を信じていたので、この堂宇はよく保存された。

バスは山を降りて山ろくのゲッセマネに着いた。周知のごとく、ここはイエスがシオン山で最後の晩餐をやった後、ケデロンの谷を渡り、このオリーヴの茂る庭園へやってきて、夜通し祈った場所である。死ぬか逃げるかの啓示を得ようとしたらしい。その結果、死ぬほうがよいというレヴィレーションがあったらしく、ここで堂々と大祭司の手下どもに逮捕される。

手下どもを案内したのは裏切り者のユダということになっている。しかし筆者が一九七五年（昭和五十年）の十一月にアメリカ・マサチューセッツ州ノースボロに住むアリス・ポマロイ夫人宅を訪問して、もとアダムスキーの高弟であった夫人から聞いたところによると、ユダは実際には裏切ったのではなくて、むしろイエスを助けようとしたという。当時イエスのグループの会計係だった彼は、大祭司の部下である坊さんにいくばくかの金を渡し、これで助かるように大祭司に働きかけてくれと、いわば贈賄工作をやったのだが、坊さんは金を持って逃げてしまった。それで逆にユダが裏切り者にされたというのである。

現在の日本円にしてわずか七千円そこらにしかならない銀貨三十枚をもらってユダがイエスを裏切ったというのは、どうみても不自然だ。ユダが自殺したのはイエスが助からなかったのをみて悲観したものらしい。

歴史の陰には意外な事実がゆがめられており、世界中の人間がとんでもないことを事実と信じきっていることがよくあるらしいので注意を要するが、真相を知るのもむつかしい問題だ。

オリーヴの木は残った

四十五メートル×四十二メートルの、ほぼ正方形に近いゲッセマネ庭園は、周囲が鉄柵で囲まれているので、見学者は外側の通路を歩きながら中を見る。庭園内には八本のオリーヴの老樹があり、よく手入れされているらしい。胴まわりが七・三メートルもあるような大木が朝の陽光をあびて輝いている。

▲ゲッセマネ庭園

オリーヴの木は枯死しないので、樹齢二千年以上のものがあるかもしれないと植物学者は言う。すると、これらの木はイエスと弟子たちの言動を知っているかもしれない。もっともイエスが逮捕されたのはこの庭園から百メートルほど北にある裏切りの洞窟という場所であるという。そして実際にイエスが祈ったのは、この庭園に隣接して建てられている万国民の教会（ゲッセマネ教会）の内部に残っている苦難の岩の所で、祈り終わったあとで木々のあいだを通って洞窟まで行ったときに、大祭司の手下どもに捕らえられたということになるようだ。

エルサレムその他のイエス関係の遺跡は、ほとんど教会の建築物でおおわれているが、これは風雨を防ぐので遺跡を保護するにはよいだろう。ただし教会の維持は大変だろうと思い、維持費捻出の方法について榊原先生に聞こうと思いながら昨年は忘れたのだが、今年も忘れてしまった。

宇宙的だったクムラン教団

次に私たちはイスラエル博物館へ行った。ここにはクムラン出土品の素晴らしい物がある。この博物館は一九六四年に完成した建物で、内部をゆっくり見れば三時間ぐらいかかるが、時間の都合で書物の宮と呼ばれる死海写本のコーナーだけを見た。

中央には円形をなして名高い死海写本のイザヤ書の巻物が横に長く広げてある。また右隅には有名な『光の子と闇の子の戦い』の写本も展示してある。ただしイザヤ書は本物ではない。精巧に作った複製品であって、本物はヘブライ大学に保存してあるらしい。展示品は一年前とはすっかり変わっている。

私は特に『光の子と闇の子の戦い』に惹かれるものがあって、しばらく凝視した。これをアダムスキー哲学で言えば、ソウルマインド（宇宙の意識）とセンスマインド（肉体の心）の戦いという意味になるだろう。

またクムラン教団にはイエスが関係していた時期があり、二千年前この教団に属していた何名かの人が、転生して現在GAP会員になっていると聞いたことがある。この教団は宗教ではなく、宇宙的な哲学の研究実践をやっていたらしい。特に四つの感覚器官のコントロールに専念していたという。現在私たちが『生命の科学』（アダムスキー全集第6巻）をテキストにして感覚器官のコントロールをやっているのと同じトレーニングである。

洞窟で生まれたイエス

博物館を出て十一時十五分に一同はバスでベツレヘムに向かった。ここはイエスの降誕地として名高いが、ダビデ王の出生地であることは案外知られていない。エルサレムから八キロ離れたこの町には巨大な生誕教会が建てられている。

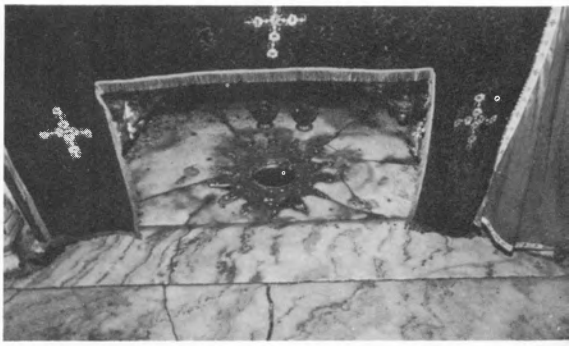
前述のようにこれは三二七年にローマのコンスタンティヌス大帝とその母ヘレナが建立したのが始まりで、その年八十歳のヘレナは献堂式に出席している。ヨーロッパでキリスト教を国教として確立したのはコンスタンティヌス帝であるが、実際はその母親ヘレナの影響が大である。この篤信の女性が聖ヘレナと呼ばれてカトリック史上不滅の名を残していることはよく知られている。

現在の教会は、コンスタンティヌス帝時代の最初のバジリカ（教会）の遺構の上に六世紀にユスティニアヌス帝によって建てられた教会を十二世紀に十字軍が改築したもので、本堂内には床下約六十センチの位置に初期のバジリカの見事なモザイクが一部の穴から見られる。現在は正面の祭壇をギリシア正教会、左側はアルメニア教会、奥の方はカトリック教会が分担して管理している。

教会の入口が低くて狭いのは防衛目的のためらしい。この生誕教会の中心部はいうまでもなくイエス誕生の洞穴である。これはギリシア正教の合唱隊席の地下にある。

石段を降りて狭い石室に入ると、東側の凹んだ所に星のマークの入った白色の大理石板が敷かれている。ここで幼児イエスが生み落とされて、その可愛い体が置かれた飼葉おけは右手の少し低くなった岩窟の中にあった。ガイドブック類には大理石板の位置に飼葉おけがあったと書いている例が多いが、榊原師の説明によると間違いであることがわかる。東方の三博士がやってきて礼拝したのも、すぐ右側の低い岩窟の中である。

イエスの時代には洞窟が住居がわりに



▲イエス誕生の場所

利用されたことは前に述べた。いまでもそうだが、アラブ人はよく洞窟を住居にする。その場合、人間は一段高い所に寝て、家畜は奥の少し低い岩窟に入れる。これは家畜に逃げられたり盗まれたりしないようにするためだ。

ヨセフとマリアが泊ったこの場所は一種の洞窟旅館だった。しかし満員で宿泊する部屋がないために、この家畜囲い付きの洞窟へ入ったのである。

日本人は木造の馬小屋を連想しがちだが、天然の洞窟部屋であったことを知る必要がある。こうした事実も現地で遺跡を見ないことにはわからない。だから旅の重要な意義があるのだと榊原師も強調されるし、私も皆さんに何度も力説した。

偉人のかげにすぐれた女あり

この生誕教会の北側に隣接する聖カタリナ教会の地下までいくつかの洞窟があり、そのなかに聖ヒエロニムスが住んでいた洞穴がある。

ヒエロニムスは四世紀の終わりから五世紀にかけて生きたイタリア人で、キリスト教から大いなる感化を受けて、この洞穴に住み、三十年かけてヘブライ語聖書をラテン語に翻訳した。これは後にローマ・カトリックの標準聖書となった。

ただしこの偉業のかげにはヒエロニムスの恋人であったパウラというすぐれた女性の力がひそんでいる。彼女はローマの貴婦人で、夫を亡くした人であり、娘のエウストキウムと一緒であった。未亡人になってからはヒエロニムスにひかれてこちらに移住し、激励したのである。どのような関係があったかは不明だが、自分より先に死亡した彼女の骸骨をヒエロニムスが抱いて暮らしたというのだから、「骨まで愛する」とはこのことだと榊原師がユーモアたっぷりに説明する。私はこの話に大いに感動した。昨年もここでこれを聞いたのだが、今回は特別に感慨深く拝聴する。

聖カタリナ教会の回廊僧院の中庭に、コンタンティヌス帝時代のバジリカの円柱があって、頂上にヒエロニムスの石像があり、その足元には愛人のパウラの頭骸骨が置いてある。これはいかにも複製らしく見えるけれども、実は本物なのだという文献もあるので、榊原師に尋ねてみたら、やはり複製だという回答だった。

この教会を出て、付近のレストラン、「アンダロス」で十二時半より昼食をとる。アラブ風のパンはおいしいが、満腹感があって、少ししか食べられない。ナーナという葉を入れて風味をつけたミント茶がおいしい。

レストランを出てからバスはふたたびエルサレムの方向へ走り、途中羊飼いの野を通った。この風景はなかなかよいので、しばしバスをとめて野原を撮影した。いまも四千年前と変わらぬ光景だという。

そのあと、ラマ・ブラザーズという大きな土産物店へ入る。ここも昨年来た所だが、店の位置が変わり、店内の様子も変わっている。

重要なアントニア要塞

エルサレム旧市内へ入ってから、まずムチ打ちの教会へ行く。白衣の修道女たちが祈っている。ここはイエスがムチで打たれた場所である。

次にヴィア・ドロローサ（歎きの道）の第一留（第一礼拝所）へ行った。昨年見なかった所で、ふだん観光団は来ないらしい。私は榊原先生にお願いしてぜひ見学したいという要望を伝えておいたので、今回は案内して頂いた。

この場所は現在はアル・オマリエ・スクールというアラブ人の学校の校庭となっているが、この広場こそアントニア要塞の南面であった所で、イエスがローマ総督ピラトの審問を受けて死刑を宣告された場所である。

この日は金曜日のために昔からの慣例に従って多くのキリスト教信者が十字架をかついで行列をやると聞いていた。さだめし立派なパレードかと思っていたが、実際は貧弱な行列だったので、私たちはそのあとに続くことはせず、校庭に残って全員記念写真を撮影した。

師の説明によると、現在の校庭はピラト時代の敷石よりも二メートル高くなっているという。

そのあとシオンのシスターズ教会の中へ入り、地下のローマ時代の水路跡を見る。続いてアントニア要塞の模型のある部屋で、榊原先生の詳細な説明を聞いてから室外に出る。

このアントニア要塞というのは現在地上の遺跡がほとんど残っていないけれども、イエスに関係のある重要な建築物であった。

この要塞はもとヘロデ王が建設した壮大な宮殿であったと考えられるが、後に

▼ピラトがイエスに死刑を宣告した場所

はローマ軍の一個中隊が常駐した。正方形の巨大な城壁の四隅に高い塔があり、ローマ総督の官邸としても使用された。

イエスが受難した週の第五日目の金曜日の夜明けに大祭司とサンヘドリン（全議会）によってイエスは死刑を宣告されたが、ユダヤ人には執行権がなかったので、折から過越の大祭の警備指揮のために、総督府のあるカイザリアからエルサレムのアントニア要塞へ出張していたピラトのもとへイエスを送ったのである。

ピラトはイエスがガリラヤのナザレ出身であることを知って、いったんガリラヤの領主でヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパスのもとへ送った。この男も過越の大祭のためにエルサレムへ来ていたのである。

ヘロデはイエスの奇跡に興味があって、いろいろ質問するけれども、イエスは何も答えない。業をにやしたヘロデはイエスをさんざん嘲弄して、またピラトのもとへ送り返した。

ピラトは裁判の座についた。この場所はヘブライ語でガバタ、ギリシア語でリトストロートスと呼ばれる〝敷石〟であったとヨハネは述べているから、アントニア要塞内の石を敷いた広い中庭である。室内ではなかったらしい。この中庭が前述のアル・オマリエ・スクールの校庭である。

アントニア要塞のあった跡には現在多くの教会、修道院、学校などが建てられて密集しているので、地上では要塞跡をしのぶよすがもないが、師の先導で地下の通路を通ると、古代の広い敷石の場所へ出る。これこそアントニア要塞の中庭の一部分と考えられるオリジナルの石だたみで、ローマ軍の兵隊たちが遊ぶためのゲーム盤として使用した、図面の刻まれた石も残っている。

ヴィア・ドロローサ（歎きの道）

私たちはいよいよエルサレムのハイライトであるヴィア・ドロローサ（歎きの道）へ出た。イエスが十字架の横木をかついでゴルゴタの丘の刑場までを歩いた約五百メートルの道のりである。

昨年は時間がなくて急ぎ足でここを歩いたので、あまり感慨にふける余裕がなかった。今年はゆっくり歩いて頂きたいと榊原師に頼んであったために、各留（礼拝所）をよく見ることができた。

まず第一留は前述のイエス死刑宣告所となったアル・オマリエ・スクール校庭、第二留はイエスが十字架の横木を背負わされた現在のフランシスコ会の主の宣告聖堂の外壁、第三留はイエスがへたばって、木をかついだまま最初に倒れた場所、以下十字架上で絶命した聖墳墓教会の内部まで十四留ある。

▲イエスが最初に倒れた場所（第3留）

この日は金曜日のため、各国の巡礼団や観光客で狭い道がごった返したけれども、私たちは各留で立ちどまって先生の説明を充分に聞くことができた。道幅は三、四メートルと狭い。この石だたみの道路も実際にイエスが歩いたオリジナルの道よりは二メートル高くなっているという。

しかし多数の神学者や考古学者の研究によって、イエスが歩いた道に間違いないとされているこのヴィア・ドロローサの各留のうち、聖書に根拠があるのは九つだけで、あとは単なる想定だという。十四カ所の留が巡礼の記録に現れ始めるのは十六世紀の中頃である。

自分のスカーフを差し出してイエスの顔に流れる汗と血を拭いたという聖女ヴェロニカの立っていた位置は第六留となっており、ここに聖ヴェロニカ教会が建っている。ヴェロニカの洞窟住居跡だ。

しかしこの物語は聖書にはなく、聖伝として伝わっている話であるから、どこまで事実なのかはわからない。案外事実であったかもしれないし、そうではないかもしれない。イエスに関するこの種の伝承は沢山あるが、事実とフィクションとを判別するのは困難だろう。

私たちは次々と各留で説明を聞いては前進した。狭い道路の両側にはアラブ人の土産物屋が建ち並び、不潔と喧騒をきわめている。だが数度訪れたメキシコやボリビアのメルカード（市場）やエジプトのバザール（市場）と同様にエグゾティシズム（異国情緒）に満ちているので、私はこうした場所が大好きだ。

複雑な聖墳墓教会

ヴィア・ドロローサの終点である聖墳墓教会へ入ったときには、昨年とちがって各国の巡礼者で超満員の状態であった。やはり金曜日のせいである。

この教会はゴルゴタの丘に建てられたものに間違いないが、もとはローマのコンスタンティヌス帝と母のヘレナが丘の頂上を削って平らにし、その上にチャペルを建てたのが始まりで、現在の壮大な建物は主として十二世紀の十字軍の手になるものである。

右手の石段を上がった階上の正面主祭壇の中央下部に、イエスの十字架が立っていたという穴がある。昨年はひざまづいてこの穴に手を突っ込んでみたが、今年は人が多いので、そうもゆかぬ。各国人がグループ別にここへ押し寄せるので、この穴を中心にわが旅行団の全員記念写真を撮るだけで精一杯だ。

この祭壇はギリシア正教のもので第十二留となっている。十字架の横木をかつがされたイエスは（十字架そのものをかついだのではない）この右側でまず衣服を脱がされ（第十留）、その左方で、倒された十字架に仰向けのまま釘づけにされ（第十一留）、続いて、起こした十字架を穴に立てられて、ここで息が絶えた

とされている。第十一留と十二留のあいだに「立ちたまえる聖母の祭壇」があるが、ここは十字架からイエスの遺体を降ろした場所とされて、第十三留となっている。

この聖墳墓教会は五つのカトリック系教会の共有となっており、各教会管理の聖堂が内部に沢山あって、たいへん錯綜している。

東端には聖十字架発見の聖堂というのがある。ここは聖ヘレナが四世紀に三本の十字架を発見した場所で、そのなかの一本にふれると病気治癒の奇跡が生じるところから、これこそイエスの十字架だと考えられた。現在この十字架はローマのサン・ピエトロ大寺院に保存されているという。この十字架発見の聖堂も見学したかったが、到底その時間はない。複雑きわまりない聖墳墓教会の隅々まで見てまわるには数日を要するだろう。

感動の聖跡、イエスが歩いた石段

十八日、今日はエルサレム最後の日だ。八時にバスで出発して鶏鳴教会へ行く。この教会はシオン山腹の大祭司カヤパの官邸跡に五世紀に建造されたのが最初で、その後幾多の変遷を経て、一九三一年に建てられた壮麗な建築である。

鶏鳴というのは、イエスがゲッセマネで逮捕されてこのカヤパの官邸に連行されたとき、ついて行ったペテロが、「おまえもあの男（イエス）の一味だろう」と言われて「知らぬ」と逃げたが、そのあとニワトリが鳴いたので、「ニワトリが鳴く前に、おまえは三度私を知らないと言うだろう」というイエスの予言を思い出して外に出て激しく泣いた（マタイ26・69）という場所なので、鶏鳴教会と呼ばれるのである。

この教会の地下にはカヤパの頃の岩窟牢がある。六帖ばかりの狭い部屋で、ここにイエスも入れられたという。天井に幅五十センチほどの穴があいており、ここから縄で吊り降ろされたらしい。また穴の外には囚人をつないだ岩窟留置場があり、これも見た。大の字に開かせた両足を縛るための穴が岩にあけてある。イエスもここでやられたにちがいない。

だがもっと重要なのは、教会の外側にある長い古びた石段である。これこそイエス時代の石段そのままで、イエスはシオン山の二階部屋で弟子たちと最後の晩餐をすませたあと、この石段を降りてゲッセマネの庭園へ祈りに行き、そこで捕らえられて両手を縛られたまま、ふたたびこの石段を登り、カヤパの官邸に連行されたのである。

イエスが確実にふれたと確認されるオリジナルの遺跡はエルサレムでこの石段だけなのだ。昨年はこれを近くから見ただけなので、今年はここで自由行動にしてもらった。

かなり崩れた古い石段を登り降りすると、イエスの肉体の鼓動が響いてくるような気がして万感胸にせまってくる。イエスの体が空間に描いた軌跡と私のそれ

▼イエスが歩いた石段

とはどこかで交錯しているにちがいない。

しばし石段に座り込んで黙想し、そのあと写真を撮りまくる。

結局ここに四十分間もいたのだが、時間切れになるまで石段にねばりついていたのは、私と佐藤忠義君（東京）、今西行雄・正子姉弟（神戸）の四人だったと思う。

歎きの壁の前の異様な光景

ここから一同はヤッファ門を通って旧城壁内に入る。そして有名な歎きの壁をバックに全員記念撮影をしようと思ったが、今日は土曜日でユダヤ人のシャバット（安息日）のため、撮影は一切禁止だった。やむなく榊原師の指示で近くの石段へ登って、そこから遠望するかたちで撮影する。

歎きの壁のそばへ行くと、黒服に黒い山高帽をかぶり、モミアゲをおそろしく長く伸ばした異様なスタイルのユダヤ人たちが、しきりに聖書を読んでは壁に顔を押しつけてキスをしたり、おじぎを繰り返したりしている。奇妙な光景だ。

西暦七〇年にローマ軍に蹂躙されてエルサレムを徹底的に破壊されたユダヤ人は、以来亡国の民となって世界に散らばった。そしてヘロデ王の壮大な神殿をしのんで、唯一のオリジナルの遺跡であるこの壁によりかかって泣いたり祈ったりする習慣が生じた。これが歎きの壁の由来である。

黒装束の男たちは宗教人と呼ばれる特殊な階層の人々で、見ると、女とみまがう美少年もいたりするので、よけいに気味が悪い。一般のユダヤ人はこうまで狂信的ではないようだ。

現代も安息日を守るユダヤ人

紙数の都合上、先を急ぐことにしよう。そのあと一行は岩のドームへ行き、内部の巨大な岩を見学した。これはアブラハムが息子のイサクを神に捧げようとした岩で、マホメッドはこの岩から昇天したと伝えられている。またイエスが庭を歩いたヘロデ王の大神殿もここに建てられていた。つまりユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の聖地なのだ。

金メッキの巨大なドームはエルサレム旧市内を圧して燦然と輝いている。ただし私は昨年内部を見たので、今回は中へ入らず、外にいて皆さん方の荷物やカメラの山の番人をやった。あらゆる持物の携行は許されず、クツまで脱いで入場する。ドイツ人の青年二人が荷物を見ていてくれというので引き受けたら、あとで大いに喜んでいた。「他人にしてもらいたいことをまず他人にせよ」というイエスの黄金律をチョッピリ実践したような気がして愉快だった。自分の想念を楽しくするには、他人に親切なことをするに限るのだ。

次に聖母マリアの母アンナの名をとった聖アンナ教会に入り、このすぐそばにあるベテスダの池の遺跡を見学して午前の部は終わった。この池のそばでイエスが三十八年間も病気で苦しんでいた男を奇跡的に癒やしたら、その日が安息日だったために律法に反するとしてイエスは非難され、死罪にされる一因となったのである。

マスワデというレストランでおいしいアラブ料理の昼食をとった後、二時五分にバスでベタニヤのラザロの墓へ向かって出発。墓の中へ一同で入り、付近のアラブ人の家の中を見学してから、シロアムの池に行くも安息日のため閉鎖されて下へ降りられぬので、上からながめながら榊原師の説明を聞く。

非現実的な宗教画

エルサレムのもう一つのハイライトであるシオン山の最後の晩餐の部屋へ行ったのは四時頃である。ここは俗に二階座敷と呼ばれる部屋で、イエスが弟子たちとともに最後の夕食をとった場所とされているが、実は当時のオリジナルの建物ではない。石造の建築物自体は一三三五年にフランシスコ派によって建てられたものである。

この場所で、イエスと弟子たちが最後の晩餐をやったのを記念して、この地に初期のキリスト教徒が小さな教会を建てていた。その後多くの変化を経て、十四世紀に現在のゴシック建築が出現したが、その際、イエスの頃の二階部屋を模して現在のような部屋が造られたのである。

十六メートル×十メートルもあるガランとした広い部屋には二本の太いコリント式円柱がある。このような二階の広間でイエスと弟子たちは石の床に座り込んだり横になったりしながら食事をした。レオナルド・ダ・ヴィンチその他の画家が描いた最後の晩餐の絵は、横に長いテーブルがあり、中央にイエスが座り、左右に弟子たちが並んでいる光景ばかりだが、これは空想の産物にすぎない。二千年前のユダヤ人には床の上に座り込んで食べる習慣があったのだ。

この部屋で全員の記念写真を撮影していると、アメリカ人の団体がやってきた。一緒に写りませんかと誘うと、ワッと歓声をあげて飛び込んできた。普通アメリカ人は日本人を見て見ぬふりをするものだが、クリスチャンと思われる彼らは、私たちをもクリスチャンとみて、こんな友好的態度を示したのだろう。代表のジム・ロウチ氏があとで写真を送ってくれというので、必ず送ると約束した。

天使ガブリエルは二人に現れた

次にエルサレムの西方の静かな町アイン・カレムにある洗礼の聖ヨハネ教会に行き、ヨハネ誕生跡を見てから、谷をへだてた山腹にある聖母訪問教会を訪れる。ここは聖母マリアが天使ガブリエルから受胎告知を受け、驚いて親類のエリザベートという婦人の別宅を訪ねた場所である。

エリザベートの夫ザカリヤもやはり天使ガブリエルの告知により妻の懐妊が実現した。この子がイエスより先に生まれた洗礼のヨハネで、その本宅は現在の聖ヨハネ教会の位置にあった。ザカリヤは富裕な司祭で、家を二軒持っていたという。いずれも静かな場所にある壮麗な教

会だ。訪問教会の前庭の花々が美しい。

この夜はエルサレム滞在最後の夜なので、聖なる都に敬意を表し、全員盛装して夕食会を開催し、そのあとハン劇場へ行った。昨年も訪れたナイトクラブだ。まず各国の観客がステージで手をつないで踊るのだが、これは国際親善に役立ってよい。イスラエルの民族舞踊は活発な動きを示すけれども、マイナー（短調）の曲の多い民謡は哀愁を帯びている。踊りや歌はロシアのものに似ているようだ。呼び物のタレント歌手は交替していた。昨年の出演者がよかったように思う。相変わらず各国から団体で詰めかけており、国際色豊かで、友好促進に絶好の場所である。

イエスは大男であった

翌十九日は全員荷物をまとめてバスで広漠たるパレスティナの大地を南下。まずクムラン洞窟とクムラン教団の住居遺跡を見学。そのあとマッツァダの遺跡へケーブルカーで登り、ひどい暑さのなかを山上ですごし、下山して昼食後、エンゲディ海水浴場へ行き、塩分が濃くて人間はけっして沈まない死海で一同海水浴を楽しみ、続いて一万年昔の最古の都市跡エリコを見て、昨年も立ち寄ったアラブ人の店でしばし休憩。店内は改装。

さらにバスで北上して緑豊かなガリラヤ湖畔を疾走、六時二十分に湖畔のホテル着。この頃、今西君が灘の酒『菊正宗』を三升持参していると聞いて、夜、佐藤君の部屋で全員パーティーを開催した。

二十日も快晴下をティベリアの船着場から遊覧船でガリラヤ湖上へ出る。南アフリカ連邦共和国の白人巡礼団が乗り合わせる。彼らは絶えず賛美歌をうたうので騒がしい。湖の美しい風景をまるで見ていないのだ。一見、善男善女の集まりだが、実はこの国は白人と黒人の徹底した差別政策を実施している国である。イエスが見たら怒るだろう。

湖畔のカペナウムに上陸、古代のシナゴーグ跡を見学中、私はイタリア・トリノの聖骸布をNASA（米航空宇宙局）の科学者団が徹底的に調査した結果を一同に話した。要するにイエスは教会の十字架にぶらさがっている痩せた弱々しい像のような人物ではなく、一メートル八十センチもあるでっぷり肥えた大男で、体力のある力強い人であったことが科学的に判明したという話である。これには榊原先生も全面的に同調された。先生も童話的な弱いイエスを否定している方である。聖骸布の研究結果の詳細は、いずれ稿をあらためて掲載したい。

イエス出生の秘密

湖畔の聖ペテロ教会へ行き、裏の波打際で少憩。ここにも各国の白人巡礼団が来て野外のあちこちで賛美歌をうたっている。いささか騒々しい。なぜ静かにして海でも見つめないのだろう。

イエスが五千人をわずかなパンと魚で養ったという場所の増加教会へ寄ってから山上の垂訓教会を訪れた。昨年も来た八角形の美しい建物だ。風の強い裏側の回廊で、しばし師の説明を聞き、私も師から乞われるままに、またもイエスの人物像について一席話したら師も喜んで共鳴された。私のような異端者の意見に耳を傾けられる師は実に謙虚な方である。

十時十分にバスで出発。湖畔の道路を疾走。快適なドライヴである。マグダラのマリアの出身地を通る。路傍に彼女の丸い白い墓が見える。

十二時三十分にティベリアの大きなホテル『ファイアット・ビーチ』で昼食。ガリラヤ湖でとれる〝聖ペテロの魚〟を食べて出発。二時十分にイエスが水をワインに変えたというカナの町を通過、二時二十分にナザレ着。ただちに壮大な聖告知教会へ行く。マリアが天使ガブリエルの受胎告知を聞いた場所は主祭壇の奥である。別棟のヨセフとマリアが住んでいた場所を上の穴からのぞく。ここも洞窟だ。

イエス出生の秘密に関しては、かつてアダムスキーの高弟であったある人から〝真相〟なるものを聞いたことがある。詳細は省略するが、処女のマリアから生まれたのではないという。

夕方テルアビブを通過して六時四十分にヤッフォの町へ行く。夕日が美しい。ここでペテロが滞在していた皮なめしのシモンの家の跡へ行ってみる。いまは小さなモスク風の建物になっている。ペテロがこの家の屋上で祈っていたときに不思議な体験をしたことが使徒行伝の第十章に出ている。ここで榊原師より最後の説明を聞いてイスラエルの新約と旧約関係の遺跡見学はすべて予定どおり終了し、夕方七時四十分にテルアビブのサイナイホテルへ投宿してイスラエル最後の夜をすごしたのである。

アイガー北壁のそばに強烈に輝くUFOが出現！

二十一日は早朝五時にホテルを出発してテルアビブ空港よりスイスのチューリッヒへ飛び、ここからバスでまずルツェルンへ到着。昼食休憩の後、湖畔の町をしばし散策。東洋人の造る町と、どうしてこうまで差があるのかと溜息が出るほど美しいのは、建物のスタイルがまるで違うからだ。二時四十分に出発。

夕方五時十五分に標高千メートルの山間の町グリンデルヴァルトへ着いてホテル『ヴァイセス・クロイツ』に入る。眼前には名高いアイガー北壁の雄姿がそびえる。明日は登山電車でユングフラウへ登るのだ。

ホテル内の食堂で夕食をとった後、私はエルサレムで感じたことについて、どうしても全員に話さねばならないという衝動にかられ、皆さんに呼びかけるようにと今西君に伝えた。同君は室内電話でかたっぱしから誘っていたが、結局集まったのは半数の十三名だった。

ここで残りの菊正宗や田中さん持参のウィスキー、ビールなどをみんなで少しずつ飲みながら、私は大要次のように話した。

「エルサレムへ二度目の訪問をして、今

度ほどアダムスキー哲学の偉大さを感じたことはない。エルサレムには多くの教会があり、多くの信者が祈っている。その姿は敬虔で美しいけれども、彼らはイエスの教えから遠ざかり、神と人間とを分離して、遠い彼方の神に救いを求めている。しかし救いは人間の内部に秘められている。想念の力を応用すればよいのだ。その点、アダムスキーの『生命の科学』（アダムスキー全集第6巻）ほど重要な書物はない。これを研究実践すれば素晴らしい人生が展開するから、勉強を続けられたい。

また人間は旅をすることが重要である。私が島根県の郷里にいた頃、国際感覚はあると思っていたが、後に東京へ出てから、いかに田舎者であったかを知って大いに恥じた。ところが後に海外へ出かけるようになって、やはりまだ田舎者だったことを痛感した。東京に住むだけでは視野が広がらないのだ。その海外旅行も回を重ねるにしたがって目が開けてくる。こうして、地球人は、いつか高度な文明の惑星を訪れるならば、それこそ宇宙的に開眼するだろう。だから人間は旅を続けることが重要なのである。スペース・ピープルも宇宙の旅をやっているのだ」

ざっとこんな話をしていたとき、私の左手のベッドに腰かけていた石田義雄君（川崎市）が、「窓の外に光る物が見える！」と言いだした。

「何か出現したのかな？」と私が聞くと、同君のそばにいた数名が「UFOだ！」と騒ぎだしたので、きそってベランダへ飛び出たところ、アイガー北壁の右手と思われる暗黒の空間に、ものすごく強烈に輝く光体が左右に水平に大きくゆっくり移動しているではないか！　大騒ぎしながら見るうち、まもなく左方へ青白い弱い光に変化しながらスーッと消えていった。

「ひゃーっ、ついに出たーっ！」

「すごーいUFOだ！」

「目が覚めたぞーっ！」

感動に酔いしれて一同はいつまでも興奮している。私も遠方でこんなに強く輝くUFOを見たのは初めてだ。十三名全員が見たと思っていたが、あとで聞くと高橋和美さんだけはベランダに出るのが遅れたために見えなかったという。したがって目撃者は十二名である。

そのうち隣室の宿泊客が壁をトントンと叩いた。静かにしてくれという合図らしい。これをしおに一同は引き揚げた。

このUFO出現が偶然だったとは考えられない。何かの重要な意味があったものと思う。

翌日ユングフラウヨッホまで登って、主峰の雄大な景観を満喫した後、山を下って、二十四日午後、全員無事に成田空港へ帰着した。

全く素晴らしい旅だった。お世話になった旅行社の田中氏、榊原先生、参加者の皆さんに厚くお礼を申し上げる次第である。**文中の写真は筆者撮影。**

◀UFOが出現した位置。矢印の方向に左右に移動して左方向へ消えた。左上方は北壁のふもと。（萩原昭彦君撮影）

付記

■キリスト教なるものに一般日本人は関心が薄いかもしれないが、これはヨーロッパ文明の発達に重要な役割を果たしており、また教会建築や教会美術はヨーロッパ美術の源泉をなしているので、これらを無視してヨーロッパの理解はあり得ない。しかも由緒ある古い教会には歴史が凝縮されているので、これを知ることはヨーロッパ史の学習で不可欠である。特にエルサレムは史跡に満ちた重要な都市であるから、その意味で今夏の旅行の意義は大であったと思う。

■旧新約関係の遺跡の多くは修復や変形が多く、オリジナルなものが少ないので、本物でないからつまらないと思う向きがあるかもしれないが、修復の奥に潜むかつての本物の強烈なイメージを描いてこそ遺跡見学の醍醐味がある。また昔の重要人物の肉体が空間に描いた行動の軌跡と自分のそれとの交錯を感じるようなフィーリングを起こすことが大切で、これが感動の源泉となってくる。

以上のことをガリラヤ湖畔の山上の垂訓教会で皆さんに力説したが、理解されたかどうか――。

■エルサレムの町を歩くと過去の残虐な歴史の重みで気分が悪くなるという人もあるらしい。これも感受性の一面を示すものだろうが、私自身はイエスのことしか考えていなかったので、この超偉人の高貴な波動により大感動の連続であった。残酷な時代に一大光明が放射されたのであるから、その光明のみを見るようにすればよいと思う。いずれ第三次のイスラエル行きをエジプトと組み合わせて実施する企画があるので、関心のある方は多数参加されたい。遺跡視察旅行としては最高のものになると確信する。

■今回の旅行では写真撮影に全力を傾注しようと考え、6×9判カメラと35㎜判カメラを携行したが、団体旅行では時間と行動に制約があるので、思うようにはゆかなかった。いずれ単独でエルサレムへ行き、書物にするために本格的な遺跡撮影を敢行したいと念願している。

イスラエル＝スイスの旅の思い出

（原稿到着順）

（1）

高貴な波動に感動

宇都宮市　菊地啓子

エルサレムは感激の連続でした。石ひとつからも二千年前の声が蘇る様でした。オリーブ山からのエルサレムの姿は現代のものでしたが、心の奥のスクリーンには、偉大な人物が、繁栄の中で宇宙の真理を失ってしまった人々を導こうとして城門を出入りし、また、悲痛な夜にゲッセマネの園に歩む姿も見えました。鶏鳴教会の地下牢では、我欲の人々に迫害されながらもすべての人々を愛し、地上に天国が成就することを願い続ける力強い信念の波動を感じ、時を越え、ふたたび私を泣かせました。誰もいない教会の中で思いきり泣きました。悲しいのではなく、うれしかったのです。

クムランも死海の不思議さもなつかしいものでした。マサダは熱かった。

ガリラヤ湖は故郷の様でした。心が平安で満ちてゆくのです。強い風が師の声をはこんできます。色あざやかな花々が生々と輝いていました。

まるで別世界です。アルプスの清楚な空気は透明で、山々と花たち、草原と森林の中に人間の生活が異和感なく存在しているのです。ここには美しい世界が存在しているではありませんか。

グリンデルヴァルトの夜、一室に集まった十三人の前にオレンジの光が出現しました。二度消えては三度現れました。私は「こんにちは」と呼びかけるのが精一杯でした。光体はぐんぐんと輝きを増し、シリウスの数倍もの光体となったのです。数秒でしょうか。光は静かに消えて、あとは取り乱し、涙をぬぐうばかりでした。私にとっての導きの星でした。鶏鳴教会で、ガリラヤ湖で感じた私自身の過去の姿を確証して下さった様でしたので。

真理への道を感じることができました。久保田先生、旅行中お世話になった方々、過去と現代、未来の人々みなさまに感謝。

強烈に輝くＵＦＯが出現！

東京　小島岩男

エルサレム旅行に参加した。自分を平和とか喜びのために生かしたいという思いを強くする。そのために生まれてきたのかもしれないということをガリラヤ湖を眺めながら風に吹かれながら、山上の教会で感じた。自分の固い心がくずされてしまってしょうがなかった。

ガイドのサカキバラ先生の少年のような表情がわすれられない。あの人はキリストを知り、とても自由な魂を得たと言っていた。その自由な魂を人々にもたらすためにイエスがやって来たのではないかという言葉に、深く深くうなずいてしまった。

スイスでは生まれて初めて円盤を見た。スイスに着いた夜、十二、三名の人と部屋に集まり、久保田先生の話を聞いている時だった。先生が『生命の科学』という本は世界に二つとないほど深遠な本であるという事を力説している時だった。石田さんが最初に発見した。円盤は左から右、右から左というふうに動いたのだが、静止している時、光をものすごく強くするのだ。まるで先生の話をそうなんだ、そうなんだとでも言わんばかりに2、3度強い光を見せて消えていった。みごとだった。円盤に感謝の想念を送った。

これからもいろんな試練に会うだろうけど、それもつかの間の嵐と考え、世に勝ちたいと思う。自分はいつか勝利を得るだろう、きっとやるだろうというようなものがどこかにある。自分にできるかぎりの事をやっていきたいと思う。

また旅行に参加したいと思う。やはり日本だけにずっといるのは自分を小さくすると思う。最後に、参加されたみなさん、どうもありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

楽しかったエルサレム・スイスの旅

岐阜県　大橋利昌

このたびは、エルサレム・スイス宇宙考古学の旅に参加させていただき、ほんとうに感謝しています。久保田先生、田中さん、参加されたＧＡＰ会員のみなさん、ほんとうにどうもありがとうございました。とても楽しかったです。

この旅行で痛感したのは、エルサレムでレストランの水を少し飲んだだけなのに下痢になって、みんなと遺跡を回るのにトイレを探すしまつで、なんと言っても絶対健康、体が大切ですね。イエスのような一七九cm、七九kgといったりっぱな体格になりたいですね。なれるかな？

ガリラヤ湖付近で、久保田先生が見せて下さったＮＡＳＡが分析してイラストにしたイエスの顔とアダムスキーが2000年前のイエスを透視して描いた絵と、とても似ていたのには驚きで、地球の科学技術の進歩と、なによりアダムスキーの透視能力にはびっくりです。

ところで、会員の石田さんがスイスへ行く飛行機の中で黒いＵＦＯを目撃されているし、なんとスイスのホテルで、久保田先生はじめ田中さんと会員十数名で、イエスよりももっと上には上がこの大宇宙にはいるんだという宇宙的高揚のフィーリングにつつまれている話の時に、アイガー山のふもとからオレンジ色の大きな光体が出現して、みんなベランダへ寄りそって目撃しました!!　ここで特に感じたのは、内部のフィーリングに従うことの大切さです。僕たちはその前に外で夜空を見ながら散歩してたのに、なぜかその部屋へ引かれて行った感じでした。まだいろいろと書きたいですが、それではみなさん、お体に気をつけてＧＡＰ活動でがんばりましょう。

かけがいのない十日間

広島市　佐々木智子

今回「エルサレム宇宙考古学の旅」に参加させていただき、素晴らしい日々を過ごすことができました。

まずエルサレムでは、イエスに関係した多くの遺跡を見てまわりましたが、なかでも主の祈りの教会と鶏鳴教会には、強くひかれるものを感じました。

また、ガリラヤ湖畔は最も去り難い所でした。山上の垂訓の教会は大変強い風の吹く場所にあり、ここでイエスは多くの人々に宇宙の法則を伝えたのです。立ってこの強い風を受けていると、何か二千年前のかなたから励まされているようで、これから自分はどのように生きるべきかということについての答が、内部からわいてくるのを感じました。

イスラエルの次に訪問したスイスでの一夜は、決して忘れることのできないものとなりました。その夜、久保田先生を中心に今西さんたちの部屋へ十三名が集まり、先生の興味深いお話を伺っていました。その時（おそらく午後十一時三十五分前後頃）、石田さんがUFOを発見されました。部屋にいた人たちは、すぐベランダへ飛び出しました。私は少し出るのが遅れたので、そのUFOが二度目に光ったところしか見ていませんが、その光はオレンジ色でサーチライトのような強い輝きでした。この夜の体験で日本GAPはスペース・ピープルに確実に見守られているという確信を、より強めました。

◀ユングフラウの主峰をバックに

この旅で四官のコントロールの大切さと英会話の必要性を痛切に感じました。私にとってかけがえのない十日間でした。久保田先生、田中さん、ガイドの榊原先生、旅行に参加された皆様、ほんとうにありがとうございました。

貴重な体験旅行

東京　佐藤忠義

八月十六日、ベングリオン空港に到着する。市内までの間、まるで二千年前の時代に下り立ったかのような景観に驚き感動する。今にもそこここにイエス時代の人々が現れてきそうだ。そしてまた今まで旅してきた国とはまったく異なったフィーリングに意識は高揚した。ついに来るべき地に来た。この感動からイスラエルの旅は始まった。

ガリラヤ湖上の船にいて、あの山上の垂訓教会が見えてきた時から言い知れぬ感動が込み上げてきた。カペナウムに着き、船から降り、歩き出したら、急に内部が震えてきてそれが増々強くなり、もう心が溶けてしまいそうで涙が出てきて止まらない。一人建物の陰で泣いていた。この地で感じるこの波動とこの感動は私を捕えて離さない。それは二千年前のイエスの波動、限りない愛の波動なのだろうか。

多くの貴重な体験をさせてくれたイスラエルに別れを告げ、スイスへと旅は続く。そしてここでも旅は新たな体験をもたらした。グリンデルヴァルトに着いた夜、先生の強い御要望により、先生始め十二名の会員の方がホテルの一室に集まり語り合っていた。そして先生から宇宙哲学の重要性についてお話があり、一同熱心に聞いていた時に、UFOが出現した。すぐに全員ベランダに出てはっきりと目撃する。それはアイガーの麓近くを、輝きを増したり弱めたりしながら左右に二度三度と移動して消えていった。それは意図して輝かしているようであり、まさに先生のお話に対してスペースピープルが答えてくれているかのようだった。

最後にこの貴重な体験が出来た旅行を企画して下さった久保田先生始め、田中さん、榊原先生、同行された皆様に感謝します。ありがとうございました。

強烈に輝く円盤に驚く

長野県　萩原昭彦

スイスでのこと。八月二十一日午後十一時半、グリンデルヴァルトのホテルから、とうとう初めて円盤を見る事が出来ました。部屋に十三人が集まっていました。右隣の石田さんが、窓枠の外に見えてきた円盤を発見し、止まって輝き出した所で、その右隣の渡辺さんが大声で知らせた。皆一斉に立ち上がり歓声を上げ、次の瞬間にはベランダの方へ走り寄った。物体は少し移動しながら二度程暗くなり見えなくなった。輝く時は凄まじく、金星よりも明るくピカッと輝いた。私の目には明る過ぎて、単に白色にしか見えなかった。強烈な光が暗闇の一部を照らし出しているのが見えた。遠い空に出現したと思っていたが、翌朝目撃者を集めて、その点を辿ると、アイガーの山裾が三重にもなっている所で、山のすぐ上の比較的近い所にいた事がわかった。山小屋の燈の右下に出たのを覚えていた。

久保田先生のお話が最高潮になった時、ほかならぬ石田さんが発見したのだから、状況証拠も揃っている。自動車道路もない所だった。私はこの出現まで、その日の朝の四時起きと甘美なスイスワインの故に眠たくてウトウトしていた。ゲッセマネでのイエスの言葉「ここを離れないで目を覚ましていなさい」が思い起こされ、残念に思います。

今年中に四回の海外旅行をしたが、今度のGAPの旅行は別れ難い雰囲気があり、いつまでも旅を続けられたらいいのにと思いました。帰ってから二週間ぐらいは毎日の様に旅行の夢を見ています。スイスの夢が多かった様に思います。この様な素晴らしいGAPの旅行に参加できた様々の因縁をとても有難く思います。これからはハッピーに暮らして行けそうです。

（以下次号）

大阪支部大会

●七月八日（日）
●大阪コロナホテル（大阪）
●出席者　三十五名

初夏のさわやかな日、新大阪駅近くのホテルで五十九年度の大阪支部大会が開催された。午前十時より受付を開始。東は栃木県、西は岡山、高知県から熱心な方々が来場される。午前の部は支部会員の体験講演として南野孝夫氏と私が発表。

午後の部で大会のメインである久保田先生のご講演、「アダムスキー哲学の生かし方」と題するお話が始まる。内容は大別して二つあり、一つは宇宙的能力すなわちテレパシーを引き出すカギとして「万物一体感を極端に高揚させること」で、これを観念的でなく全身でフィーリングを起こすこと。もう一つは「エゴを完全に消すのではなく抑制すればよい」というお話である。会場は大母船の船内のごとき高貴なフィーリングに満ちていた。

その後昨年度の第一次「エルサレム宇宙考古学の旅」の記録映画を上映し、質疑応答が続いて五時に終了。大成功であった。夜は別室で大夕食会を開催。翌日は神戸市内を観光。先生と皆様に厚く御礼を申し上げます。

仲間秀樹

第4回新潟支部大会

●七月二十八日（土）
●栃尾又温泉自在館（湯之谷村）
●出席者　二十一名

五十五年の第三回大会から四年間のギャップを克服して開催された第四回大会。今回の大会も支部会員の一致した協力により、充実した内容で大成功のうちに終了した。久保田先生の講演はすさまじい迫力に満ちた、この地球世界の暗闇を照らす燦然たる光芒を放つものであり、同時にその講演テーマ「宇宙哲学実践法」が示すとおり、私たちGAP会員が今後どのような方向へ活動をすすめてゆけばよいかを具体的に示すものである。その内容は①知らせるということがたいへん重要。②それと同時に私たちGAP会員が万物一体のフィーリングを身につけることの重要性を強調。③GAP活動を世界の平和運動の中心にする構想をもっていること等が中心となる内容である。続く夕食会では余興として歌や踊りがとびだし爆笑のうちに終了。その後別室にて久保田先生を囲んで質疑応答の続きが深夜まで行われ有意義な第一日目を終了した。

翌二十九日の奥只見観光は真っ青な青空が広がる快晴下、楽しい散策に一日をすごした。皆様に感謝します。星富治夫

札幌・旭川合同支部大会

●九月九日（日）
●教育文化会館（札幌市）
●出席者　二十一名

予定を少々遅れてスタートしたが支部代表挨拶に続いていよいよ久保田先生による御講演である。内容は主にスペース・ピープルよりのメッセージであり、第一に万物との一体感を極端に高めること、第二に内部の意識のささやきに耳を傾けること、第三に感情の抑制力を長続きさせる方法を検討中ということ。他にも体内にたまる静電気を逃がすには化繊の服ではなくウールや綿のような自然の素材を使用した衣服を着ること。そして来たるべき大きな外交問題（戦争）など。またその際ある種の方法で核兵器を無力にするだろうということなど、われわれがある程度予備知識を持った日本GAP会員だから平然（？）と聞いていられるものの、これが何も知らない一般大衆が聞いたら卒倒してしまうのではないかと思われる程強烈な内容だった。講演の後は質疑応答を行い午後五時半大会は無事終了した。夜は厚生年金会館にて夕食会を開催。

翌日は雨の予報が奇跡的に快晴となり、九名で手稲山に登って愉快な一日をすごした。皆様に感謝。

高野省志

昭和59年度 日本GAP総会

大盛況裡に終了、翌日UFOが出現！

●九月二十三日（日）
●科学技術館（皇居・北の丸公園）
●出席者　百八十五名

一九八四年九月二十三日秋分の日、それは暦の上でも又我々GAP会員にとっても、長い間土中で生活してきた蟬が殻を破って大空に羽ばたくような新しい世界に向けての大きな転換の日であった。

午後一時、司会の篠氏が「今日は過去のGAPから未来のGAPへの接点となる日である」と宣言し、総会が始まった。最初は静岡支部代表野口敏治氏による講演で「アダムスキー哲学の実践とスペース・プログラム」である。野口氏は、宇宙の意識の声に耳を傾け、内部の印象に従って生活することがどんなに大切なことなのかを、氏自身の生活を通しての実践をまじえて話し、想念の重要性を強調し、自分自身を統御して知らせる運動に展開する方法をわかりやすく話された。「宇宙の真理を探究してみませんか？」と万人に語りかけること、これは一見簡単そうでなかなかできないことである。

ひき続き講演は久保田先生による「エルサレムで学んだことと、スペース・ピープルからのメッセージ」へと移り、会場内の雰囲気も高揚感が次第に高まってゆく。先生は、今夏のエルサレム旅行で、キリスト教信者が救いを求めて祈ることがいかにまちがっているかを痛切に感じたことと、原子のスパークの例をひき出し、アダムスキーの「生命の科学」がいかに重要かを力説する。神は天空のかなたの遠いところにいるのではなく、人間の体の中にあり、すでに我々は救われているのである。それを得るには想念の力を使えばよいのであって、何も天空のかなたにむかって祈る必要はないという。イエスが二〇〇〇年前に伝えたことが宗教にされ、妙な支配の手段にされてしまった矛盾を想い、イエスの嘆きこそ思えというところか。

また、久保田先生は、今日のメインイベントというべき大発表をした。まさに本邦初公開、血湧き肉おどるといおうか、腹の底から勇気が湧いてくるのを感じる。スペース・ピープルからのメッセージが久保田先生を通じて我々に与えられたのである。それは六カ条あって、要約すると、

一、この太陽系の全部の惑星に人類が住んでいて、地球へ助けに来ていることをできるだけ多くの人に知らせてほしい。堂々と話してほしい。

二、人間一人が存在していること自体が宇宙の意識に貢献しているのであるから誰をも祝福すべきである。

三、知覚できるあらゆる現象界の万物は何も分離できない。万物一体のフィーリングを高めることが最重要。

四、自分のパワーを宇宙全体をつつみこむようにして、そのフィーリングを高めること。

五、疑問が起こった時は自分の内部の宇宙の意識の印象に聞くこと。

六、真剣に考え、行動する人には援助を惜しまない。日本GAPは頑張って下さい。

以上のメッセージを聞いて、やっぱりそうか、GAPは、久保田先生は正しかったんだ。よし、これからも又、新しい視点のもとにバリバリやるぞ、という自信と新しい勇気が湧いてくるのを感じた。

会場の中もこのごろになると熱気がムンムンし、次のNHK制作の映画はとても色あせて見えたにちがいない。

このあと、会場を移して行われた夕食会もこの高揚した気分が続き、まさに過去の古い殻を脱ぎ捨てて、新しい皮袋に新しい酒を注ぐがごとき新鮮な未来への夢を抱かせる素晴らしい総会であった。

（斉藤泰文）

東京ディズニーランドでUFOが二度出現！

総会の翌日四十五名で東京ディズニーランドへ行った。正面入口の所で白銀色に輝く物体が左方向へ水平に飛ぶのを全員が目撃。気球のように見えたが飛行機が接近したら急に上昇して水平飛行を続けた。そのあとワールドバザールの手前でフライパンを少し厚くした形の典形的な白色の円盤が急降下するのを伊藤達夫氏（松山支部）他二名が目撃。外壁の上まで来て急に右にターンした。他の人達は広場で記念撮影中だった。詳報は次号。

◀上から篠司会者、野口静岡支部代表、久保田会長、東京本部役員。

仙台でUFOが出現！

神奈川県　石田義雄

先日は仙台・山形合同支部大会に参加させて頂きましたが、久保田先生はじめ支部の皆様には大変お世話になりまして、有難うございました。一年前まで仙台に住んだ事がありまして、一番町の通りを歩いていて懐かしく思いました。また笠原・清水両支部代表をはじめ、支部の皆様には大変な援助をいただいた事を思いだし、感謝とともに懐かしさを覚え、大変感慨深いものがありました。

ところで大会当日は母船らしき物体を見る事ができました。仙台市民会館における合同支部大会終了後、会場より宿泊したニューシティーホテルへ歩いていく途中上空に円盤でもいるのではないかという感じがおこり、空を見ると右手のビルの陰より現れました。

色は白色で、見かけ上の大きさは手を伸ばした距離で約三センチの細長い形をした物体でした。ゆっくりと東から西へと道路にそった方角に飛び、ビルの陰に隠れるまで約十秒前後見る事ができました。直線的にゆっくりと飛行したため、一瞬飛行機ではないかと思いましたが、翼もなく無音で飛行したので母船ではないかと思いました。

その物体は確信というような感じを放っているようでした。支部大会の激励に出現したのではないかと考えています。

素晴らしい活動をされ援助して下さるスペース・ブラザーズ、久保田先生および会員の皆様、今まで色々と教えていただきました事に改めて心から感謝申し上げます。

アダムスキー全集に驚く

埼玉県　永迫秀登

アダムスキー全集を深い共感を持って読ませていただいた者です。現在三十二歳で、塾の教師をしております。

去年の秋、書店で何か引きつけられるようにして、アダムスキー全集の第1巻と出合いました。早速購入して家で読みました。深い驚きでした。それまでUFOや宇宙的な事にそれほど関心のなかった私にとりましては、何もかもが目新しい内容に満ち満ちておりました。しかし第4巻以降は手に入らなかったため、そのままになっていました。

しかし今年の六月、デパートの書店で第4巻以降第7巻まで並んでいるのを見て、思わず四冊とも購入して一気に読了しました。そこでアダムスキーの宇宙哲学に触れて、深く信じられるようになりました。

全集の前半のスペース・ブラザーズとの会見記を読んだ時は、感動しつつも、もう一歩踏み込めなかったのですが、後半の深遠な哲学部分を読んだ時には、もう完全に一体となったような感じさえしたものです。

今ははじめからノートに取りつつ読み返しているところです。一回目で読み過ごしていた所も出てきたりして、二回目は何か深い感慨に捕らえられつつ読んでいるところです。

私は二十代の七、八年間、マルクスやレーニンの社会主義と取り組みました。地球上の貧困が解決し、それが基礎となって、すべての人間は救われるものと信じておりました。しかし、何か違うものが心に残り出しました。何か満たされないものが、人間はこれだけではないぞという気持ちが日ごとに大きくなり、それ以上追求することをやめました。私自身の根源的な直感がどうしても「否」を言ったのです。

その後、その反動であるかのように三、四年の間、十九世紀から二十世紀にかけてのロマン派や反逆の詩人たち、シュールレアリズムの作家たち、そしてニーチェに至るまで取り組んでいました。それらの日々、マルクス主義という希望は失い、それを部分的に批判さえしつつ、私の心はバタイユやニーチェやボードレールなどに強く魅せられていました。それでも心は切り刻まれ、引き裂かれるかのような毎日で、やっと生きているといった状態でした。

そんな時です、アダムスキーと出会ったのは。私はバタイユやニーチェこそが真実で、この人々の思想と一緒に滅び去ってもいいものと覚悟を決めていました。しかしアダムスキーの著書を読んでいくうちに「創造主の英知」という言葉にぶつかり、こちらの方が宇宙の真実であるという強い感じを持ちました。今や確信に変わりつつあります。「創造主の英知」やその想念などが信じられるようになった時、以前は気恥ずかしくてあまり口に出して言えなかった「万物への愛」や「素直さ」などという言葉が別の色どりと輝きを持って帰ってきてくれたような気がします。

長々と個人的な事柄を書いてしまいました。お許し下さい。これから先、アダムスキーの深遠な宇宙哲学や「創造主の英知」についてもっともっと学び、かつ行動できるように頑張るつもりです。

スプーン曲げに成功！

埼玉県　大嶋順子

こんにちは。お元気ですか？　今日（六月三十日）、スプーン曲げをやってみたところうまくいきましたのでぶしつけにお手紙を書いているところです。でもなんだか曲げられた彼らがかわいそうな気がします。今度直してあげることにしましょう。

以前は、スプーンをさすりながら「曲がって下さい」「もう少し曲がって下さい」と話しかけてやっていましたが、少ししか曲がりませんのでちょっと腕力も足してやってみたのです（少しだけですよ）。心の中で「曲がる、曲がる！」と言いながらスプーンを持つとぐにゃーっと曲がっていきました。調子にのって次々曲げ、四本曲げました。割と簡単でした。

今日は土曜日の眠くなりそうな午後で、それも幸いしているのでしょう。土曜日の昼、夜というのは非常にラクな気分なんです。人々も「ああ、明日は休みだ！」とホッとしているのでそんな想念が伝わってくるのだと思います。

最近私は常に自分にレッスンが与えられていると感じます。すべては自分の学習と相手への奉仕のために生きているのだと思うようになりました。私はもっともっといろいろなことに興味を持っていきたいです。

「万物との一体感を起こす」ことについてですが、物を見て「これも自分なんだ」「あれも自分だ」というふうに思うとうまくいくような気がしますが、今あまり実行していません。

それにしても本当にスペースブラザーズの方々やアダムスキー氏や久保田先生がいらっしゃったからこそ私は心だけの狭い苦しい世界から抜けられたのだと思います。感謝します。数年前のGAP総会で私は心が荒れてさんざんな想念を送ってしまいましたが、後になって反省したのと同時に、久保田先生の温かさやテレパシー能力の優れていることを感じました。

再びスプーン曲げのことですが、大体このくらい（下図）曲げました。これは友達の前でやったらおもしろいだろうなあとは思いますが、ひけらかす必要はありませんのでやる気はありません。ベラベラと言いまわるのはちょっと……。

では次号の『Uコン』を楽しみにしています。お元気で。

質問コーナーを

大阪市　由良和豊

私の提案なのですが、一つは、大手の本屋等に行きますと心霊関係の本がほとんどで、本当の真理を示し

た宇宙哲学的な本は皆無です。どこかの評論家のように久保田先生も宇宙哲学の本を二百冊ぐらい書いてみてはいかがでしょうか。先生がお書きになった本が書店に並ぶのを楽しみにしております。

二つめは、もっと会員の質問コーナを設けてほしいということです。雑誌等にGAP会員募集の広告が載っていないようですが、気になっています。

はるかなるイラクより

イラク・バグダッド　川谷定義

毎回『UFOコンタクティー』誌をお送りいただき、大変ありがとうございます。今回はまた、この遠いイラクのバグダッドまでわざわざ送っていただき、ここでこんなに励まされるものは他にありません。

私は昨年十二月十日以来このバグダッドで仕事をしていますが、まだあと約一年はここに滞在しなければなりません。ここで私は、不動産関係の銀行で中型コンピューターの常駐保守をしています、イラクといえば、イランと戦争をしている国である事を知らない人はいません。町へ出れば、どこへ行っても銃を手にした軍人の姿が目に入りますし、いたる所に見られる軍関係の建物には周囲を監視するTVカメラや、空中に向けられた高射砲等が設置されており、絶えず兵隊たちが目を光らせています。最近また戦争が激化しており、イラン国境に近い地方都市のバスラで仕事をしていた数名の同僚たちは砲撃のために今はここバグダッドまで避難して来ています。バグダッドも今までは全く平穏そのものでしたが、この三日のうちに空襲警報が四回ほどありました。幸いに市内はまだ空襲を受けていません。

私の宿泊しているNECゲストハウスというのは、出張者のために会社が借りているアラビア式の一般住宅ですが、そこから歩いて五分でチグリス川に出る事が出来ます。チグリス川といえば、ユーフラテス川と並んで古代メソポタミア文明を生み出す基になった川ですし、また、この国は旧訳聖書の舞台でもあります。今までこの国及びこの地方についてはほとんど興味を持っていませんでしたが、この機会に少しこの辺の歴史について勉強してみようと思っています。

職場での顧客との会話は主に英語ですが、英語の分からない人も多数おり、そのためにこの国の母国語であるアラビア語も出来るだけ覚えるように努めています。帰国出来る頃には、どの位話せるようになるのか楽しみです。

英和対訳のテキストを

静岡県　鈴木芳美

日本GAP静岡支部の鈴木芳美と申します。日本GAPのお世話になり、毎日がとても充実してきており、久保田先生には感謝の念が尽きません。

数年前に先生の書かれた『ひとり言でマスターできる英会話』は素晴らしいテキストです。このテキストを音読する癖がついてから、英語の語感が身についていくようで、英文が生きた言葉として感じられるようになってきました。これも先生の書かれた『ひとり言でマスターできる英会話』のおかげです。本当にどうもありがとうございました。

アダムスキー哲学のことですが、アダムスキー氏の原文と先生の訳を一緒に載せたテキストを書いて頂けたらと思います。これは私の個人的な希望ですが、以前から頭の中にあったこのフィーリングが、ある日突然強くなったものですから、思い切ってペンをとりました。

テレパシー送信にこたえたスペース・ピープル？

愛媛県　伊藤達夫

今年一月の東京月例会では、久保田先生には大変お世話になりました。どうもありがとうございます。

一月七日の早朝、新幹線で上京の途につきました。いつもの習慣で列車の中では『宇宙からの訪問者』や『生命の科学』の一節に目を通し、オーソン氏やアダムスキー氏の写真を眺めては宇宙の意識やスペース・ピープルとの一体性を深めるようにしておりました。

するとふと前日に「上京したら何か宇宙的な体験ができるかもしれない」という印象を感じていたのを思い出したので、意識的な警戒状態を保つように心がけました。そのうちに暗い想念は全く起こらなくなり、宇宙的で建設的な想念がたくさんわき起こるようになったのでノートに記録していたところ、そのうち「東京駅に着いたら上野へ直行しないで八重洲側に降りた方がよい」との印象がやって来ました。そこで東京に着くとそのまま八重洲口正面を駅の外へ出てから横断歩道を向こうへ渡り始めました。その時、何げなく後ろを振り返りたくなって後方上空を見上げると、何か黒い大きな物体が音もなく駅ビルのカゲに隠れるところでした。

月例会の途中でもプラザーズからの想念波動を感じました。出席した何名かの方々も感じておられたようです。

翌日は静岡支部月例会に出席させていただきましたが、帰りの新幹線の岡山駅のホームで列車待ちをしていると、またあるフィーリングがわき起こってくるのを感じました。プラザーズから見られているというか、すぐ近くにいらっしゃるような温かく高揚したフィーリング……。ホームのどこかにおられるのではないかと思ってそれとなく気をつけていましたが、それらしい人は見当たりません。列車に乗ってから三原に着くまでずっとそのフィーリングは続いていました。三原に着いたのは夜の十時過ぎでしたが、わずかな時間の差で四国へ渡る最終の船に乗りそこねてしまったので、やむなくその夜は三原のホテルに一泊することにしました。

三原では、上空に呼びかけたら、なんだか円盤が現れて下さるような気がしてきました。もし、岡山からずっと続いていたあの温かい想念波動が本当にプラザーズから送られたものなら、こちらから呼びかければ来て下さるような気がしたのです。

そこでホテルの自室に落ち着くと早速上空を見ながら想念を送り始めました。部屋の小さい窓から眺めた視界は極めて狭くて限られたスペースでしたが、なぜか嬉しく高揚した気分に包まれていたのを覚えています。呼びかけ始めてから丁度十分後に真上の空を南から北へオレンジ色の光体が横切ってゆきました。鮮やかな大きな光体でした。さらにその十分後、今度はほぼ同じ方向に白銀色の光体が出現して下さいました。

このように旅先での呼びかけに二度も応答して下さったプラザーズの方々の励ましに驚喜した次第です。心からのお礼と感謝の想念を上空に向けて送りました。岡山からずっと感じていたあの温かく高揚したフィーリングは、やはりプラザーズが送って下さっていたのだ、という絶対的な確信を深めることができました。

1982年　東京本部月例会講義録

だれにもわかる

「生命の科学」

1982年版

講演　日本GAP会長　久保田八郎

第1部	（第1～3課）	700円
第2部	（第4～6課）	500円
第3部	（第7～9課）	500円
第4部	（第10～12課・会長特別寄稿文）	500円

〈B6版　活字タイプオフセット印刷〉

送料　1冊 170円　2～3冊 200円　4冊 250円

発行者・申し先／安藤澄雄

〒274 千葉県船橋市松が丘 5－3－15

ルミハウス　A－2

振替／東京2－156115

第7回　日本ＧＡＰ海外研修旅行

イギリス・フランス宇宙考古学の旅

イングランド・スコットランド・パリ・ルールドの遺跡訪問と観光

日本ＧＡＰは昭和54年以降毎年海外研修旅行を実施して多大の成果をあげています。これは旅をすることによって知識体験の増大を図ることが人間の開眼に最重要であるという見地にもとづくもので、また温故知新（古きを訪ねて新しきを知る）の実践にもなります。そして宇宙的な思想を持つにはまずホーム惑星である地球を知ることが大切であるという考えのもとにアメリカ、中南米、ヨーロッパ各国、エジプト、イスラエルなど多数の国を歴訪してきましたが、今回は趣向を変えて、未訪問のイギリスを中心にフランスと合わせて“遺跡と自然と大都市見学の旅”を企画しました。旅行の概要は次のとおりです。

昭和60年８月８日に成田空港を出発、最初にロンドンに入り、市内の名所旧跡を見学後、同夜宿泊。翌日は郊外のウィンザー城と古代の謎の巨石遺構であるストーンヘンジその他を視察。ロンドンに帰って翌日は列車でスコットランドへ７時間の旅をし、素晴らしい田園風景をながめながらエディンバラへ到着、同市に宿泊。翌日専用バスで美しいハイランド地方を周遊。怪獣ネッシーで名高いネス湖やインバーネス市その他スコットランドの珍しい風物を観賞後、寝台列車でロンドンに帰ります。

翌日はフランスの花の都パリへ飛んで市内を遊覧。希望者は別行動で団体を組んで聖女ベルナデットの奇跡で有名なルールドへ寝台列車で直行、翌日ルールドの大聖堂、洞窟、ベルナデットゆかりの家などを見学し、同夜現地に宿泊。翌朝急行列車で南フランスの美しい田園地帯を観賞しながらパリに帰りますが、その間残留組はまる４日間パリで自由行動を楽しめます。

今回の旅行の特長は、ヨーロッパの観光都市として２大双璧をなすロンドンとパリが主体になっていること、日本人観光団がめったに行かないスコットランドの周遊と、ルールド訪問が組み込まれていること（希望者のみ）、飛行機では味わえない愉快な列車旅行が楽しめることなどにあります。またイギリスは英語の本場ですから、きれいなクィーンズ・イングリッシュを聴いて英会話に磨きをかけるのに絶好のチャンスです。

英仏両国にくわしいベテラン添乗員の田中正（ワールドセブントラベル社幹部・日本ＧＡＰ東京本部役員）と、海外団体旅行引率の経験豊かな、危険をのがれる特殊なカルマをもつＧＡＰ会長・久保田八郎によるＧＡＰ独特の温かい雰囲気に満ちた素晴らしい旅を満喫して下さい。旅行中は２人が親身になってお世話しますし、現地では日本人ガイドが案内します。（ＧＡＰ会員でない方も参加できます）

●期　間　昭和60年８月８日～19日（12日間）

●費　用　¥498,000　（60年度は航空運賃・ホテル代等で若干の変動があるかもしれません。ルールド行きを希望される方は別途料金加算。24回払いローン利用可能。詳細は案内書をご参照下さい）

●案内書　下記へハガキでお申し込み下さい。

ワールドセブントラベル株式会社　田中　正（宛）

〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F　☎(03) 499-2461　夜間・休祭日は(0462) 63-0615

〈予告〉59年度地方支部大会　－その４－

	策１回 神奈川支部大会
日時	11月24日(土) 午後 1：00→5：00
会場と交通	「川崎市立労働会館」４Ｆ　特別会議室：川崎市川崎区富士見2-5-2 ☎（044）222－4416(代表) 川崎駅東口下車駅前中央付近広場のバス停36番より市営ふ頭（東口広場は地下工事をやっていますが地上の方はバス、タクシー発着場になっています）行のバスに乗り、労働会館前で下車。所要時間約５分。 駅前よりタクシーなら２～３分。赤レンガ色の建物。 東京方面からは東京より京浜東北線で。東北、上越方面からは大宮より京浜東北線で来ると便利。
会費	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥ 800を別納。グランドキャビネ判・送料共）
プログラム	司会　石川敏雄 1：00　支部代表挨拶（大崎孝典） 1：05　支部基調報告（内藤重雄） 1：15　会員講演 1：45　講演「アダムスキー問題の核心」（日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生） 3：15　休憩・記念撮影 3：45　質疑応答 5：00　閉会
夕食会	大会終了後 6：00から 8：30まで川崎駅ビル６階「ニュー香港」でテーブルを囲んで中華料理で開催。 会費　¥4000
宿舎	「労働教育福祉センター」をお世話します。 （駅よりタクシーで　５分） ☎（044）333－2111（代） １室３～４名様で宿泊。但しお二人様希望の場合はツインをお世話します。 １泊　¥3500（税サ込） すべて同一料金。
申込	夕食会、宿泊、三浦半島一周バスツアーの申込はハガキで10月末までに下記へお申込下さい。 〒356 埼玉県川越市下赤坂649－19 大崎孝典 ☎（0492）65－0389
観光	大会翌日は海岸線の美しい三浦半島一周バスツアーに行きます。多数ご参加下さい。 朝 8：00より川崎駅前より出発、城ケ島で昼食休憩。午後 4：00新幹線新横浜駅と川崎駅で解散。 参加費用　¥3000
備考	11月の月例会は大会のため中止。 質疑応答の質問はハガキで大崎宛送るか、紙片に記して当日受付に提出して下さい。

絶賛発売中！

ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳　全７巻
徹底的全面改訳決定版

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1. 宇宙からの訪問者
338頁　￥2500
ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第Ｉ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第II部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2. UFO問題の真相
262頁　￥2500
第１巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第II部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

3. UFOとアダムスキー
350頁　￥2500
アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ｉ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第II部とした。

4. 宇　宙　哲　学
148頁　￥1300
人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5. テレパシー開発法
190頁　￥1800
人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の４官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6. 生　命　の　科　学
205頁　￥1800
アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7. アダムスキー論説集
370頁　￥2500
日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第II部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻￥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆１冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。
☆第１巻より第３巻まで一括注文＝特別セット価格　￥7000（送料共）
☆第４巻より第７巻まで一括注文＝特別セット価格　￥6500（送料共）
☆第１巻より第７巻まで一括注文＝全巻セット価格　￥13000（送料共）

郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林　〒162　東京都新宿区榎町33　Tel. 03(267)6920　振替 東京4-2521

新刊〈ポケット・ムー〉シリーズ第１弾！

●久保田八郎著／学研発行

ルールドの奇跡

新書判 160頁・定価 480円／送料 250円

全国の書店で発売中。品切れの節は書店に注文するかまたは下記へ直接ご送金下さい（切手代用可）。
〒145 東京都大田区上池台４－40－５　学研販売部

■1858年２月、フランス南部の寒村ルールドで、世にも不思議な事件が発生した！　14歳の少女ベルナデットはマッサビエユの洞窟で美女のまぼろしと会見し、これが半年にわたって20回近くも続く。この会見時にベルナデットは美女と長時間語り合うが、他人には美女の顔も見えず声も聞こえない。噂はフランス全土に広がって数万の群集が押し寄せる。やがて洞窟のそばから水がわき出て、これを飲んで難病が奇跡的に治る人が続出し、世界的な聖地となる。ノーベル賞受賞の大生物学者アレキシス・カレル博士も洞窟前で驚異的な奇跡を目撃して呆然自失。
■単なる心霊現象や病的な幻覚でもない一少女の体験の謎に挑戦したノンフィクション・ミステリー研究の第一人者・久保田八郎が、現地取材とぼう大な資料により史実を正確に伝えたベルナデット伝記の決定版！

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第２土曜日 午後２：00→６：30 ※11月より第２土曜日に変更。1月は月例会終了後新年会を開催。会費2800円。	上野公園内「東京文化会館」４階会議室。☎03－828－2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本ＧＡＰ　☎03-651-0958	￥300	２：00→３：00会員による体験講演。 ３：00→４：30久保田会長の「宇宙からの訪問者」講義と近況報告、テレパシー練習，休憩。 ４：30→６：30自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00 ※60年１月13日に豊岡市で移動月例会開催。詳細は平塚まで。	大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎ 06－436－3478	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00	新潟駅前「青年の家」☎0252－44－6766 連絡先＝星富治夫　☎02579－2－5562	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
福岡支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	福岡市天神町５丁目１－23「福岡市民会館」３Ｆ　国際会議控室 連絡先＝島津紳二郎　☎092-672-6784	￥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第２日曜日 午後１：00→４：30	名古屋市中区古沢町７－１「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331－2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩５分。 連絡先＝林　国宜　☎ 0586－45－6468	￥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレパシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第４日曜日 午後１：10→４：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222－95－0725	￥200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレパシー練習、座談会。
山形支部	毎月第１日曜日 午後１：00→５：00 ※11月３日に天童市で移動月例会を開催の予定。詳細は清水宛問合せを。	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩３分。☎ 0236－42－5181 連絡先＝清水　正　☎ 0238－37－5635	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第１日曜日 午後１：00→４：30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室　☎011－241－9171 連絡先＝高野昌司　☎ 011－822－8260	￥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開，テレパシー練習，座談会。
静岡支部	毎月第１日曜日 午後１：00→５：00	静岡市駿府町「静岡県婦人会館」会議室 ☎ 0542－54－5215 連絡先＝野口敏治　☎0542－86－7729	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00	旭川市６条通４丁目「勤労者福祉会館」２Ｆ小会議室　☎ 0166－26－1304 連絡先＝阿部　堯 ☎ 01658－２－1585	￥500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表，アダムスキー著「宇宙からの訪問者」「生命の科学」を持参。質疑応答，テレパシー練習，研究発表。
松山支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎ 0898－22－3060	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第２日曜日 午後２：00→６：00	群馬県太田市「社会教育総合センター」３Ｆ。連絡先＝久保寺信一 店　＝☎ 0276－25－5958 自宅＝☎ 0276－45－3544	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室.2）☎ 0177－34－0163 連絡先＝中根　豊　☎ 01756－３－3386	￥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。
沖縄支部	毎月第３日曜日 午後１：00→６：00	〒901-22　宜野湾市野嵩1547　マキシアパート　新里方 連絡先＝新里義雄 ☎ 09889－３－3695	￥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介座談会等。
秋田支部	毎月第２日曜日 午後１：00→５：00	秋田市八橋運動公園１－２「中央公民館」趣味の間。☎ 0188－24－5377 連絡先＝伊藤正治　☎ 0188－62－2831	￥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00 ※11月は24日(土)に支部大会を開催するので月例会は中止。 支部大会の詳細は本誌38頁を参照。	神奈川県川崎市川崎区富士見２－５－２「川崎市立労働会館」第１研修室 ☎ 044－222－4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前 連絡先＝大崎孝典　☎ 0492－65－0389	￥400	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。
茨城支部	毎月第３日曜日 午後２：00→５：00	水戸市梅香１－２「水戸市中央公民館」４Ｆ小集会室　☎0292－24－6600 水戸駅北口より徒歩 10分。 連絡先＝清水勝一　☎ 0292－73－1903	￥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，座談会，研究発表等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.84 主要記事「**月の引力は1/6ではない！**」ウィリアム.L.ブライアン／**私のUFO目撃とGAP活動**」石川公一／**「スペース・ブラザーズは注目している**」伊藤達夫／**「UFO問題とサイレンス・グループ**」イブ・ラウルント／**「奇跡を起こす驚異のイメージ法**」久保田八郎／その他。

No.85 主要記事「**宇宙飛行士の月面の演技!?**」ウィリアム・ブライアン／「**沖縄のUFO事件**」新里義雄／「**テレパシー送信と奇跡的治癒**」鈴木謙次郎／「**ある不思議な一夜**」十菱　麟／「**テレパシーと透視**」久保田八郎その他。

No.86 主要記事「**月には濃密な大気と強い引力がある**」ウィリアム・ブライアン／「**超低空で接近したアダムスキー型円盤！**」遠藤昭則／「**山腹に着陸した巨大な円盤!?**」清水南／「**アダムスキー型円盤、超低空で出現！**」清水正／「**テレパシーと透視(2)**」久保田八郎／その他。

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙からの訪問者」解説講義録音テープ

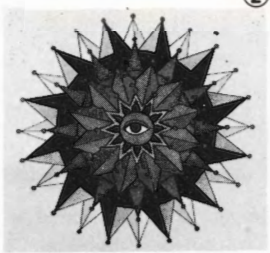
昭和58年12月より59年度中にかけて東京月例研究会で毎月1～2章ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的なものすごい体験の真実性と深遠な宇宙論を再認識する上で最重要な資料。久保田先生ご自身の驚くべき体験も洩らされることがあります。平易な説明と雄大な内容をぜひお聴き下さい。各支部必須のテープ。

テープ1本(90分)　￥1000　〒200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判・カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥600〒120　②￥300〒60一括注文の場合〒120

③テレパシー練習用ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
￥600　〒120

William.L.Brian 著「MOONGATE」

本誌に連載中の「**ムーンゲート**」の原書を取次頒布します。英語学習にも好適。　希望者は定価$11.95を円相場に換算し、送料・手数料￥1,500をプラスして振替でご注文下さい。(注文時に$1.00＝￥240ならば、$11.95に￥240をかける)

日本GAP

編集後記

★本号は遠藤昭則氏の「絶対に真実であったアダムスキーの体験」が出色の記事です。氏は普通人と異なって超能力者であり、また大学で物理を専攻していますから科学知識が豊富で、人格高潔、きわめて円満なタイプの人。アダムスキー問題の支持者としてはトップクラスに入る熱意のある方です。熟読含味して下さい。

★「丸窓の並んだ母船が出現！」の後藤澄子さんも特異な能力の持主で、しばしばUFOを目撃される方です。本号の記事は目撃体験の一部分にすぎません。

★本号は新しい試みとして松原眞弓氏の未来予想記事「二十一世紀の地球」を掲載しました。本誌はノンフィクション記事の専門誌ですが、たまには来世紀のイメージを描くのもわるくはないでしょう。しかも筆者はアダムスキー問題を的確に把握しています。

★編者の「異星人イエスの足跡を訪ねて」は少々長くなって恐縮ですが、キリスト教という宗教の教祖としてでなく、アダムスキー問題に関連のある〝重要人物〟としてのイエスを追跡しているわけで、つい熱が入りがちです。ご了承下さい。

★今年度の支部大会は十月二十八日の福岡支部大会、十一月二十四日の神奈川支部大会を残すのみとなり、他はいずれも大成功裡に終了しました。また九月二十三日の東京における総会も大盛況でした。出席者各位に厚くお礼を申し上げます。

★来年度の海外研修旅行は38頁の予告どおりイギリスとフランスの旅を実施しますので、多数ご参加下されば幸いです。外国の旅は計り知れぬほど人間の目を開かせますから、出かけるだけの価値はあります。

★本誌は読者から原稿を募集していますが、応募状況はかんばしくありません。特異なUFO目撃をした方で原稿を書くのが苦手という方は、ご一報下されば出張して対談形式で記事を作成しますから、遠慮なくお知らせ下さい。

★本誌のバックナンバーで書店に委託した売れ残り返品のキズものがかなり保存してあります。捨てるのももったいないので、これを献本用に活用して下さる方には無料で差し上げますから、送料として六十円切手十枚を同封してお申し込み下さい。十冊ないし三十冊ぐらいまでお送りしますから、これを病院待合室、理髪店、その他人が集まる場所に無料で配布して下されば幸いです。キズものですから売るのはご遠慮下さい。

★東京月例会の本年度解説講義はアダムスキー全集第1巻「宇宙からの訪問者」をテキストにしていましたが、来年度一月からは第5巻「テレパシー開発法」を解説しますので、各支部も月例会でこれをテキストに研究実践されるようにお願いします。会員にとってはテレパシー開発が急務ですから、来年度は東京月例会で練習法を強化してトレーニングを行う予定です。

★**東京月例会は従来毎月第一土曜日に開催されていましたが、諸般の事情により十一月から毎月第二土曜日実施に変更しますのでお間違いなきようにお願いいたします。したがって十一月は十日となります。会場は従来どおり上野公園内の東京文化会館四階大会議室で、夕方は別な場所で安い費用の楽しい夕食会を開きます。多数ご出席下さい。**(K)

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！
多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！
入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

—日本GAP—

日本GAP機関誌・季刊　冬季号
UFO contactee 87号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色町365－818
TEL(03)651－0958
振替東京4－35912
一九八四年十月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円